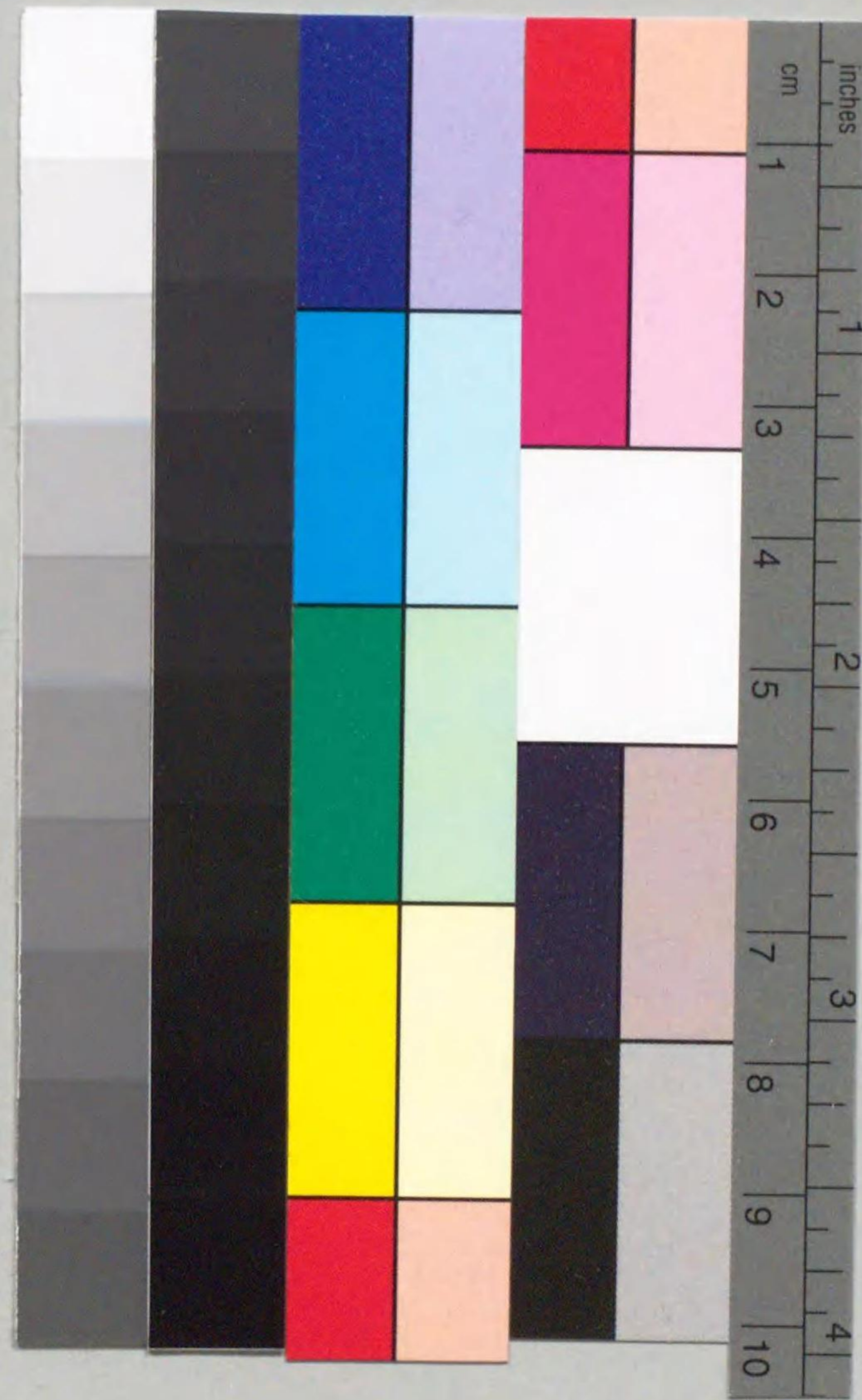




東京市立小學校兒童

震災記念文集

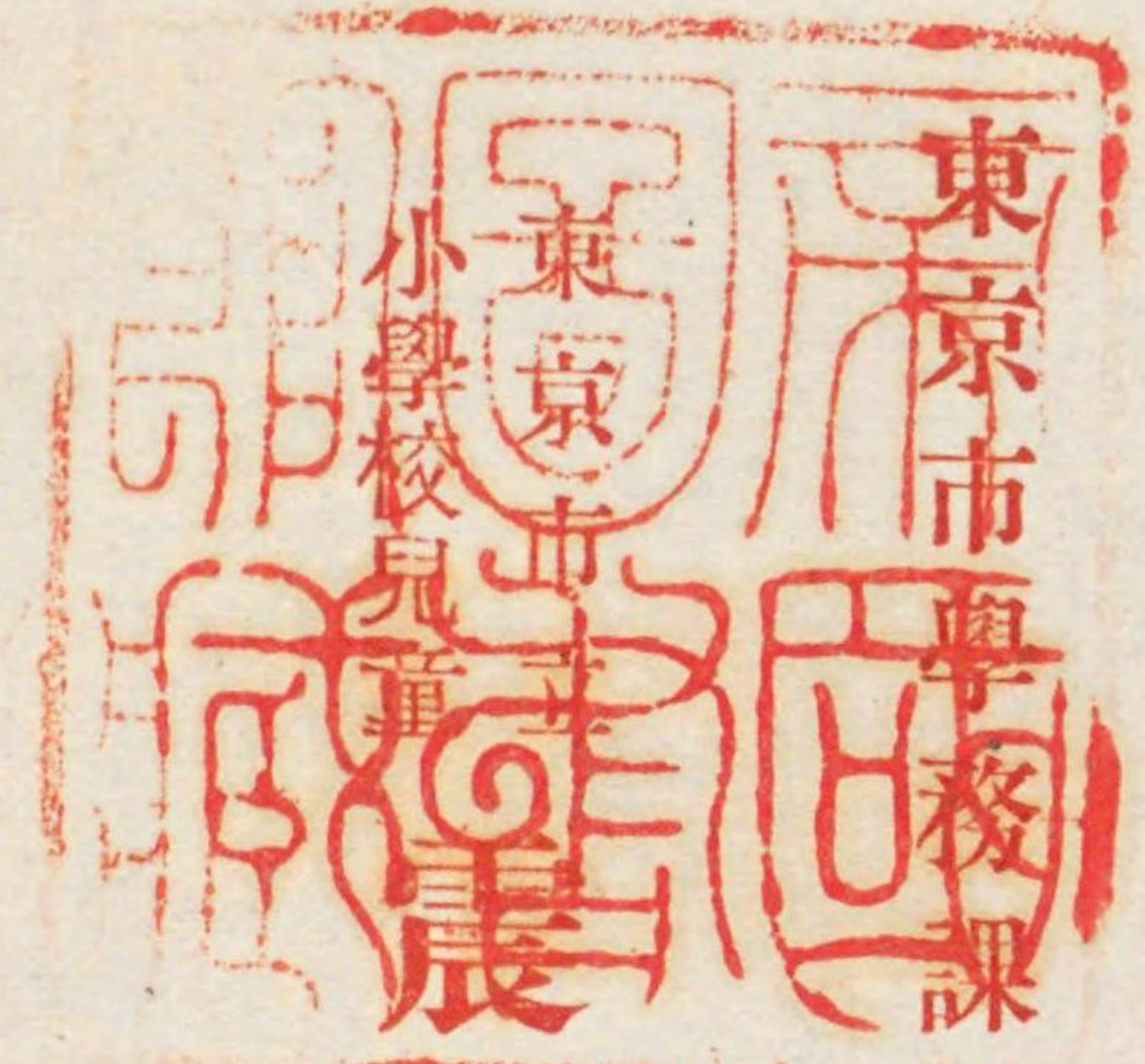
尋常五年の巻





大正
紀念文集





東京市學務課編纂

災記念文集

大正
13.9.9
内交

1924





麻布區 三河臺小學校
尋常五學年 池田 阿貴子

24
T-19



小學生文集
東京市學務局編

五河臺小學校



150199

序

児童は實に純真なもので、その児童の天真流露に觸るゝ時、特に偉大な衝動を受くるものである。

本市學務課は、今春震災記念展覽會を上野自治會館に於て開催し、市立小學校兒童の創作を公開した。圖畫手工綴方何れも震災に因んだもので、その出來榮は實に立派なもので、一覽かの震災が如何に彼等純真な小市民を脅かしたか、窺はれて、涙なしには到底見られぬ尊いものであつた。この尊い可憐な創作を、このまゝ、筐底に納めて仕舞ふことは誠に残念に思ふので、特に綴方の部を編して上梓することゝなつた。

古來天災地變は幾度か人類を脅威し、我等の祖先はこの脅威から幾度か復興して當時の記録を残したのであるが、さて其の當時の幼者の手に成れる天真の創作を發見し得ぬ事は聊か物足らぬ感がする、しかるに常に恵まれたる現代の小市民の教養は、かの大難の體驗を叙してこの記録をなさしめた。これを永く後昆に傳ふことはあながち徒爾ではあるまいと思ふ。蓋し創作者たる小市民が後年市民として復興せる帝都に座し、この文集を彼等の兒女と共に繙くの時、果して如何なる感想を起すことであらうか。まことに好箇の記念文集といはざるを得ない。私はかゝる意味でこの小市民諸君の文集に敬意を表する次第である。

大正十三年八月十八日

東京市長

永田秀次郎

序

大正十二年九月一日突如として襲來せる彼の酸鼻極りなき振古未曾有の大變災が、我が東京市民に與へたる物質的精神的の損害と打撃とは實に測り知るべからざるものであつたが、しかも我が東京市民は沈着冷靜よく其の常軌を逸せず、恒心を失はず、此の悲酸なる痛手にも屈せず、畏くも彼の國民精神作興の詔書の御精神を體し、恰も春草の萌え出づるが如き元氣を以て、孜々營復興に努力し、今や土地區劃整理も其の緒に就き、商工業其他も追々復興し、十五萬の罹災學童も既に七割以上の復歸を見るに至り、學校本建築の事業も着々進行しつゝあり、罹災當時の慘憺たりし光景は殆どこれを觀るを得ざるに至つたといふことは、眞に喜ぶべく慶すべき事と謂はればならぬ。

本年三月我が學務課が主催して、本市各小學校兒童の圖畫手工綴り方等の成績物を出品せしめ、震災記念展覽會を上野自治會館に開催し、一般市民の觀覽に供したる後、それを震災當時多大なる同情を寄與せられたる内外の各地に贈呈して、聊か感謝の意を表する一端としたのであつたが、其の際の出品物は何れも兒童達が純眞なる個性の表現であると共に、眞に彼等の體驗に基づく最

も貴重すべき震災の記録であつて、就中其の綴り方の如き、讀み去り讀み來れば、そゞろに當時の状況を回想して、到底涙なしには讀了し得られぬ底のものが尠くなかつた。

然るにも拘らず、綴り方成績物は其の性質上、圖畫手工の成績物の如く一目してこれを觀覽することの出來ぬものであるから、自然一般觀覽者も空しく看過するの遺憾を感じられたことと思はれる。乃ち茲にこれを印刷に附して世に公にし、前記の遺憾を補ふと共に、前古未曾有の大變災を永遠に記念し、長く國民教養の資に供することゝした次第である。若し夫れ本市震災記念館が建設せらるゝならば、其の陳列品の一として蓋し本文集の如きは最も價値ある記念品となることであらう。

大正十三年八月十八日

東京市學務課長

佐々木吉三郎

凡例

- 一、本書は大震災火災後、東京市學務課が主催者となつて、全市小學校兒童の精神的復興を圖ると共に、一面技能科の向上に資する目的を以て開催した「震災記念作品展覧會」出品の綴方作品を全部網羅したもので、東京市内百九十六の小學校から撰拔された二千有餘の兒童の作品を尋常一年から六年まで學年別に六卷、高等科一卷、計七卷に收めたものである。掲載の順位は出品學校の行政区順に依ることとした。
 - 二、震災記念展覧會は大正十三年三月一日の開催であるから、兒童が震災火災の印象を實際執筆した時は大正十二年の震災直後であるとしても、之を展覧會に出品した時の年齢は震災の年から各々一歳を加へたことになつて居る。又本書が發行された震災一周年記念日には其の學年も一級進んで居る筈である。
 - 三、技能向上の目的から、必ずしも震災に關係のない文章も、展覧會に出品されたものは全部掲載されて居る、之等のうちには主題内容の冬季に屬するものが多い。之れは展覧會が三月であつた關係である。
 - 四、口繪は其の學年の兒童の作品中製版に適するものから採つたが、文章中の挿繪は印刷の都合で残念ながら全部判愛することにした、そのため行文中の説明に挿繪を用ゐたものには、多少具合の悪いところも出來たが、全部そのまゝにして一切添作加筆せぬことにした。
 - 五、その他、本書の校正は讀解の出來得る限り、全部原稿そのまゝといふことを標準にした。標題、姓名、年齢の記載法、並びに句讀、假名遣ひ等が、一巻のうちでも學校及び各兒童によつて往々區々になつて居るのは主として此のためである。
- 併し原稿轉寫並びに印刷を急いだために生じた不備な點も尠くないであらう。之は出品者諸彦並びに讀者諸君の御寛容を乞ふ次第である。

目次 〔五學年〕

復興をいそぐ	同	麴町區番町	中西利英	一
帝都の復興	同	同	山田茂子	二
地震たるま	同	麴町區富士見	宮川正夫	三
バラック村の	同	同	竹内瀧子	四
復興の東京	同	麴町區麴町	福田一郎	五
私の感じたお	同	同	高羽智津子	六
ばあさん	同	同	稻生茂雄	七
餅焼き	同	日比谷	日向八重	八
まり	同	同	日向八重	八
電話局	同	上六	原田健太郎	九
みなみの空	同	同	城井安子	一〇
なつかしい松	同	同	中原芳子	一一
本さんへ	同	同	中山直志	一二
帝都興と吾	同	永田町	山田直志	一三
等	同	同	丹澤田鶴子	一四
お節句	同	同	丹澤田鶴子	一五
思ひ出すあの	同	同	丹澤田鶴子	一五
一日	同	神田區錦華	橋英則	一六
避難	同	同	橋英則	一六
嵐の夜	同	同	橋英則	一六

目次

あゝマルよ今	同	神田區淡路	石出はな子	一九
どこに	同	同	石出はな子	一九
忘れない此の	同	同	石出はな子	一九
地震	同	同	石出はな子	一九
震災にあつ	同	同	石出はな子	一九
て	同	同	石出はな子	一九
大震災	同	同	石出はな子	一九
大震災	同	同	石出はな子	一九
バラック街の	同	同	石出はな子	一九
朝	同	同	石出はな子	一九
去年の大震災	同	同	石出はな子	一九
災	同	同	石出はな子	一九
あゝ大震災	同	同	石出はな子	一九
臆病者になつて	同	同	石出はな子	一九
しまひました	同	同	石出はな子	一九
雪合戦	同	同	石出はな子	一九
大震災の記	同	同	石出はな子	一九
復興の朝	同	同	石出はな子	一九
九月一日から二	同	同	石出はな子	一九
日の朝にかけて	同	同	石出はな子	一九
焼跡の市内	同	同	石出はな子	一九
避難中での美	同	同	石出はな子	一九
談	同	同	石出はな子	一九

目次

震火災を知らず文	神田區西小川	明嵐正章	三〇
震災後の田舎の伯母へ	同	篠俊子	三〇
大正の大震災	同	今川佐島正仁	三一
よいお母さん	同	神山美枝子	三一
九月一日の大震災	同	神龍鳥光	三二
恐ろしい思出	同	萩田はな	三二
震焼	同	萩田はな	三二
バラツクの校舎で学ぶ	同	芳林高橋藤雄	三三
焼けた学校の思ひ出	同	堀江ハマ子	三三
僕の伯父と伯母	日本橋	君野辰之助	三四
静かな朝	同	井上トシ子	三四
苦しい中の嬉しさ	同	坂本竹内太喜男	三五
自轉車	同	市川光枝	三五
大正十二年九月一日	同	坊野喜太郎	三六
家から丸の内へ	同	梅本ふみ	三六
復興する夜の大通り	同	城東澤田欣二	三六
バラツクの教室	同	鈴木シヅエ	三六

二

思ひ出	日本橋有馬	本田政雄	三六
バラツク生活の一日	同	榎原八重子	三六
思ひ出	同	千代田戸塚朝之助	三七
御母さん	同	同	三七
上野の一夜	同	同	三七
安心するまで	同	同	三七
復興の東京	同	同	三七
罹災して	同	同	三七
赤い靴	同	同	三七
バラツクの夜	同	同	三七
帝都復興	同	同	三七
帝都の復興	同	同	三七
大地震	同	同	三七
丸の内へ行くまで	同	同	三七
学校の體操機械	同	同	三七
ふとん	同	同	三七
バラツクの町	同	同	三七
停電の夜	同	同	三七

目次

九月一日より五日まで	京橋區	泰明	三七
復興を想ふて	同	同	三七
帝都復興	同	同	三七
目黒火薬庫跡の一夜	同	同	三七
震災餘談	同	同	三七
震災餘談	同	同	三七
御成婚の日	同	同	三七
新佃の信ちやん	同	同	三七
僕の震災遭難記	同	同	三七
思ひ出	同	同	三七
不幸な人を思ふて	同	同	三七
私の家の犬	同	同	三七
やあもう春だ	同	同	三七
恐ろしい思出	同	同	三七
地震	同	同	三七
避難先	同	同	三七
恐ろしい思出	同	同	三七
焼しかつた紅	同	同	三七

三

なつかしい京橋學校	京橋區	京橋	三三
大東京市の爲に	同	同	三三
可愛あい子	同	同	三三
父母の顔を見るまで	同	同	三三
机にもたれて	同	同	三三
少年の夕刊賣	同	同	三三
復興の春	同	同	三三
節分の夜	同	同	三三
雪の朝	同	同	三三
復興三題	同	同	三三
東京から	同	同	三三
バラツクに同	同	同	三三
思ひ出の多い	同	同	三三
大地震	同	同	三三
夜警	同	同	三三
母を待つ僕等	同	同	三三
可愛らしいイ	同	同	三三

目次

やつこだこを上げた時	同	芝	田中庸政	二四
都の朝	同	芝	片岡まつ子	二四
此の頃の私の家	同	芝	矢野茂雄	二五
新しい校舎に移った時	同	同	平子貞子	二五
豆まき	同	西	松田満	二五
我が希望	同	同	酒井マキ	二五
兄いづこに	同	臺	伊藤佐喜代	二五
雪の朝	同	同	鹽澤茂	二五
一月二十六日	同	三	中村正夫	二五
或る日の叫び	同	同	毛利文枝	二七
震災の思ひ出	同	同	聖坂松澤和男	二七
吾等の覺悟	同	同	高橋静江子	二七
近況を通知す	同	同	愛宕竹中市郎	二七
春を待つ	同	同	同	二七
節分	同	同	同	二七
風が吹く	同	同	同	二七
なつかしい我が學び	同	同	同	二七

四

となりのよし	同	芝	本間俊雄	二七
雪の朝	同	同	小林幸子	二七
大震災の思出	同	同	田中清	二七
大震災の學校	同	同	谷口發世	二七
大震災の思出	同	同	寺川文夫	二七
一月十五日の地震	同	同	阿部光	二七
春日局	同	同	同	二七
夜警一夜	同	同	同	二七
大震災	同	同	同	二七
大地震	同	同	同	二七
あの時	同	同	同	二七
大震災の思出	同	同	同	二七
夜警	同	同	同	二七
〇八騒ぎ	同	同	同	二七
震火災	同	同	同	二七
東宮殿下御成婚	同	同	同	二七
あゝ九月一日	同	同	同	二七
犬の兄弟	同	同	同	二七
大地震	同	同	同	二七

目次

大地はゆるぐ	同	麻布區	茂木正郎	二〇三
思ひ起す	同	同	上土井初榮	二〇三
二日	同	同	同	二〇三
バラック	同	同	同	二〇三
大地震後の思ひ出	同	同	同	二〇三
大地震火災	同	同	同	二〇三
お兄様の胸に	同	同	同	二〇三
冬のバラック	同	同	同	二〇三
私達の復興	同	同	同	二〇三
九月一日の地震	同	同	同	二〇三
氣の毒な人々	同	同	同	二〇三
九月一日の大	同	同	同	二〇三
地震	同	同	同	二〇三
九月一日	同	同	同	二〇三
大地震に大火事	同	同	同	二〇三
避難者	同	同	同	二〇三
あゝあはれな	同	同	同	二〇三
帝都復興	同	同	同	二〇三
九月一日の夜	同	同	同	二〇三
我が家の燒跡	同	同	同	二〇三
地震	同	同	同	二〇三

五

大地震の思出	同	四谷區	齊藤文一郎	二〇三
同情	同	同	勝田義子	二〇三
大地震の夜	同	同	池田正偉	二〇三
地震の後の私	同	同	高野千枝	二〇三
今年のお正月	同	同	小田信	二〇三
心地よきお湯	同	同	光井雪枝	二〇三
震災の後の願	同	同	山口正太郎	二〇三
親愛なる大阪	同	同	奥山光子	二〇三
の友よ	同	同	同	二〇三
九月一日の大	同	同	同	二〇三
地震	同	同	同	二〇三
にげる時	同	同	同	二〇三
避難するまで	同	同	同	二〇三
悲しかった地	同	同	同	二〇三
震の日	同	同	同	二〇三
帝都復興	同	同	同	二〇三
震火災	同	同	同	二〇三
恐怖朝	同	同	同	二〇三
好宿	同	同	同	二〇三
大震災	同	同	同	二〇三
火事々々	同	同	同	二〇三

目次

復興	牛込區	余丁町	三上初代	三六〇
大震災	同	津久戸	鳥飼行定	三六一
地震の一夜	同	川崎	貞子	三六三
お正月が近づいた	同	江戸川	仁木稔	三六五
此の頃の夕暮	同	千葉	富士子	三六六
震災當時	同	市谷	堤誠	三六七
震災の思ひ出	同	周藤	多鶴子	三六八
大震災	同	牛込	今村成男	三六九
震災後の私等	同	同	平井武子	三七〇
一日の生活	同	同	桑原尙一	三七二
九月一日	同	同	山吹	三七三
復興の精神	同	同	松元スミ	三七五
大地震を思ひ出して	同	同	長延	三七七
木枯吹く夜	同	同	加藤アエ	三七七
或々暮	同	同	小石川區	三七八
復興の神田	同	同	神沼政子	三七九
復興の神田	同	同	明化	三八〇
復興の神田	同	同	桂米子	三八二
大地震の後に	同	同	黒田加藤	三八三
大地震の後に	同	同	井上薰子	三八四

六

大地震	小石川區	柳町	寺田光治	三六五				
地理の試験	同	同	上野敏子	三六六				
大震災に就て	同	小日向臺町	田中榮郎	三六八				
しんちゃん	同	同	關千代子	三六九				
張良	同	同	金富森	三七一				
不平	同	同	鎌田正秋	三九四				
なくなつたお母さん	同	同	豊島喜美江	三九四				
帝都復興第一	同	同	御殿町	今泉正雄	三九五			
恐ろしかった今朝	同	同	同	萬上登美	三九六			
展覽會の苦心	同	同	同	青柳杉浦	三九七			
地震の日	同	同	同	中島茂子	三九八			
また大地震	同	同	同	指ヶ谷	矢下正治郎	三九八		
くつの行衛	同	同	同	同	牧野富士江	三九八		
大地震	同	同	同	同	大塚	渡邊新太郎	三九八	
スエーデンのお友達へ	同	同	同	同	同	千葉富美枝	三九八	
大火事の日に	同	同	同	同	同	駕籠町	柳川重雄	三九五
九月一日	同	同	同	同	同	同	七海千代	三九六
大地震大火災	同	同	同	同	同	同	佐々木喜代子	三九八

目次

帝都復興	小石川區	林町	高木良雄	三二〇	
地震	同	同	飯塚節子	三二二	
九月の大火災	本郷區	湯島	大島愛助	三二四	
九月一日	同	同	上野美重子	三二六	
九月一日	同	同	誠之	布田正夫	三二八
九月一日	同	同	同	同	三二九
九月一日	同	同	同	同	三三〇
九月一日	同	同	同	同	三三一
九月一日	同	同	同	同	三三二
九月一日	同	同	同	同	三三三
九月一日	同	同	同	同	三三四
九月一日	同	同	同	同	三三五
九月一日	同	同	同	同	三三六
九月一日	同	同	同	同	三三七
九月一日	同	同	同	同	三三八
九月一日	同	同	同	同	三三九
九月一日	同	同	同	同	三四〇
九月一日	同	同	同	同	三四一
九月一日	同	同	同	同	三四二
九月一日	同	同	同	同	三四三
九月一日	同	同	同	同	三四四
九月一日	同	同	同	同	三四五
九月一日	同	同	同	同	三四六
九月一日	同	同	同	同	三四七
九月一日	同	同	同	同	三四八
九月一日	同	同	同	同	三四九
九月一日	同	同	同	同	三五〇
九月一日	同	同	同	同	三五二
九月一日	同	同	同	同	三五三
九月一日	同	同	同	同	三五四
九月一日	同	同	同	同	三五五
九月一日	同	同	同	同	三五六
九月一日	同	同	同	同	三五七
九月一日	同	同	同	同	三五八
九月一日	同	同	同	同	三五九
九月一日	同	同	同	同	三六〇
九月一日	同	同	同	同	三六一
九月一日	同	同	同	同	三六二
九月一日	同	同	同	同	三六三
九月一日	同	同	同	同	三六四
九月一日	同	同	同	同	三六五
九月一日	同	同	同	同	三六六
九月一日	同	同	同	同	三六七
九月一日	同	同	同	同	三六八
九月一日	同	同	同	同	三六九
九月一日	同	同	同	同	三七〇
九月一日	同	同	同	同	三七二
九月一日	同	同	同	同	三七三
九月一日	同	同	同	同	三七四
九月一日	同	同	同	同	三七五
九月一日	同	同	同	同	三七六
九月一日	同	同	同	同	三七七
九月一日	同	同	同	同	三七八
九月一日	同	同	同	同	三七九
九月一日	同	同	同	同	三八〇
九月一日	同	同	同	同	三八二
九月一日	同	同	同	同	三八三
九月一日	同	同	同	同	三八四
九月一日	同	同	同	同	三八五
九月一日	同	同	同	同	三八六
九月一日	同	同	同	同	三八七
九月一日	同	同	同	同	三八八
九月一日	同	同	同	同	三八九
九月一日	同	同	同	同	三九〇
九月一日	同	同	同	同	三九二
九月一日	同	同	同	同	三九三
九月一日	同	同	同	同	三九五
九月一日	同	同	同	同	三九六
九月一日	同	同	同	同	三九七
九月一日	同	同	同	同	三九八
九月一日	同	同	同	同	三九九
九月一日	同	同	同	同	四〇〇
九月一日	同	同	同	同	四〇二
九月一日	同	同	同	同	四〇三
九月一日	同	同	同	同	四〇四
九月一日	同	同	同	同	四〇五
九月一日	同	同	同	同	四〇六
九月一日	同	同	同	同	四〇七
九月一日	同	同	同	同	四〇八
九月一日	同	同	同	同	四〇九
九月一日	同	同	同	同	四一〇
九月一日	同	同	同	同	四一二
九月一日	同	同	同	同	四一三
九月一日	同	同	同	同	四一四
九月一日	同	同	同	同	四一五
九月一日	同	同	同	同	四一六
九月一日	同	同	同	同	四一七
九月一日	同	同	同	同	四一八
九月一日	同	同	同	同	四一九
九月一日	同	同	同	同	四二〇
九月一日	同	同	同	同	四二二
九月一日	同	同	同	同	四二三
九月一日	同	同	同	同	四二四
九月一日	同	同	同	同	四二五
九月一日	同	同	同	同	四二六
九月一日	同	同	同	同	四二七
九月一日	同	同	同	同	四二八
九月一日	同	同	同	同	四二九
九月一日	同	同	同	同	四三〇
九月一日	同	同	同	同	四三二
九月一日	同	同	同	同	四三三
九月一日	同	同	同	同	四三四
九月一日	同	同	同	同	四三五
九月一日	同	同	同	同	四三六
九月一日	同	同	同	同	四三七
九月一日	同	同	同	同	四三八
九月一日	同	同	同	同	四三九
九月一日	同	同	同	同	四四〇
九月一日	同	同	同	同	四四二
九月一日	同	同	同	同	四四三
九月一日	同	同	同	同	四四四
九月一日	同	同	同	同	四四五
九月一日	同	同	同	同	四四六
九月一日	同	同	同	同	四四七
九月一日	同	同	同	同	四四八
九月一日	同	同	同	同	四四九
九月一日	同	同	同	同	四五〇
九月一日	同	同	同	同	四五二
九月一日	同	同	同	同	四五三
九月一日	同	同	同	同	四五四
九月一日	同	同	同	同	四五五
九月一日	同	同	同	同	四五六
九月一日	同	同	同	同	四五七
九月一日	同	同	同	同	四五八
九月一日	同	同	同	同	四五九
九月一日	同	同	同	同	四六〇
九月一日	同	同	同	同	四六二
九月一日	同	同	同	同	四六三
九月一日	同	同	同	同	四六四
九月一日	同	同	同	同	四六五
九月一日	同	同	同	同	四六六
九月一日	同	同	同	同	四六七
九月一日	同	同	同	同	四六八
九月一日	同	同	同	同	四六九
九月一日	同	同	同	同	四七〇
九月一日	同	同	同	同	四七二
九月一日	同	同	同	同	四七三
九月一日	同	同	同	同	四七四
九月一日	同	同	同	同	四七五
九月一日	同	同	同	同	四七六
九月一日	同	同	同	同	四七七
九月一日	同	同	同	同	四七八
九月一日	同	同	同	同	四七九
九月一日	同	同	同	同	四八〇
九月一日	同	同	同	同	四八二
九月一日	同	同	同	同	四八三
九月一日	同	同	同	同	四八四
九月一日	同	同	同	同	四八五
九月一日	同	同	同	同	四八六
九月一日	同	同	同	同	四八七
九月一日	同	同	同	同	四八八
九月一日	同	同	同	同	四八九
九月一日	同	同	同	同	四九〇
九月一日	同	同	同	同	四九二
九月一日	同	同	同	同	四九三
九月一日	同	同	同	同	四九四
九月一日	同	同	同	同	四九五
九月一日	同	同	同	同	四九六
九月一日	同	同	同	同	四九七
九月一日	同	同	同	同	四九八
九月一日	同	同	同	同	四九九
九月一日	同	同	同	同	五〇〇
九月一日	同	同	同	同	五〇二
九月一日	同	同	同	同	五〇三
九月一日	同	同	同	同	五〇四
九月一日	同	同	同	同	五〇五
九月一日	同	同	同	同	五〇六
九月一日	同	同	同	同	五〇七
九月一日	同	同	同	同	五〇八
九月一日	同	同	同	同	五〇九
九月一日	同	同	同	同	五一〇
九月一日	同	同	同	同	五一二
九月一日	同	同	同	同	五一三
九月一日	同	同	同	同	五一四
九月一日	同	同	同	同	五一五
九月一日	同	同	同	同	五一六
九月一日	同	同	同	同	五一七
九月一日	同	同	同	同	五一八
九月一日	同	同	同	同	五一九
九月一日	同	同	同	同	五二〇
九月一日	同	同	同	同	五二二
九月一日	同	同	同	同	五二三
九月一日	同	同	同	同	五二四
九月一日	同	同	同	同	五二五
九月一日	同	同	同	同	五二六
九月一日	同	同	同	同	五二七
九月一日	同	同	同	同	五二八
九月一日	同	同	同	同	五二九
九月一日	同	同	同	同	五三〇
九月一日	同	同	同	同	五三二
九月一日	同	同	同	同	五三三
九月一日	同	同	同	同	五三四
九月一日	同	同	同	同	五三五
九月一日	同	同	同	同	五三六
九月一日	同	同	同	同	五三七
九月一日	同	同	同	同	五三八
九月一日	同	同	同	同	五三九
九月一日	同	同	同	同	五四〇
九月一日	同	同	同	同	五四二
九月一日	同	同	同	同	五四三
九月一日	同	同	同	同	五四四
九月一日	同	同	同	同	五四五
九月一日	同	同	同	同	五四六
九月一日	同	同	同	同	五四七
九月一日	同	同	同	同	五四八
九月一日	同	同	同	同	五四九
九月一日	同	同	同	同	五五〇
九月一日	同	同	同	同	五五二
九月一日	同	同	同	同	五五三
九月一日	同	同	同	同	五五四
九月一日	同	同	同	同	五五五
九月一日	同	同	同	同	五五六
九月一日	同	同	同	同	五五七
九月一日	同	同	同	同	五五八
九月一日	同	同	同	同	五五九
九月一日	同	同	同	同	五六〇
九月一日	同	同	同	同	五六二
九月一日	同	同	同	同	五六三
九月一日	同	同	同	同	五六四
九月一日	同	同	同	同	五六五
九月一日	同	同	同	同	五六六
九月一日	同	同	同	同	五六七
九月一日	同	同	同	同	五六八
九月一日	同	同	同	同	五六九
九月一日	同	同	同	同	五七〇
九月一日	同	同	同	同	五七二
九月一日	同	同	同	同	五七三
九月一日	同	同	同	同	五七四
九月一日	同	同	同	同	五七五
九月一日	同	同	同	同	五七六
九月一日	同	同	同	同	五七七
九月一日	同	同	同	同	五七八
九月一日	同	同	同	同	五七九
九月一日	同	同	同	同	五八〇
九月一日	同	同	同	同	五八二
九月一日	同	同	同	同	五八三
九月一日	同	同	同	同	五八四

目次

わが家へ歸る	下谷區	御徒町	伊藤國枝	三七六
復興の新年	同	谷中	山崎正一	三八一
元の東京へ	同	同	鈴木安子	三八二
東京市の復興	同	金曾木	前田一男	三八三
私達の覺悟	同	同	大川正子	三八四
まあよかつた	同	黒門	永峰武雄	三八五
どうして學校の	同	同	渡邊ゆき子	三八七
前とめてく	同	同	同	三八七
なかつたのか	同	山伏町	天野鶴松	三八九
九月一日の大	同	同	渡邊イシ子	三九一
地震	同	同	同	三九一
町へ歸る時	同	竹町	木村新造	三九三
パラツクの生活	同	同	原美子	三九四
大震災當時	同	同	金井孝太郎	三九四
の思ひ出	同	同	大塚タカ	三九六
大震災の思ひ出	同	同	同	三九六
震災後の出來事	同	龍泉	藤森明正	三九八
大震災の記	同	同	坂田つね	三九八
姉の死	同	同	大正有坂喜代志	四〇一
寒い冬	同	同	木村もと	四〇一
震災がなかつ	同	同	同	四〇一
たら	同	萬年	浅井二郎	四〇三

八

静かな夜	下谷區	萬年	南保キヌ	四〇三
猛火に襲はれて	同	待乳山	富岡進	四〇三
父に焼跡へ	同	同	市川しん	四〇四
大正大震災	同	同	同	四〇四
日誌	同	同	同	四〇四
復興のかくこ	同	同	同	四〇四
私達の後	同	同	同	四〇四
私の學校	同	同	同	四〇四
私の學校	同	同	同	四〇四
學校がへり	同	同	同	四〇四
燒跡	同	同	同	四〇四
燒跡	同	同	同	四〇四
燒けだされて	同	同	同	四〇四
春が來たら	同	同	同	四〇四
納豆賣り	同	同	同	四〇四
學校の燒跡	同	同	同	四〇四
パラツクの新年	同	同	同	四〇四
おそろしかつ	同	同	同	四〇四
おろした地震	同	同	同	四〇四
人のなさけ	同	同	同	四〇四
大震災の後	同	同	同	四〇四

目次

上野の山へ	淺草區	松葉	長尾綾子	四二二
火事のおぼれた	同	同	吉吉爲文	四二三
九月一日を思	同	同	同	四二三
ひ出して	同	同	同	四二三
正一さんは今ど	同	同	同	四二三
こにおるだらう	同	同	同	四二三
九月一日	同	同	同	四二三
僕の望んでお	同	同	同	四二三
る家	同	同	同	四二三
さあこれから	同	同	同	四二三
大震災後の生活	同	同	同	四二三
大震災當時の	同	同	同	四二三
有様	同	同	同	四二三
紀元節の日	同	同	同	四二三
私の家	同	同	同	四二三
みかんつり	同	同	同	四二三
月の夜	同	同	同	四二三
パラツク住ひ	同	同	同	四二三
の苦しき	同	同	同	四二三
死んだカナリヤ	同	同	同	四二三
忘れられぬこと	同	同	同	四二三
父兄にあふ	同	同	同	四二三
復興まで	同	同	同	四二三

九

恐しき九月一日	日本所區	牛島	小澤げつ子	四五三
避難	同	同	武内重三	四五五
震災後	同	同	鬼兒島正子	四五七
大震災の時の	同	同	高橋長之助	四五九
被服廠の中	同	同	北村幸子	四六〇
大震災	同	同	榎本貞三	四六二
震災記	同	同	梶島砂子	四六四
近況を友へ	同	同	小島保利	四六九
お父さんの商賣	同	同	田中花	四七〇
おレコンの姉	同	同	三橋勝	四七二
震災について	同	同	照井はる子	四七四
復興の春	同	同	鈴木英雄	四七五
禮狀	同	同	伊藤げん子	四七六
大震災	同	同	相馬六郎	四七六
大震災も灰に	同	同	山本たか子	四七六
なつた	同	同	幕田信	四八四
パラツクの生活	同	同	吉村ハル	四八五
大震災	同	同	吉田正次	四八六
川の中	同	同	福島良子	四八七

目次

あゝ大正十二年九月一日の大地震	本所區	横近藤	富士男	四八
父母をうづつた大地震	同	遠藤	千代子	四九
新校舎の様子を知らせる手紙	同	外手	野本福一郎	四九
被服廠跡	同	中村	君子	四九
九月一日の大震災	同	業平	石松輝男	四九
帝都復興	同	山本	久	四九
忘れられぬ日川の中に入つてゐるうち	同	小梅	太田正吉郎	四九
焼跡	同	柳元	八十田清徳	五〇
震災	同	勝倉	ハツ	五〇
大震災を顧て大火事からのこと	同	三笠	尾崎桂作	五〇
あざ	同	菊川	富山敏子	五〇
節分の晩	同	長濱	ゆき	五〇
大地震の話	同	太平	中谷一	五〇
給食の感想	同	飯田	正八郎	五〇
深川の復興	深川區	深川	木之下謙吉	五〇

震災の中を逃げた時	深川區	八名川	佐々木正治	五三
野宿	同	高橋	登喜子	五三
あけがたの地震	同	川南	大澤太郎	五三
バラツクの生活	同	成田	フミ	五三
七時頃の停留場	同	明治第二	井上綱子	五三

目次

思ひ出	深川區	明治	島田てい	五三
震災と其の後	同	靈岸	齋藤武雄	五三
震災	同	飯塚	しづ	五三
復興の道へ	同	猿江	山田賢	五三
火の海を通りぬけて	同	大久保	まつ	五三

復興をいそぐ東京

麴町區 番町尋常小學校

第五學年男 中西 利英 (十三歲)

恐ろしかつた大震災の印象、思つてもぞつとする。然しわが活氣に滿つ東京市民は、いたづらに過去をなげかぬ。

はや市内の諸所には、バラックが立ち、新東京芽生のさきがけをしてゐる。

見にくかつた方々の残がいも、もはや跡方もなく、トツカントツカンと復興に急ぐ、力のこもつたつちの音が聞える。

不だんからび笑をたゝえてゐるお堀の水も、牛ケふちのバラックをうつして、さびしさうに見える。だが水鳥だけは、何も知らないやうに遊んでゐる。

須田町の萬世橋ステーションの前、廣瀬中佐のどう像までも、復興の東京を見下してゐる。

人が織るが如く通る中に、巡査の號令の聲も勇ましい。通る人の顔を見ると、皆活氣づいたや

うに見える。

あゝ復興の東京よ、復興の東京よ、今度こそは世界第一の都となれ。

帝都の復興

麴町區 番町尋常小學校

第五學年女 山田茂子(十三歳)

おそろしい九月一日は、もうゆめのやうにすぎ去つた。

あゝ何といふかはり方であらう。震災當時のさびしさとはうつてかはつた帝都、どこを歩いても、復興気分がみなぎつてゐる。時事漫画を見ても、主に帝都復興のこと。

先のうちははけしかつた時は、新聞にも電信柱にもはりつけてある広告も、新聞の間へ入つてゐる広告も、道でくれるのもみんな復興のことばかりであつた。

それらのことや外國の方、災難にあはない方たちの御親切等で東京の人々ははけまされたので、先よりまして、よい東京をつくりたいと心がけてゐるにさういはないであらう。

私たち番町小學校の生とはみな帝都の復興と共に學校の名をもあけることに、力をつくさなければならぬ。けれどもそれらのことは外國の方の方面のお方の、お力ぞえによるから、私た

ちは大いに感謝しなければならない。

地震だるま

麴町區 富士見尋常小學校

第五學年男 宮川正夫

僕の内には、本箱の上に、だるまが立つて居て、いつも顔をしかめながら口を一の字にかみしめて、大きな目玉をぎよぎよさせ、むじやくに生えた真黒なひげ、見るからに、びくつとするやうな顔をして、僕等をにらんで居る。

九月一日のお晝ごろ、急に大地震があつて僕はお母さんと一所に、庭へ飛び出して、地震のしづまるのを、今かくとまつて居た。やがてしづまつたので、中へは入つて見ると、かべ土が落ちて、たなやたんすの上の物などが、みんなひつくりかえつて、下へころがつて居たので、少しかたづけて居ると、ふとだるまが見えないのに氣がついて、あちこちさがし廻つても見つからない。

「さすがのだるまも、これはたまらんと、足を出して逃げ出したのではないか」と、お母さんとうわさをして居ると、お父さんが歸つて来て、又方々さがして見たら、本箱のうしろに落ちてつ

いたつて居た。とり上げて見るとやつぱり平氣で、えらさうな顔をして居た。さすがはだるまだけある。

バラツク村の紀元節

麴町區 富士見尋常小學校

第五學年女 竹内 瀧子

此の帝都はあの恐ろしい大震火災にあつたばかりに、こんなに焼かれてしまひました。今は何處へ行つてもバラツク村で下さう淋しう御座います。

私の家は幸に山の手なので、おかげで火災にはのがれる事が出来ました。

先日の紀元節は昨年と違つて大變ひんそうに見えました。いや／＼さうでは有りません。復興第一新春からそんな弱々しい心を持つてゐては、とても立派に復興は出来ないでせう。

私は紀元節にいさんで學校に参りました。家を出方が早いのか、又町の人々がねほうなのか、國旗の出で居る所が少いやうに思はれました。皆様も同じでゐらつしやいませうが、私は祝日祭日等が来る度に、なつかしい去年を思ひ出し「あ、去年の今頃は地震があらうとは夢にも思はなかつた。人間の行末は分らないものだ。」とつく／＼考へるのです。

學校の正門にはいつもの通り、國旗が十文字に立て、あり、いかにも私達をはけましてゐるやうな氣がしました。

式が終つて家に歸る時、今朝の事を思ひ出し、道の左右を見廻しつゝ足を早めました。氣を附けて見たら、バラツクに旗の出してない所が二軒あつたのです。私は「まあ此の日に日の丸の旗を出さないといふのはどうしたのだらう。」かう思ひながら家まで来ました。ざつしを讀んでゐたら、地震といふ題が有つたので御座います。此の時

「あつ?? さう／＼東京が焼けたからといつてぐ／＼してゐてはならぬ。あんなに地方の方々から、配給を受け、何不自由なく今まで命がつけられたのだから、どうか早く復興しよう。それが第一の御恩返しであらう。」

と考へ、私の心はいよ／＼堅くなりました。

復興の東京

麴町區 麴町尋常小學校

第五學年男 福田 一郎 (十二歳)

九月一日のあの大地震を受けた我が東京もだん／＼と復興し、火災で家を焼かれた所ももう一

面にバラックが何處を見ても立つて居る。

本所深川及び浅草・神田・日本橋・京橋などもバラックが立ち殊に銀座から神田にかけては電車自動車が縦横に走り、人通りも多く、其の上たくさんの大小店が立ち並んで盛んに商賣をして居るのは、ほんとに早く東京が復興したと僕は思ふ。

僕等の住んで居る麴町區もだん／＼と復興し、電車が到る所に通り、又人を乗せて運ぶ市營自動車が出来た。それから學校のバラックも昨年の内に立ち、まだバラックが立たない所でもどんな家を建てかけてゐる。

我が帝都もこのやうにして早く復興し、三年もたゝないうちに又前よりもよい東京になることであらう。僕等も大きくなつたら一つは君國のために一つは我が東京のためにつくさなければならぬ。今でも地震のことを思ひ出すと思はずつとする。

私の感じたおばあさん

麴町區 麴町尋常小學校

第五學年女 高羽智津子(十二歳)

此の間の新聞に或るおばあさんの事が書いてあつたのです。そのおばあさんには子供が七人もあり

七人が七人とも一致して高橋兄弟商會といふ機械を造くる店を出し、少しも不自由のない人なのに、なつとうを賣つて居るのださうです。そして其の金は深川の學校の子供に何か買つて上げて下さいと、校長先生に言ふのださうです。近所の人も其のおばあさんを知らない者は無いと言ふ程感心なおばあさんださうです。私はそれを思ふと一度の食事でも有難くて涙が出さうです。私はなつとうは賣れませんから、毎日勉強して、それ等のかへになるやうに復興の道にはけまなければなりません。

餅 焼 き

麴町區 日比谷尋常小學校

第五學年 稻生茂雄(十二歳)

僕は今日のおひるに餅を焼いてゐた。すると妹がふざけながら入つて來た。僕が餅を焼いてゐるのを見て「あんちゃん」と言つて後へまはつた。そして「それちやうだい」とゆびをさした。僕は「焼けてから上げる」と云ひました。それからしばらくの間はじつとしてゐたが、まぢきれなくなると手を出して取らうとした。その時餅は「ブウ」とふくれたら驚いて手をひつこめた。それにもこりす又手を出して取つたと思つたら、遂に手をひつこめたので僕は思はず笑つた。た

ぶんあつかつたのであらう、妹は指先を口の中へ入れてゐた。

ま り

麴町區 日比谷尋常小學校

第五學年 日向 八重(十二年)

とんとんとんとん

てまりさん

はなのもよりの

きものきて

ひろいおにはで

とんとんとん

ひろいざしきで

とんとんとん

電 話 局

麴町區 上六尋常小學校

第五學年男 原田健太郎(十一歳)

震災前までは赤い煉瓦の大きな九段電話局と、灰色の元の番町電話局とが、一口坂の中段に建つてゐた。そして此處の窓からは、白い服を着た交換手が、いつもにぎやかに首を出して居た。考へてもおそろしいあの震災の時、「そら地震だ。」表に逃げなくてはあぶないぞ。「こんな聲と一しよにあの電話局は、メリ／＼ドシンと倒れて、もく／＼と入道雲のやうな壁土の煙に包まれてしまつた。

後に僕は電話局の前に立つて、震災當事の事を思ひ出して見た。

あの華やかな東京も、一日のうちに、焼けた門や、つぶれた家の都となつてしまつた。此の電話局も、今はこはす爲に高い柱の上には、人夫の槌がカツチン／＼とさびしく音をたてゝゐる。考へれば考へる程何となく涙の出るやうな氣がする。

さうだ／＼。僕等は悪魔のなした仕事の返禮に、大東京を立派に復興させなければならぬと、

心に誓つた。僕の意思は、僕等の成人してから立派になしとけられる事と思つてゐる。

みなみの空

麴町區 上六尋常小學校

第五學年女 城井安子(十一歳)

なつかしの南の空よ

あこがれの南の方よ

それも、やけあとばかりでは

あるけれど

なんとなくなつかしい

南の方の私の家よ

南の空が青い時よ

私は……前にかはらない

家があるやうな気がする

南の空の黒い時は

私は……あの恐ろしかった

火事の晩を思ひ出す

南の空よ

思ひ出深い南の空よ

とこしへに清く青くあれ……

なつかしい松本さんへ

麴町區 上六尋常小學校

第五學年女 中原芳子(十一歳)

なつかしい松本さん、どこへ行つたのかわからない。私の親友の松本さん、私は毎日々々あなたの事ばかり思つてゐます。どうしてあんな大地震があつたのでせう。

私はそれがにくらしくてたまらないのです。地震さへなければいつまでもくあなたと一所に仲よく學び又遊ぶことが出来たのです。

私の思ひ出されるのは、地震前のあの楽しかつたことです。船越さんとあなたと私と毎日はなれたことがございませんでしたわね。いつかこんな約束を致しました。「私達三人はいつも仲よく

して學校中で有名な親友になりませうね。きつとよ、忘れてはいやよ、ね。」とその翌日から三人はもとよりもつとく仲よくなり、いつでもこくして遊んでゐました。けれどもまだ有名にならない中に、あのにくらしい大地震があつて、すつかりそれがむだになつてしまつたのです。あなたは綴方がするぶんお上手でしたわね。地震前、なんでも道を歩いてゐた時見た女の人のことをお書きになつて、先生が「さうりにまで目をつけてるほど細かくくわしく書いてある」と言つて、するぶんおほめになりました。あれがあなたの綴方のおしまひだつたのです。私はいつもあれをくりかへしてあなたを忘れないやうにしてゐます。

あなたはするぶんおとなしくて、先生から聞かれても明白に答へました。あなたがもつと長くいらつしやつたら級長さんにでもなられたでせう。

あなたを失つた私は毎日々々あなたの早くこゝへいらつしやることを祈つてゐます。この手紙があなたのもとへ行くでせうか。いゝえ行かないのです。

二月四日

友を失つた

中原芳子より

帝都復興と吾等

麴町區 永田町尋常小學校

第五學年男 山田直志

それ地震だつと思ふ間もなく、數時間の内に東京は焦土と化し、人々は玄米のにぎり飯で餓を凌ぎ、バラツクで生活した。

雨露を凌ぐバラツクに夜は月を望み、冬の夜寒に縮み、そして苦しみながら永い月日を送つた。又夏ははへの襲來を受けねばならぬ。吾等市民は榮耀榮華もしなかつたのにこの始末。

あゝ何たる事ぞ。これも運命だあきらめやう。

震災火災の爲め關東はばく大な損害を受けた。又東京のみでなく全國に及ぼした。此の復興の爲めに政府は外債五億五千萬圓を募つた。

さあ、どうしやうか。是れから勤儉力行だ。節約だ。貯金だ。

ちりもつもれば山と成るとは古語にもあるではないか。無駄使ひはやめやう。それを貯金しよ。そして復興の帝都に金貨の山を築かうではないか、外債を早く返さう。我が國を裕福にしよ。う。

外債は出来た。貯金は山と出来た。是れで耐震耐火の家を作つて、安住しよう。教育に力を注がう。何と言つても教育だ、身體だ、節約だ、貯金だ。

皆無くてならない大切な事だ。皆むづかしい事ではあるが、努力さへすれば何でも出来る。復興は努力あるのみだ。

先づ教育が第一だ。教育の力によつて發明發見をなし、世界の勝れた一等國各特等國にしよう。そして理想的な實驗室を作つて、理科學を研究しよう。

次ぎが身體だ。英雄もごうけつも病には勝てぬ。まして英雄でもごうけつでもない吾等が身體が弱くては到底復興はおほつかない。大にバラツクの東京に運動して、身體を丈夫にしなければならぬ。健康は復興の基だ。

建物の耐震耐火を計り、同時に、水道、瓦斯、電氣にも耐震耐火の改良を加へ、何も恐れぬ様にしよう。

今復興の帝都に槌は鳴つて居る。それは市民の土臺を築く槌の音だ。そして刻一刻と新東京は築かれつゝあるのだ。吾等第二の國民は常に共同一致し、又分業して、一たす一は二と云ふ事に心にひそめて、心強い土臺を築かう。

あゝバラツクの東京に夜が明け始めた。月は西に落ち、たなびく東雲もち切れち切れて飛び、

次第にあたりは明るくなつて來た。すゞめの鳴く聲も復興を祝つて居るやうだ。日が出初めた。そしてバラツクには長い影がうつり始めた。影は分、寸、尺と短くなつて行く。影の短くなる丈け復興して居るのである。目ざめよう。働かう。

お 節 句

麴町區 永田町尋常小學校

第五學 女 丹澤田鶴子

あと十日ばかりで三月になる。三月になると楽しい、桃のお節句がやつてくる。それは、私達にとつては一年中の楽しみの一つである。今年は震災の爲に、だいたいなくお雛様を残らず焼いてしまったので、お母様におねだりして一組揃つてゐるのを買つていた。

三月の三日には一つ復興氣分になつて、この新しい又可愛らしいお雛様の前で、賑やかに遊ぶと今から楽しみにして待つて居る。昨日もお母様がお茶の間で、もうすこしたつたらお雛様を飾らうといはれた。私はこんどのお雛様は一分か、ればみんな飾れるといつたので家中で笑つた。土曜日には叔母様と松坂屋へ行つて、お面を持つてゐる人形と、はいく人形を買つていた。かうして私のお雛様もおひくふえてくる。

思ひ出すあの一日

神田區 錦華尋常小學校

第五學年男 橘 英 則

地震はやうやくしづまつた、

黒煙はもく／＼と昇る、

もう電車通りは避難者でうづまるやうだ

傷をうけた人、其處此處に、にけまどう人、まるで戦場のやうだ、

火は近づいた

前後をかながへず、一物ももたずに、小石川の方を指して逃げて行きました、

其の時は、父はまだ會社から歸つて居なかつた、

五時頃やうやく父に出會つて一同安心した。

一家揃つて植物園さして避難した。

○人さわぎで一夜野宿したが、其時のテントでねたことや、まづい玄米を食べて美味がつてる事、事を今考へるとおかしいほどだ。

火の空は青空と變りもう火事は消えたと聞いた時は、何とも言えない嬉しい氣持であつた。ではこれからはどうして暮して行くのだらうと、思つたときは淋しいやうな、悲しいやうな、氣持であつた。

僕はまだ小さいから父母の考へのまゝに 進まうと思つてゐる、

避 難

神田區 錦華尋常小學校

第五學年女 福 澤 初 枝

「おいもう逃げなくては駄目だ。皆離れ／＼にならないやうに。」と、云つた父の顔は曇つて居た、母は泣いて居た。妹も泣いた。

第一震に瓦を皆ふり落された家は、火のおそひ來るのを待つやうに軒を傾けて居る、

あちらこちらに黒煙がもう／＼と立ち上つて居る。

五六軒先の家はもう紅の焰に見まはれて、すさまじい音をたてながら燃えて居る。

第二震は來た。隣の家はつぶれた。其の隣の家もこれと相和して物凄い。危険は迫つて來た。ふるへ聲で「さあ皆はぐれない様にするのですよ。」と、いつた母は妹の手を取つた。

あゝ、住なれたなつかしい家を後にして、涙と共にあてもなく私の家族は逃げて行く。

嵐の夜

神田區 淡路尋常小學校

第五學年男 荒久保茂

短い冬の日次第に暮れて来た。

朝から近年にない大風であるが此頃にはめづらしい南風が小雨まじりに吹いて、床に居るのも氣持が悪い程暖かいので、九月以來地震におびえて居る人々は又大震の先ぶれではないかと、皆心を痛めた程であるが午後からは小雨はよいあんばいにやんだが今までの暖かい南風は急に一變して北風となつた。

「ひどい風だなあ、」ひばちにあたりながらお父さんが一人ごとをおつしやつた。まつたくひどい風だ。ふだんの年ならばこのくらいの風が吹いても音等はしないであらふに、今年トタン屋根のせいか、「ゴー」と言ふすごい音と共に風が吹いて来る度毎にまるで大男が屋根の上を強く歩いて居る様にガタ／＼といふ音がする。その渡毎に一番小さい今年三つになる忠夫が地震だつといつてかけ出す。僕等までが何だか恐ろしい様な氣分におそはれて来た。

「何と言ふ大風だらふ、」とお母さんも同じ様なことをおつしやりながらお膳をそこにならべ夕飯を食べ様と思ふと、今まであたりを晝の様にたして居た電氣は急にぱつと消えた。今まで明るかつた座敷にはかに眞の暗。又忠夫が「地震だろ」と言つてお父さんのひざにだきついた。「何地震が来たらお父さんが小指でつまみ殺してやる」とおつしやつたので皆は思はず吹きだした。

外は風がものすごい程大きな音をたて、トタン屋根は絶えずガタ／＼と音をたてゝゐる。ろ／＼とくをともして薄暗い中で夕飯をすました。しばらくするといつの間に表についたのか兄さんが歸つていらつしやる。電氣工夫が来たから今につくぞと、おつしやつた。やがて十分もたつと今までくらかつた座敷は急に晝の様な明るさに歸つた。「あゝ、よかつたやはり電氣は有難い」と思はず口の中でつぶやいた。

やがて時計の針は九時をさした。床についたが中々ねむられない。

「ゴー／＼」と言ふ風の音は益々はけしくなつて来る大嵐あゝなんと言ふおそろしいことだらふ。

あゝマルよ今どい

神田區 淡路尋常小學校

第五學年女 石出はな子

なつかしいもとゐた家へ来た。なんといふなさけない有様だらう。家にあつたものはなんでも灰となつてしまつてゐるその灰はどこかへかたづけしてある。あゝ家に居たマルよお前はどこにさまよつてゐるのか、それともやつぱり灰となつてしまつたのか。あゝマルよお前のあのまるくとした顔をも一度見たい夢にでもまほろしにでもいゝから見せて下さい。それとも永久にあへないのか。ほねでもいゝから見せて下さい。かあいゝマルよ、

あゝマルよ、なつかしきマルよ、今どこに、
さまよひをるの 野か山か、

あゝマルよどこに、土の下か、あゝまほろしでも、
一度見せて下さいその顔を。

忘れない此の地震

神田區 神田尋常小學校

第五學年男 高橋幸延(十二歳)

僕の一生忘れる事の出来ないのは、第二學期の最初の日である。今思ひ出しても九月一日その夜のおそろしい光景よ、さしにも廣き帝都も一面の火の海となつた。月日の光りもさゆる間なく

もう／＼と立ちこもる黒煙は天もこがさんばかり。これをふせぐに手段なくのろはしき悪火は機に乗じて、東京をほしいまゝにしたのである。いぜんにかはるあはれな運命にたれか泣かない者があらうか。家をやき財産をなくした人。中には親子はなれ／＼になつた人、一家全めつの人。一として涙のたねとならぬものなく、誠に残念である。然し僕達は幸ひに家や財産はなくても命等にはいさゝかも變りなく反つて震災前にまさる健康とます／＼かたい決心をもつて、せまいとは云へ希望にみちたバラツクの學びやにいそしむ事の出来るのは、何より幸福と云はねばならぬ。此のかたい決心と一步もまけない努力をもつて一心に勉強して眞面目な市民の一人となり、家をおこして一日も早く帝都の復興を心がけねばならぬ。

震火災にあつて

神田區 神田尋常小學校

第五學年女 神林た津(十三歳)

妹と二人でおはじきをして遊んで居ました。するとみしんとゆれて來ましたが、少しぐらいつ思つて遊んで居ました、ところが段々ひどくゆれて來たので、こはくなつて外へ出ようとしたが、よろ／＼として出る事も出來ません。

その中に瓦は落るうちにある行李だの箱だのがおちる。しまひには隣の土蔵のかべがおちて来て、其のほこりで目。口をあける事も出来なくなりました。ゆれやむのを待つてやつと外へ出ました。

見ると家の裏は壁土で山の様になつて居ました。

藤本さんのをぢさんが、「うちの藏があなたの家の方へ倒れるかと思つてびく／＼して居ましたが倒れないでよかつた。」と言ひました。「お父さんこわかつたわね。」と、言ひますと、お父さんも「こつちへくれば建具屋の木がぐら／＼動いて倒れさうだしこつちへ来れば藏の壁が落ちるので、どちらへ行つていいかわからずまご／＼して居た。」といひました、此處なら大丈夫だらうと思つて大森さんの堀の前でござをしいて近所の人と一しよに休んでゐました。すると火事が六ヶ所から始まつたなどと言つて来ましたが「なにこつちへなんか来ないから大丈夫。」などといつて居ました。さうしてみんな御飯を食べた方がいゝといふのでござの上へおはちやお茶碗などを持つて来て食べました。

その中に近所では荷物をしよつたり車につんだりして逃げて行きます。「あんまりいつまでも居て逃げおくれるといけない。」

「又持つて歸るとしても出した方がいゝでせう。」とお母さんが言つたので、「それなら出さう。」と

車にぎつしりと積んで荷造をよくしました。竹橋の方はもう一ぱいで行かれないので、龍閑橋の方へ行きました。そしてガードの下で「こゝなら大丈夫だ」といつてそこに暗くなるまで居ましたが、其處もあぶなくなつたので荷物をおいて逃げましたが、おはちと赤ちゃんのミルクとお湯とおしめとは持つて行きました。そして何の倉庫だかあるところで、此處なら大丈夫だらうと云つて居ると、そこにあつた荷物に火がついて、又あぶなくなりました。そこでもう逃場がなくなつたのでそこに居た大勢の人と一所に堀の中へは入りました。その時はもう死ぬ覺悟で持つて来たおはちもミルクもお湯も、おしめも皆堀ばたへ置いてしまひました。上から火の粉をかぶりながら夜の明けるまで堀の中に立つて居ました。その中男の人が大勢上へ上つて火を消してくれました。それから皆が上つて休みました。私たちはもうくたびれて居たので、其のぬれた着物のまゝでそこにねてしまひました。

少したつて目がさめました、だん／＼人も居なくなるので、お父さんが「こんな所に居ても食物も何もないから、一時青山のうちへ避難させてもらはう。」と云つたので、そこを立退きました。それから一時間ばかり歩いて青山の家へ着きました。

そこでみんな着物などをもらつて六日まで世話になつてゐて、七日に澁谷から、汽車に乗つて信州へ向ひました。信州には叔父さんの家があるのです。

初めは貨物車で、日暮里から屋根のあるのに乗りました。その時は下から押ししてもらひ、中からはひつばつてもらつて窓から入りました。やつとの事で皆乗つて行きますと與野といふところで止つて中々動きません。それに又あんまり押されるので、妹はおりる／＼と云つて聞きません。折よく與野には永く家へ来て居た職人のうちのある事を思ひ出し「一夜そこへ止めてもらはう。」と云ふので汽車を下りました。そして與野の入口まで自動車に乗つて行きましたが、それから先は道がせまいので歩かなければなりません。何しろ初めてなのでよくわかりませんでした。或る御茶屋できくと、親切に提灯をつけて、その家まで案内してくれました。そこでおふろに入れてもらつてねたのは十一時すぎでした。翌朝大宮まで歩いて行つて、押されながら汽車にのり晩の八時頃やうやく田中と云ふところにつきました。停車場から一町程でめざす家へつきました。みんなは涙を流して喜びました。

大震 火災

神田區 千櫻尋常小學校

第五學年男

滑川

正

大正十二年九月一日は僕等が永く／＼忘れる事の出来ない日である。父は毎朝商店に務めてゐる、僕と母は晝食をしてゐると、「ゴ／＼」と音がすると同時にガタ／＼と家がゆれ出した。僕はそら地震だと云ほうとするがたゞ地……地……と云ふばかりであつた。たなからは色々な家具が落るのでちつとしてはゐられません。其の内に父が商店から飛ぶやうにしてかけつけて來た。數分たつうちに向ふから煙がもう／＼と立ち上り火の子がどん／＼飛んでくる。父が早く大切なものを持つて逃ける仕度をしなければならぬと云ふので、大事なお金や衣類を取り出した。僕

はるはいと外に一つ背へしよつて父母と一つしよに後をふりかへり／＼逃げたが、とう／＼自分の家へも火がついた其の時は涙を流して悲しんだ。火災はなほも烈しくなつて來た、道は人で身動が出来ないほどである、一旦は上野の山へ避難した。高い所で下を見下せばあたり一面火の海と化し、関の聲が物凄く聞える、前に用意してゐたお菓子を食べたがのどに入らない。一日は上野山で明し、あくる朝父がどこか田舎へでも行かうと上野を後に川口停車場まで來て汽車に乗らうとしたが數限りない人だつた。それでも僕等三人はやつと乗れて體を休める事が出來たがまだ不安でならない間もなく汽車は水戸へ着いた。又て／＼あるいて親類の家に世話になつてゐた。それでも震災當時の事を思ひ出すと其の様子が目の前にあり／＼とつかひ、其の悲惨の様をまのあたり見るやうです。

これから僕等東京市民は力を合せて東京復興に心掛けなければならない。

大震火災

神田區 千櫻尋常小學校

第五學年女 阿部 いち (十三歳)

「ぐらくつ」あらつと思ふ間もなく私は外へ出やうとしたが、瓦が落ちるので出られなかつた。座敷にかけ上つて壁にすがりついてゐた、三疊の壁が落ちてほこりがもうくと立つ、其の間を駆けぬけて表へと一散にかけ出した。表通りにははや人で一ぱいであつた。

三方の空にはうす黒い煙が所々から出てる、火事が始つたらしい、空は物すごく煙は次第に近づいて来た。「やつぱり火事だ」と思つた、家に入つて着がへを出してそれをしよつて上野をさして逃げだした。二日の日やつと谷中のお寺に着いた、それから毎日々々上野や焼跡等を探したが、兄やいとこの子は中々めつからなかつた。五日の朝やつと兄をみつけた、其の時のうれしさは今も忘れられない。田舎の母からむかひが来たのでむかひの人と一つしよに出かけた。途中被服廠を通つた時、折重つて死んでゐる不運の人を見た時は餘りの哀れさに涙も出なかつた。それから一ヶ月ばかり實に悲しい不安の日が続いた。

十月十日から學校が始まると云つて知らせて来た時は、生きかへつた様な氣持がした。焼跡の

バラツクの片すみにむしろを敷き板を並べて、読み書きを始めた、それでもうれしなかつた。なつかしいお友達が二十人近くも集つて来たのだから。今では五十人にもなつた、此の間から新しい教室の建築に取りかゝつて大工さんは朝から夜もかけて仕事を急いでやつて下さる。私はうれしくてならない、こうして私等を教へて下さる御上の方々や校長先生の事を考へると、家の者は皆丈夫で働いてゐるし、あゝ恐ろしかつた地震も火事も働けばよいのだ、早く起きて働くより外はない。

バラツク街の朝

神田區 練成尋常小學校

第五學年男 手塚 一夫

コケツコーくと彼方でも此方でも勇しい鶏の聲が聞える。まだあたりは暗い。

しばらくすると牛乳配達が来る。その後を追ふ様に威勢よく新聞配達がかけて来る。

がらくくと雨戸をあける音があたりをひびく、もう家の前をはいてゐる人もある。

ブリキ屋さんの家から細い煙がひく、立上がる。

大工さんが煙草をすひながら五六人通る。「一夫々々」と呼ぶ聲に驚いて空をあふぐと日は大分高く上つてゐた。

(一)
此方にひやくつちの音、

復興みなぎる町々に、
とてんかたんとひびきゆく。

(二)
彼方にひびくのこの音、

復興みなぎる町々に、
ギーゴ／＼とつたへゆく。

去年の大震災

神田區 練成尋常小學校

第五學年女 長谷部みつ子

大正十二年九月一日、思ふもぞつとする大震災のあつた日である。あの時ちやうど私はお友達の家から外へ出たとたん、急に大地が波の様にゆらめくと同時に、すべてのものがぐら／＼とゆれた。私は無我夢中で何とも言へなかつた。私は地震が終るとすぐ電車道にのがれた、電車道に

は大勢の人が集つてゐる。

ふと見ると電車は止つてゐて乗合自動車はすゞなりの様に人を乗せて走つてゐる。地震はたえずゆれてくる。其の度に人々は、「南無阿彌陀佛」、「南無阿彌陀佛」と唱へて一生懸命である。四方にはあくまの舌の様な煙がもく／＼と立上つてゐる。何處からか何か破裂する様な音が度々聞える、人々の驚はいふまでもなかつた、夕方頃方々から荷車を引いて上野の山をさしてどん／＼避難して來た。八時頃私達も荷物をしよつて上野の山に行つた。

其の時には山もすでに一ぱいで何とも言ひ様がない。夜になると火の手はますます／＼ひどくなつて來て、生きた心持はしなかつた。其の晩は山に毛布をしいてごろねをした。二日の朝ねえさん達が家の方へ行つたら家が残つて居ると言ふてよろこんで歸つて來た。私は家が残つて居るといふから今日の晩あたりには家に歸られる事と思つてゐた、すると風が急に變つて二日の晩に家の方は焼けたのださうである。其の晩も野宿をした。火事は三日に漸く止まつた。けれども三日間も焼けてゐたのだからたまりません。

いくら花の都でも焼けてしまふ。それで東洋一の東京も見る影もなく焼けてしまつたのである。昔の諺に

「地震、雷、火事、おやじ」

神田區

といふことがあるがほんたうにこの事であると思ふ。
あゝ恐ろしかつた九月一日の大震災火災。

あゝ大震災

神田區 橋本尋常小學校

第五學年男 福井啓也(十三歳)

九月一日午前十一時五十八分突然「ぐらくツ」と大地がゆれた。僕は思はず「地震」と言つた。そして道路に飛び出た、地震が小やみになつて始めて正氣づいた。

足を洗つて三階に上つて見ると、本箱や唐紙までがたはれてゐる、僕は始めて地震の大きかつたことがわかつた。僕は又外に出る時地震があつた、その時長谷川さんがたはれたのであらう。出た時にはもうたはれてゐた、下では悲惨「助すけてくれ。」と苦しうな聲を立てゝゐた、後で聞いたら一人死に三人助すかつたさうだ。空を見るとむくくと上る黒煙あつ、火の手が上つたと人々は騒ぎ出した。見る間に空は眞黒になつた。

調査は「淺草橋に避難しろ。」とどなつてゐる。まづ僕たち女子供は避難すべく、淺草橋に行つた、公園は入でうすまつてゐた。だんく暗くなる、火の手はしだいに強くなる、しばらくする

とうちから「御徒町の親類のうちへ逃けろ。」と言つて來た。僕たちは苦しいく思ひをしてやうく左衛門橋を渡つた。そして美倉橋に來た時はもうすでに藤井さんの家の窓から火をふいて物すごい光景であつた。

それから親類のうちについた、そして親類の人と一しように前に優る苦しい思ひをして目的地たる上野の山に着くことが出來た。後からおとうさんや小僧も帳簿を持つて來た。空は眞赤、所々には、火が見える、火の子は飛んで來る實に恐ろしい光景であつた。

憶病者になつてしまいました

神田區 橋本尋常小學校

第五學年女 多田つる(十三歳)

思ひ起す九月一日の大震災、私が學校から歸つて晝食にかゝらうとする丁度その時だ。急に「ガタ／＼」とやつて來た、と同時に「地震だ」と持つてゐたものをほうり出して外へ飛び出した。

お祖父さんは「外へ出てはあぶない家に入れ／＼」とどなつていらつしやる、私はお母様や妹たち土藏のたんすの前に坐つてぶる／＼ふるへてゐた。誰も眞青な顔できゆうと抱き合つてゐた、その中「火事だ／＼」といふ聲がするので出て見たら、西の方でも南の方でも黒煙が空をお

ふてゐた。

火はだんく／＼近づいてくる。私たちはもうそうしては居られなくなつた。お母様は弟をおぶつてお祖母さんや妹を連れて淺草橋公園へ行かれた。

私は洋服の下着をきてお母様の後からついて行つた。公園は人や荷物で一寸のすき間もない私は人にもまれながら、たゞお母様にはなれまいと一生けん命だ。

「ごめんなさい／＼少々お通し下さい」と人をおし分けてはいつて来た人があつた。見ると血だらけの人を戸板にのせて四五人の人が血相かへて運んでゐた。私はぞつとした、あゝ又、又、怪我人を次へ／＼と運んで来た。あゝ何といふ悲惨だらう、その中日はとつぷりと暮れて今までの黒煙は眞紅の焰と化した。一同はたゞ火ばかりにらんでゐた。いよく／＼こゝもあぶないので上野へ逃げることになつた。道へ出たが車や自動車が一ぱいで女や子供はととも歩くことが出来ない。火はいよく／＼近くなつて前の家へもえうつた。今はこれまでと一同川へ飛びこんだ。

私はもう泣きさうになつてそこにつないであつた綱にすがつてすべり下りた。川の中には二三十人の人がヂャブ／＼あるいてゐる、私は夢中になつて歩いたが深さお深し流れは急だしとてもはかどらない。妹はとう／＼泣き出した。その時どこかの人が妹をおぶつてくれたので「私はほんとうに親切な方だ」と、うれしかつた、やつとの思ひで、左衛門橋まで来たこゝは火に遠いの

でそこのごみ捨場へはひ上つた。見れば體中どろまみれで歩くことが出来ない。お母さんが「さあこれから上野まではぐれないやうにあるませう」とおつしやつたので、それにはけまさされて重い足をふみしめ／＼人や車の間を縫ふやうにして上野までたどりついた。見上げれば紅の焰は空をおほつてゐる「ご／＼／＼ばちん／＼」といふすすまじい音を立てゝ。私どもは人ごみにもまれながらこゝで一夜あかした「最後まで残る」とおつしやつた父様はどうなさつたらう。私は急に心配になつた四日目の朝佐久間町で父様にあふことが出来た。

私共はあまりのうれしさに涙ばかり出てしばらくは口もきけなかつた。父様は「家もとう／＼焼けた長い間の苦心も一度に炭にした實に残念だ、併し淺草橋公園には死人の山が出来て居たが皆揃つてゐてくれて、こんなにうれしい事はない」とおつしやつて眼をうるはしていらつしやる。其日の中に私どもは中山の親類の家へいきました。あゝにくらしい昨秋の地震、それから後の私はガタンといふ音をきいてもびくつとする臆病者になつてしまひました。

雪 合 戦

神田區 和泉尋常小學校

第五學年男 小林 正(十二歳)

信ちゃん、正ちゃん、雪合戦しよう隣の石黒君がさそひに來た。元來こんな事の好きな僕はすぐ賛成した。やがて僕等は二手に分れて雪合戦を始めた。初の内は兩方とも遠くから雪玉を投げてるたがしばらくすると、段々近寄つて來て終りには取組合まで始めた。僕も石黒君と、とつづくんで來たが、とけかけた雪をふんだのでスルツとすべつてころんだ。それを見ると敵のやつらはとんで來て僕の脊中に雪を入れた。「ヒヤッ、ツメタイ……」と言つて飛び起きた時には敵は勝どきをあけて逃けて行つた。これを見ると負ぎらひな僕はむつとしていなきり敵の臺場へかけ上り無茶苦茶にぶつくすし、さして有つた旗を取ると一さんに逃げ歸つた。それを見ると味方は一せいに萬歳を叫んだ、味方の臺場から敵の方を見ると皆うらめしさうな顔をしてこつちを睨んでゐた。

大震災の記

神田區 和泉尋常小學校

第五學年女 都々野園子(十二歳)

おひるのしたくをしてゐる時、がたくゆれだし地震だと云ふ間もなく、たんすの上の物は落ちる。はしらはぎいゝとなつて今にもつぶれさうである。もうやむかゝとまつてゐるたがよいひどくなる、そのうち少しやんだので、ほつとして外へ出ると、隣の小僧さんがかりんと屋が

火事だと言ふので、びつこのけたをはいて火災報知機を押しに行つた。仲々こない近所の人水をかけてたりしてやうく消した。

そうこうしてゐる内にお母さんが、三越の方の黒けむりがあまりひどいからと言つて荷物をはこべるやうにした。

空はだんく暗くなり、火の手は一層強くなる。其の内町内から火が出たので和泉橋へはこびかけた。通る人く男は車を引いていそぐ、女はたすきがけで荷物の後を押して急ぎ行く、私がおばあさんの手をひいて、和泉橋へ行つた時には、もう家の方は火に包まれてゐた。家の人をまつて居たが、仲々こないで、もしやけむりにまかれたのではないかと思つて見に行かうとしたが火の子は落ちるし、おばあさんをおいて行くわけには行かないので氣が氣でなかつた。其のうち皆と一しよになつて上野へ行かうとしたが、車と人で一足行つては止り、二足行つてはやすみして其のこんざつは言ひやうがない。やうやく松坂屋の前まで來たので一やすみして池の端の方へ行かうとしたが、一ばいで行かない。

切通しの岩崎さんの門前で夜をあかした。

そこもあぶないと言ふので、お屋敷の中へはいつた、

高い所から見下すと、四方八方火に包まれてゐて、そのおそろしさは、言ひやうがない、其の

内火の手がよはくなつたかと思ふと間もなく〇〇人がバクダンを投げたとか、水に毒を入れたなどと人の話、どうしたらよいかと皆一つ所にかたまつてゐた。

復興の朝

神田區 小川尋常小學校

第五學年男 松村 正

一度焼野に立つたとき僕は、「あゝ人間と言ふものは自然の前にはもろいものだ。」と、たんじた。しかし二度九段の坂上に立つて見れば小さいながらもトタン屋根の家を見ることが出来た。又其のそばにはしゅろの木が緑の若葉を出して居た。おゝ復興だ。草木も復興するのだ。何で此の位で萬物の長たる人間がへこたれようぞ。

初の内こそ顔の色が青かつたが、今ではどの人の顔を見ても元氣のよい復興の氣分であふれてゐる。

僕の家も最初は商賣もおほつかなかつたが現今では元通り出来るやうになつた。

この様にして一日々と東京は復興されて行くのである。

僕等の力に依つて大東京の建設されるのも後十年とは立つまい。

九月一日から二日の朝にかけて

神田區 小川尋常小學校

第五學年女 原 アヤ

地震だとけたゝましい聲が家中にひびき渡つた。其の時はすでに臺所は足のふみ場もない位であつた。私はお母さんに連れられて外に出た。又第二の地震が來た。私はまつさになつて、お母さんにつかまつてゐた。

地震はやんだ。家に來て見れば、なさけなや壁ははがれ、燈ろうはうちくだかれてゐた。火はもう近くなつた。両親は家にはいつた。着物をかたしたり、大切な書類を運んだりしてゐた。私共は先へ逃げた。一ツ橋を渡り宮城内にはいつた。其の日はむなしくくれてしまつた。ふとんはないしどうしてねればよいのやら。そんな事を思つてゐる内に夜はほのくくとあけた。両親はまだこない、死はしないかしらと案じてゐるとお父さんは來た。

お母さんのことをきいたらお母さんは居ないと云ふて又さがしに行つた。こんどはお母さんをつれて來た。親子四人皆丈夫なことを、あくる日親類へしらせた。

不幸中の幸とでも云ふのでせう。

焼跡の市内

神田區 佐久間尋常小學校

第五學年男 榎並寛司(十二歳)

噫々大正十二年九月一日世界古今未曾有の大震災も早川の流れの如くに過ぎ去つた、僕は九月六日の朝和泉橋からその昔の柳原堤を一周して家に戻つた。其道筋には幾百萬の財産を瞬く間に焼失せしめた悪魔の残炭が山をなして居る、和泉橋美倉橋の橋下にはあはれあの火災の爲に焼死し、火ぶくれと水ぶくれになつた土左衛門の死がいが、あふ向になつて手足をつつぱりそれがくさりきつて人々に臭氣を浴びせて居るのはいかにも痛ましいことである。道の左右には焼錆びた鍋釜等を前にした食物屋が、だらしなくそこゝに立ち並んで居る、十字街の向ふにはひよんほりと倉が一つ二つほうくとした焼の原に立迷つてゐる様である。其そばには金庫がやはり灰土と共に捨てられてある、るり色の空の下には火焰の中の被服廠の人の如くに故郷へくと急ぐ人々が我れ先にと雑沓をきわめて居る。

私は人ごみの柳原電車通りをぬけて行つた、美倉橋のかり橋を渡らうとする時、黒山の様に入がたかつてこちらへやつて来る、何事かと思つてのび上つて見るとこん棒で頭を破られ顔からえり首へかけて血を流した一人の〇〇が竹やりを持つた大勢の人々にかこまれて行つた。私はたほうぜんとして見送つた。僕の今渡つて居る此のかり橋は我が佐久間町内の人々が必死となつて防火したと言ふことがかすかに頭に浮んだ、とたんにコツンくとバラツクのつち打つ音が聞えた。私は帝都復興帝都復興と心の中にさけびながら家に歸つた。

避難中での美談

神田區 佐久間尋常小學校

第五學年女 周藤千代子(十二歳)

今度の火災で立派な行ひをした人は數へきれぬ程あります。これは其の中の一人です、或新聞記者が火事で上野へ避難しました、其の時上野の一部も熱くなつたので、皆熱くない方へと逃げはじめました。新聞記者も勿論逃げました。記者がふと下を見ると立派なふろしき包がありました。

「これはいづれ立派な人が落したに違ひないとどげよう。」と拾ひあげましたが何しろ熱くてたまらないので、先へくと入波にもまれながらやつと熱くない所へ着きました。すると急に包みの事が氣になつたのでとにかく中をしらべやうと思ひました。中をしらべると現金が三萬圓に小切

手や手形等およそ五萬圓位ありました。記者は驚いてふろしきをしらべると日本橋山本又吉と書いてあつたので四五度名前をよびました。最後に今一度よびますとはいと返事をして出て来た人がありました。

記者は包を出して「これはあなたではありませんか。」と聞きました。山本氏は「こんな時に落したのだからもうとてもだめだらうとあきらめて居ましたがあなたのやうな方に拾つていただいた私は幸ひです。どうもありがたうございます。」と手も合はさんばかりにして禮を言ひました。さうして其の中からいくらか出して「これは少しですが御禮のしるしです。」と出しました。記者はなんといつても聞かないでとう／＼逃げ出しました。山本氏は追ひかけてむりに記者のところへ入れてしまつたさうです。世の中には死んだ人の指輪をとつたりお金をとつたりする人もありますが、かう言ふ立派な人もあります。

震災火災を知らず文

神田區 西小川尋常小學校

第五學年男 明 嵐 正 章

拜啓先日は大震災火災の御見舞を早速下さいまして誠に有り難う御座います、さて一地にては電

車も大部分運轉し湯屋も近頃バラツクにて始めましたから便利になりました。

震災當日は之れから丁度遊びに出かけやうとして御飯を食べやうとした時突然物凄いうなる様な音と同時にぐらく／＼と何物をも打ち倒す様な大激震が起りました。女子供の泣き叫ぶ聲家屋の倒壊する音など土煙の濛々たる中から一時に起りました。暫くは何もかも忘れ夢中でありました。がさしにも猛り狂つた大地震も漸く止みました。見渡せば今迄家並を揃へて立ち並んで居た家々は影も形もなく屋根ばかりになり塵ほこりや砂煙は眼も明けぬ程に立ちこめてゐました。又道路は少しも分らぬやうになり足の踏み場も無い位でありました。ふと氣が付けば家の倒れた中で助を求むる聲は續いて起りました。助かつた人々はそれとばかりに之等の人たちを救ふことに努力いたしました。鋸で木を挽く音尙も呼び叫ぶ聲何ともいへない人間界の終りを忍ばせるやうな場面が現出されました。不幸中の幸とでも云ひませうか、我が家も倒壊したのでありますが二階は偶然にも其のまゝ残つて居ました。續いて起る第二震第三震、この時一つ橋方面に當つて黒煙があがりました。「火事だ」といふ聲が人々の口から漏れた其の中に火の手は四方に起つた人々は不安の極に達して心臓は早くも早鐘をつく様でありました。一つ橋方面の火事は時々刻々とせまつて今角の巴屋に燃えうつつてゐた。我が家は丁度風下でありました吹き來る烈風に火は益々熾んに燃えいよく近づいた僕は不圖母校の西小川小學校を見れば少しもいたんだ所はありませんでし

だが早や火がついたのか西側の角から煙が上つて居た。僕は危険と思つてカバンとバツト等を持つて母や弟と九段を指して落ちのびた。やつと来て見ると早多くの人が避難して居た。炎々たる黒煙は空高くなびいて居る。あゝ實に地獄の火せめとは此のことであらう。五時頃歩兵隊が立米をたいて呉れたこの夜はこゝで一夜を明しましたあくる日は一まづ伯父の家におちつくことにしました其の内バラックの家を建て家業は始まり亦なつかしき西小川小學校は露天學校を始められ尙目下は正式の學校を開始し授業をして下さいますので毎日通學勉強して居ます。

思つたより早く我が帝都も復興せんとして居ます。而しまだ中々容易な業ではありません。そこで將來ある我々は國家のため東京市のため、其の責任の重大なるを思ひ大いに奮勵努力を以て勉強し此の大災害を無意味としないで禍を轉じて幸となす覺悟であります。聊か震災の狀況と考を記して御禮旁々御返事いたします。尙大震災の繪葉書を御送り申しましたから何卒御覽下さい。草々。

二月十八日

明 嵐 正 章

森 利 光 様

震災後田舎の伯母へ

神田區 西小川尋常小學校

第五學年女 籤 俊 子

いつもの年より暖いといふことですが、かなりお寒くなりました。皆様御變りは御座いませんか。私方では父を始め皆丈夫で一心に働いて居ます。私もそれはくゝ元氣で毎日々々楽しく學校に通つて居りますからどうぞ御安心下さい。

さて昨年震災にあひましてからは本當にお情深く色々な品物をお送り下されどんなにてうほうしたでしよう。皆々本當によるこんで居ります。厚く御禮申します。

大震災當時の東京の様子は新聞紙上でくはしく御存じのこと又私の家の様子はお父さんから大體申上りましたとの事ですけれど伯母様どうぞ私にくわしく話をさせていただきます。

皆様の御存じの通り九月一日には全く生きた心地は御座いませんでした。丁度私は學校から歸つて足をのばして二階に休んで居ました。お母さんも兄さんも同じく二階にお母さんは掃除をしていらしやつたのです。ふいに「がた／＼つ」「みし／＼つ」と恐ろしく物凄い音がさ／＼つゆれる／＼／＼ゆれたかと思ふと家はつぶれて居ました。「大變！ 外へ出ませう！」と、出よう

としても出られませんが。此時より早く身軽な兄さんはする／＼と二階から降りて外へとび出していらした様です。

やつとゆれが止つたので気が付いて見ると、家はつぶれて居ましたけれど、幸にも二階がつぶれないで下に落ち座つてしまつて居ます。急いで外へ出ると隣近所はつぶれて見る影もありませんでした。

私はまあ命があつてよかつたと思ふとお母さんはお父さんが居らつしやらないとおつしやる。二度びつくりした私は必死になつて「お父さん、お父さん」と、呼ぶけれど返事がない。呼べども／＼返事がない。近所でも泣き叫ぶ聲や救を求むる聲で耳もつぶれさうでした。やがて何處から出て居らつしやつたかお父さんのお顔が見えました。其の時のうれしさはとても口には云へず又物にも例へることはできませんでした。

「皆荷物を」とお父さんの聲に急いで荷物を出しにかゝります。けれど後から／＼と大きなゆれが来るので私はとても荷物を出す事が出来ません。意氣地なくも隅の方でぶる／＼ふるへて居るばかりです。ふと今川小路の方を見ると黒い煙がもう／＼と出て盛に燃え出しました。「すは火事よ」お父さんは「俊子お隣の姉さんと一所に逃ろ」と私は「ハイ」といふより早く姉さんと人の呼び走る物凄い中を無我夢中で白山上のお寺へと逃げて逃げました。やがてついてほつと息をつ

いたが其の夜火はまだ盛に燃えて居ました。こゝまでも焼けては來ないかと心配で眠ることが出来ません。夜は明けるまだ盛に燃えてゐるとか其の内に内から迎ひが來ました。迎へと一所に内へ歸りましたが、家と云つてもそれはお父さんのお友達の家でした。不安心の中にこゝに十日を送りました。それから私は所澤へ、兄さんは富山へ行つて參りました。まあこんな有様だつたので御座います。九月一日のことを思ふと本當に身ぶるひをします。只今は皆心を合せ一心に勉め勵んで居りますから、何年もたゝない内にきつと取り返しが付く事と存じます。

伯母様どうぞ其の時の來るのをお楽しみにお待ち下さいませ。御身を大切に。さようなら。

二月十二日

俊子

伯母上様

大正の大震災

神田區 今川尋常小學校

第五學年男 佐島正仁

僕は九月一日に學校から歸つてくるとお使をいひつけられてすぐかきつけをもつて乾物屋へいった。そして歸つて來ると動坂の伯父様が來て居た。「今日は」とおじぎをした時が／＼がらん

みし／＼と來たので僕ははつとして立止まつた。そして外へ飛出した。いくらふみしめようとしてもだめだつた。その内に「火事だ／＼」と言ふ聲に又驚いた。今度は父と母とが弟と妹の二人をさがしに行つた。

ところが父と母とが行つた後で弟と妹とが來た。そこへ父も歸つて來たので荷物を出しはじめた。その中に火は時々刻々とちかすいてくる。

もうたんに火がうつつた。母が僕に今年の三月に生れた妹をおぶせて呉れた。

そして弟と妹の三人をつれて人形町の家に父母より先に行つた。いつて見ると人形町の家にはだれもゐなかつた。その中に荷物で一ぱいになりたり大勢の人でをしあつて居たのでするぶん困つた。せなかでは赤んぼうが「わあ／＼」なくのですする分困つた。さうかうしてゐる中に、江戸橋を渡つて一町ばかり行くとくたびれたから休まうとすると家の近所の油屋の伯父さんと伯母さんにあつたので丸の内へつれていつてもらつた。

そして翌朝の八時頃母に會つた。その時はする分うれしかつた。父と會つたのは田舎の家で丁度五日目で有つた。

よいお母さん

神田區 今川尋常小學校

第五學年女 平山美枝子

だあれもないたゞ私の兄弟だけにしかないものはお母さんです。いくらお友達にお母さんが有つても私のお母さんはないでせう。みなさんもさうで有りませう。そのよいお母さんは火事で逃ける時は私たちの手をひいて自分の體はどうでもよいからおつしやつてにがして下さいました。又學校はひえるからふとんをこしらへて上げませうとおつしやつて大いそぎでふとんをこしらへて下さいました。そのふとんはめりんすの赤や青がはいつてゐるきれいなふとんではありません。けれども赤や青がついてゐるのをこしらへていたゞいた時よりもうれしうございました。その時はしみ／＼お母さんの有難さが身にしみました。

九月一日大地震

神田區 神龍尋常小學校

第五學年女 鳥光明光(十三歳)

がた／＼ぐら／＼と家がゆれだしました。さほどの地震ではあるまいと思つてゐるとゆれ方がはげしくなりました。私の家は材木屋ですから家の中に立て、あつた檜松等の三間物がた／＼とすすまじい音をたて、たほれる様は誠にものすごいです。家の中に入れて有つた自轉車がめちやく／＼になつてしまひました。父は外にたて、有る木がたほれなければいゝがと云ひました。地震がやむとすぐ外へ出ました。母や私や弟が外へ出ようとするや地震が來ました。すると母がゆりかへしが來たから早く家へ御はいりなさいと云ひましたのでいそいで家へ飛び込みました。その中に雲陽學校の土藏の壁がおちてそのほこりが家の中へはいり家の中はほこりだらけになりました。まだ地震はやみません。電氣を見ると波の様に動いてゐました。その中に棚にのつてゐた。七りんやなべなどがちやく／＼と落ちました。間もなく地震がやんだので外へ出ようとするや父が裏にたふれてゐた木をなほしてゐました。外へ出ると外の木はたふれて居ません。父にきくと地震のさい中に丸太で木をおさへてゐたのださうです。外にひなんをしてゐると神田驛の東の方から煙が／＼と立ちのほりました。私は不思議に思つて父にきくと父は火事だらうと云ひました。三時頃になると火の手はますます強くどん／＼もえひろがりました。私達が心配してゐると、父が此の邊はガードが有るから火はガードでよけるからへいきだと云ひましたので私達もその言葉にはけまされて力づきました。それから後にその火はほかへひろがりました。

た。豎大工町の方へは來ませんでした。けれども四時頃になると今度は大藏省の方の火があぶなくなりました。父はあゝ今度はこつちの火があぶないといつてゐる中に又明神様の方から火の手が上り始めました。さうすると豎大工町は三方から火につままれてゐます。もう七時頃と思ふころ豎大工町うけもちのおまわりさんが、金子さん早くお逃げなさい早く逃げないとあぶないですよ早く／＼と云ひましたので母や私や弟は父より先に上野へ逃げました。上野にゐても父が無事で逃けてゐてくれ、ばいゝがと思ひました。田舎にいつても父のことが心配ですから四度も父が生きてゐるか否かと易者にみてもらひましたが皆生きてゐるといつたので喜こんでゐましたが、いくら待つても父の歸りがないので今一度易者に見てもらふと今度はもう此世にはゐませんねと云ひましたそれをきいた。母は大さうなげきました。

すると田舎の人がそんなになけいとも歸つて來ないからあきらめた方がいゝと云ひましたので仕方なしにあきらめました。今東京へ來てゐても私の家はひつそりとしてゐて淋しいのです。

恐しかった大震災

神田區

神龍尋常小學校

第五學年女

萩田はな

な(十三歳)

あゝ恐ろしかつた大正十二年九月一日の地震。

私の家では地震のあとすぐに荷物を皆常盤橋に出ました。私共はその荷物の側で避難して居りましたが、四方から起つた火の手があぶなくなつたのでお隣のおぢさんとおばさんとお母さんと兄弟四人とで丸の内へ逃げました。ところが其の途中でお母さんにはぐれてしまひました。私達兄弟は大きな聲をして呼びましたが何しろ混雑して居たので何の答もありませんでした。仕方がありませんから其のまゝ丸の内へ向ひました。着いたら芝生の上は人と荷物で一ぱいでした。其の時はもはやあたりは眞暗でした。やう／＼の事で芝生のはじめのせまい場所を見つけてそこへ一時やすみました。さあ家から常盤橋へ荷物を運んでいらつしやつたおぢいさんやお父さん、其の荷物の處で番をしてゐるおばあさん達それからはぐれたお母さんの事を考へるともう心配で心配でなりませんでした。あたりはあくまゝの如くぐれんの焔が空を圍んでゐるのでした。私はそれをばうぜんと見てゐましたがいつしか熱い涙が流れ出るものでありました。時々なま暖い氣持の悪い風はほふをかすめて行くのでした。其の晩はかやうになさげなく食物もたべないで夜を泣きあかしました。あくる日の二日の朝は早くから親は子呼び子は親を探さすらひの人々の姿は本當にみぢめなものでありました。

それ等の人々の聲にまちつて「旭町の京定さーん」と呼ぶ聲がかすかに聞えましたので一同は

大きな聲で返事をして立つと荷物や人々の間から小僧の顔がひらりと見えたのですぐにそこへ飛んで行くとおばさんと親類のおばさんと女中と小僧がゐるのでした。一同その喜びは筆には書き盡されない程でした。それから一所に赤十字の側へ避難を致しました。

私の其の時の體は綿の様につかれ又うると寒さで目が廻るほどでした。其の時の弟や妹のみぢめなものであつた姿を思ひ出すと、今でも涙を流さないではゐられません。

お母さんもきつと何も食べないで君子に飲ませるお乳がなくて困つていらつしやるだらうと思つて心配してゐると鶴川さんの女中さんが探しに来てゐらつしやつたのでみんなは喜びの餘り涙を流して迎へました。それで晝頃には知合の人に會つて焼けとたんを拾つて来ていたゞき小さな掘立小屋をこしらへて其の中へ入りました。あとはおぢいさんやお父さんの事が氣がかりなのでした。しかし男なのですからどこかに居ると思ひましたが其の一日も何の便りも有りませんでした。

妹などがおぢいさんやお父さんは今は何處に居るの等と時々きくのでした。何も知らないで云はれる私の胸ははりさけんばかりでした。其の晩の九時頃には大さう動が始まつたのでした。

それは神奈川から〇〇人がおしよせてくるといふのでした。私はいきている空は有りませんでした。そんな思ひをするくらゐなら一層死んだ方が増したと思ひました。

あたりは静かで所々に人々を呼ぶ聲がしましたが、それも聞えなくなつていよいよしいんとして何の音もしなくなつたかと思ふと向ふの方の木の間から時々びかつと火の光りが見えました。それはそこらを警戒してゐる光でした。其の物すごかつた事を思ふと今でも身の毛がよだつ程です。

それでも私達のすぐ隣に避難してゐた人は男の方が多かつたので大變に心強う御座ました。さうして〇人を三人ばかり捕へました。そして夜の明けを待つてゐました。そして三日の日に小石川指ヶ谷小學校へいつたのでした。其の途中雨に會つてぬれぬすみになつて歩いたのでした。學校にゐても毎日々々おぢさん方の便りが有るか〜とまつてゐましたが何の便もありませんでした。いまだ其の行衛がわかりませんから焼死なされたものと思つてあきらめてゐるばかりです。

バラツクの校舎で學ぶ

神田區 芳林尋常小學校

第五學年男 高橋 藤雄

十月十二日に郵便が届いた。見ると僕の受持の山田先生からだ。焼野へバラツクが建つたのかと思ふと飛上る程喜しかつた。屋根がなくともかまふものか。十四日に學校に行くと猛火と戦つた

我が學校の正門が「不滅の姿を見よ」と云はぬ許りに建つてゐた。校庭には七棟のバラツクが建つて奥の二棟だけが勉強する所だつた。震災前は六十人程居た私の組は、わずか十七八人位になつてゐた。机もなく組と組との境も無く唯葎の上で勉強するだけだつた。授業時は僕が歸つてから二三日のうちは二時間だつた。しばらくたつて組と組の境が出来た。戸板を横にして机のかわりにし風の吹く寒い日はそれを戸のない入口に立て、寒さを防いでゐた。それから或日小使さんが机と腰掛を運んで來た。皆は喜んで腰掛へ腰をかけた。机の上に字を書く眞似をした。其の後一人二人來て僕等の友達に日毎にふえて來た。授業時間も多くなつて體操なども出来る様になつた。體操の時は何時も神田明神の境内でやつた。十二月の二日地下室の上へ新校舎を建て始めた。校長先生がこゝの大工さんは熱心だと仰つたがその爲か思の外早く出来上つた。震災後第一年の新春をこの新校舎で祝つて三學期のはじめからこゝで學ぶ様になつた。未だ外新校舎の出来ない學校もあるときいてゐるのに僕等は何といふ幸福だらう。(大正十二年十二月二十日)

焼けた學校の思ひ出

神田區 芳林尋常小學校

第五學年女 堀江ハマ子

今夜の様な小雨のしとくとふるしづかなさびしい夜には、私はきまつた様に焼ける前のなつかしい學校を思ひだすのです。それには今私にとつてわすれることの出来ない思ひ出があります。一年にはいつた時からずつと仲よくしてゐたるつ子さんと毎日々々仲よく手をつなぎ合ひながら校庭のお池の金魚を見たりしてくらした日もありました。又あのきよらかな梅のさくのをたのしみに毎日々々梅の木の下へ行つては「早くさけばよいにね」とみなさんでつほみをかぞへあつた時の事などみんなく思ひ出ふかいことばかりなのです。

あのりつばな學校も一夜の中に灰になつてしまつて今は昔をしのぶことも出来ない私共はどうして前をわすれられませう。

しかし私共は新校舎の中でいつそうべんきようして、いぜんのりつばな學校のせいといじょうにいたしませう。

僕の伯父と伯母

日本橋區 常盤尋常小學校

第五學年男 君野辰之助

あのうるはしい僕達の都に突如としておそふて來た大震災火災は思ひだすだに頭から水でもあび

せかけられた様に「ぶるぶるつと」身振ひする様だ。何んと云つても恐ろしい。

新しい初日が何時しか流れて復興の響きは至る所に満ちくくつてあの恐ろしい災害も一日々々と僕達の小さなむねから薄らけて來た。

然しねてもさめても忘れられぬのは伯父と伯母である。あゝあのなつかしい伯父と伯母は今頃何處に居らるゝだらう。やはり、さうだつた。今こそは黄泉の客となつてめいどの旅に急いでいらつしやるであらう。僕の伯父と伯母はそれはく僕をかはいがつて下さつた。

僕も又伯父と伯母に少しもそむく事なく愉快に日を送つて來たのである。然し、夢だつたのかしら、あゝ、やつぱり夢ではなかつた。あの恐ろしい悪魔が此の東京市内をおそふて僕等をなやましたばかりではなくあの美しい建物を灰にし其上どこに行つても死人の山をきづき上げられた。其の時であつたあのなつかしい僕の伯父と伯母は僕ををきざりにしてあの世の人となつて長い旅につかれたのである。僕はお別れの時あいさつもしなかつたのになぜだまつて行かれたのかしら然し僕が善い行ひをすると草葉ので蔭聲高らかによるこんで居られるさうだ。あしたは命日である。

今頃はきつとめいどの旅路もさぞかしおつかれでしょうね伯父さん伯母さん。早く又此の世の中に生れかへつて來て下さい。暇さへあれば僕をつれて遊びに行つて下さつた。

僕は學校の歸りにはきつと急いで歸る。

けんかんに行つていくらよんでも返事をしてくれない。さうだ。僕の心はにわかには暗くなる。こんな事がいくどもくりかへされる。

昨夜も寝の中で伯父と伯母にお話ししたり遊びつれられて行つたりしてうれしかった。元氣よく目をさましておきて見るとやっぱり僕一人だつた。さうだ。僕は一生けんめいべんきょうしなければならぬ。

僕はえらくなつて居るから早く歸つて来て下さい。それを何よりも楽しみとして居る。

静かな朝

日本橋區 常盤尋常小學校

第五學年男 井上トシ子

あゝ静かな朝！

通りを見るとバラックが物さびしい程静けさをあらはしてゐる。だが新鮮な空氣は町を包んでゐる。何んとも言へない朝の心地よさ、復興の氣分も元氣も満ち／＼してゐる。きつぜん其の静かさを破つて聞える汽笛、それがらようど人々を目覺ます合圖のやうに。

どこの家もまだ電燈がともつてゐて人通りも少くない。

けれど往來を歩いてゐる人の下駄の音が静かな町にひびきかすかに消え行く。

向ふを見ると電車が「臺うすもやの中を走つて行く。

どこからか鶏の聲が静かな町に聞えた。

あゝ静かな朝！

苦しい中の嬉しさ

日本橋區 坂本尋常小學校

第五學年男 竹内太喜男

それは地震の二日目で、場所は避難した宮城前のことであつた。昨日の晝も御飯を食べずに逃げ歩いたので、おなががすいて歩く事も出来ないやうにつかれてゐた。するとそばの人が「今自動車で兵隊さんがパンをまいて呉れてゐる」と言ふので僕は急に元氣を出して行つて見た。成程お堀のそばで盛んにまいてゐた。拾つてゐる人はとても大勢で一度ほうつた時は僕には一袋も拾へなかつた。其の中に又なけた、今度はいのちがけでやつと一袋拾つたのでうれしかった。自分たちの居場所へ戻つて來た時は夕方であつた。それをみんなでわけたら半分あて値であつた。其

の時のパンのうまかつた事は一生わすれる事は出来ない。

自 轉 車

日本橋區 坂本尋常小學校

第五學年女 市川光枝

私は自轉車に乗りたくてたまらない。毎日々々、お姉様に、

私「お姉様、今度通信簿のお點が、乙が一つか全甲だつたら自轉車を買つて下さいね。」とせがむ。お姉様は、

姉「そんな男の子の持つものは、買つて上げません。そんなに欲しいのなら、頭をかつて、男の子におなりなさい。」とおつしやる。私はいくら買つて下さいと云つても、てんで聞き入れて下さらないので、今度はお父様に申し上げたら、やつぱりいけないとおつしやる。私は、つまらないのでそおつと、表へ出て家の前に並んでゐる自轉車に足をかけた。とたん、「こらつ」といふ大きな聲がした。私は吃驚して、思はず後へ下つた。こわくその人の顔を見上げると、お隣りの小僧であつた。私はそれ以來又そんな目にあつて、お姉様に聞えると叱られるから二度とそんな事はしない。

大正十二年九月一日

日本橋區 久松尋常小學校

第五學年男 坊野喜太郎(十二歳)

九月一日！ 零時二分前！

最も忘るゝ事の出来ない最も記念すべき日なのだ。思ひ起せば六ヶ月の前の事、あゝあの大地震——大火災——グラノ〜ときた時の體は鞠の如く、自分自身で自分の體を如何する事も出来なかつた。がらく〜といふもの凄き音と共にかはら屋根は落ちる壁は土煙を立て、四方より襲ひ来るあゝ絶対絶命——僕は氣が遠くなり何も考へは無かつた。其の内にどうやら静んだ様なので今だつた——と思ふと何もかも忘れて外へ飛び出した。其の内に火の手は四方より起り刻一刻と僕等は危険になつて来る、火の手は八方に廣がり風は起つて、其のもの凄さ——。僕はいたゝまらなくなつて、もまれ〜てお父さんと上野の山へいそいだ。ほつと息をついた時はあの廣い大東京も、火の海となつてゐた。

家から丸の内へ

日本橋區

日本橋區 久松尋常小學校

第五學年女 梅本ふみ(十二歳)

長い夏休も夢の様にすぎ授業始の九月一日朝雨のしとく降る中を喜々として登校した。久しぶりに先生や學友にあひ樂しき夏休や後の日を語つて別れた。家に歸り母が晝飯の仕度をするうちと新聞に手をかけた時だつた。とつぜんすさまじい家鳴がして家は上下にゆれ、すすいへい動にかわつた。が、瓦や木片が雨の様に落る。

人々はたゞ驚きさげばばかりであつた。第二第三のゆれが靜まつた頃家々では荷物をまとめて丸の内や本川ばた等へ避難する。火の手は四方に上つて刻一刻に近づいてくる。不安につまられた父は「家でも丸の内に行かう仕度をおし」さしづをうけ着がへの二三枚づゝを持つて家を出た。芳町の角までくるともう火で一寸も進むことが出来ない。しかたなくよろひ橋へもどると火の海父は「しかたがないから焼跡へ行かう」といふので新大橋まで行くと巡查が「荷物を持つてはのせないぞ命がをしくばおいて行け」とどなつてゐる。思ひきつてすてゝ入つた。

けれども荷物もちこむ人もある。とにかく行つて見ようと母や伯母はすてた荷物をとりに行つた。とりかへした荷物を真中にしてすわつてゐると橋のたもとからどんく火の粉がとんできて頭の上にふりかゝる。

おそろしい一日はあけて二日になつた。つかれきつた私共は氷でうえをしのぎ、三日に立退くことにして休んだ。三日のあけがた深川の方から〇〇人がごろしにくるといつて大勢の人がにげてくる。私共は二度荷物をまとめ丸の内へ逃げだした。後をふりかへりく。

復興する夜の大通り

日本橋區 城東尋常小學校

第五學年男 澤田欣二

焼け残つた國分商店の四階建の蔭へ、此の頃天氣つゞきにもつかれた色もせず、相變らずきらきら光つて冬空の太陽がかくれた。西空の夕焼の色と反對に、うすぐらい夜の幕がそろく下り始めた。毎晩くせの様にあつた停電も、珍らしく今夜は何の氣もなく、西川商店のウインドーは美しく電燈がてらされてゐる。昨夜までは見えなかつた木原店の食堂も、焼土の山が片付いたので、赤い行燈だの天麩羅の旗等がよく目立つて來た。停留場では電車を待つてゐる人の列や露店を取り捲いてゐる見物人で中々雑踏してゐる。四つ角のところ「二枚三錢」「二枚三錢」といひちりんくとりんを鳴らし乍ら、新聞賣りが夕刊を賣つてゐるが、却々よく賣れる。京橋の方を見ても神田の方を見ても一晩毎に電燈の數も増して行くのも、此の五六日は特に目立つやうであ

る。
白木屋の角には丸白の印絆纏を着た人が復興大賣出しと云ふ看板を上げてゐる。だんく、暖くなるにつれて、復興気分がより以上に漲るだらうと楽しみにしてゐる。

バラツクの教室

日本橋區 城東尋常小學校

第五學年女 鈴木シヅエ(十三歳)

寒い北風を物ともせず隣の空地で朝禮をする。

誠の道の唱歌に心を清め、一足バラツクの教室の中へ入るとひやりといやな心持が身をおそふ目ばりをした横かべの紙がやぶれてピラ／＼動いてゐる。其處此處の打ち釘にはばうしやえりまき等がかゝつてゐる。正面に粗末な黒板が一枚ある。此の教室に一日の大切な時間を過ごすかと思ふと、やけない前の事が實にたふとくなる。始めは皆さんが手製の粗末な机を持つて來て藁の上に坐つて勉強してゐたが、今は大阪市から寄贈された、机が來て、全生徒の三分の二は腰をかけてゐることが出来る。しかし残の人は未だつめたいアンペラの上に坐つて學ぶのである。かうしてバラツクの教室に勉強してゐても心はバラツクになつてはゐないつゝである。今日も

日本橋區 有馬尋常小學校

第五學年男 本田政雄(十三歳)

思ひ出せば大正十二年九月一日の正午少し前の事である。

僕は其の時丁度食卓に向つた時であつた。突然すさまじい震動が來た。其の時父はとつさに、「火を消せ」と云つた。すぐに何かにもものをしてゐた火は消された。「ミチ／＼」といふ柱の音。今にもおちるかとはかり搖ぐ天井。ブランコのやうに搖れる電球……。續いて本箱の上の物が崩れおちた。僕はあまりのおそろしさに外へとび出さうとした。父は「ちつとしてゐるあわてるな」と云つた。

又第二、第三、の震動が來た。其の時近所の家がたはれたと見えて、砂煙がもう／＼と上つた。西の空に高く煙の上つたのはそれから間もなくであつた。僕の家でも入用品をもつて丸の内へ丸の内へと向つてにげたので皆無事であつた。

今は元の所へバラツクを立て、學校へ通つてゐる。なんだか、そんな恐ろしいことは夢の様で

もあり又はつきりおそろしいと思ふこともある。

バラック生活の一日

日本橋區 有馬尋常小學校

第五學年女 榎原八重予(十三歳)

あ、あの恐しい震災も夢の様に過ぎてしまつて今は變りはたたバラック生活、それを見るとひとりでにくらしさがあふれます。家の中には戸棚に一つばい着物があつたり、二階には琴や書物机床の間などあつたのといつでも同じ事を言つては——、兄さんに「そんなこと言つたつて」と言はれます。二間しかないせまい家の中にはむしろをひいて、何から何まで新世帯だと云つてはこぼすのがお母さん——、棚をつたりまどをはつたり忙しいお父さん——、お誓の皮をむくので手がいたいといふ弟——、手が熱いといふお祖母さん——、お菓子がほしいといつては泣く妹——、なんだかどこを見ても心細い様で涙の出る事ばかりだ。こんなに苦しむのもあの憎らしい震災のためだと口惜しくて——たまらない。

思ひ出

日本橋區 千代田尋常小學校

第五學年男 戸塚朝之助

やうやく震災災にのがれた僕等は目的の家にとどり着いた。もう大火は消えたかを見るとまだくわい獸のごとく黒煙濛々と立ち上つてゐる。こちらまで焼けて來るかと幾度となく心配した。ひなん所には逃げてくる人や車で埋もれてゐる火は二三日たつておさまつたさ。あ一日の地震から心がくじけた僕はすこしのゆれでもひびきでもびく／＼するやうになつた。弟が「地震だ」と言ふ間もなくぐら／＼つと家がゆれると家中「わつ」と云つてさわぐ有様であつた。お父さんは家が焼けたのでがつかりしてゐらつしやる。僕は六七日後お父さんに連れられて焼跡を見に行つた。ひふくしように來た時石炭の焼けがらがあつたのだと思つたらお父さんは「人の骨」だとおつしやつたので僕はおどろいた。焼けた家の前に着いた時にはゆめの様な感じがした。

御母さん

日本橋區 千代田尋常小學校

第五學年女 木村千枝子

「ド、ド、ド」と云ふ音がしたと思ふと私はがた／＼とゆれる中を何にも考へずに夢中になつて

一生懸命に外からたゞみの上まで上つた。そこに居た私がねえさんとよんで居る人と私がをぶつて居た赤坊のお母さんと一しよにだきあつた。そしてねえさんは「なむみやうはうれんげきやうなむみやうはうれんげきやう」と一生懸命。私の其時の氣持はこれが本當かしらと思つた。下はつぶされて二階が地面とすれ／＼になつて居るのでやう／＼はひ出した見るといつの間にか家といふ家はみんな平屋になつて居た其時は私は何だか笑つて見たくなくなつてしまつた。そして方々見渡してしまふと頭に浮んで來たのはお父さんやお母さんの事である。そして家の方へ引きかへさうと思つて居ると「千枝子々々々」とお父さんの聲急いで行つて見ればこれは又どうした事「お母さんがつぶされた。此の下にはいつて居るのだそこをうごいてはいけない」とおつしやる……やう／＼お母さんは掘出されたあ／＼うれしいと思つた。けれどもお母さんは水道の鐵管がはれつしてぬれねづみになつて居る……家の中へはいつてタンス等へかぎをかけ始めた。私はふと物干へ出て見た……と右の方からも左の方からも煙が出て居る火事、それは私にとつてはするぶんおそろしかつた。今考へてみてもぞつとする。私が「火事よ」と云つたので俄にタンスのかぎを下し始めた。もし（其日はお父さんは丸の内へ行く日であつた）お父さんが丸ノ内へ行つたらと思ふとあゝと思つてしまふ。それは私の手ではとてもお母さんを掘出せないからである又あの火事又地震のことを考へると身ぶるひがする。

上野の一夜

日本橋區 十思尋常小學校

第五學年男 松本秀夫（十三歳）

あゝ思へば身の毛もよだつばかりの上野の夜、僕が上野についた時は夜の八時頃であつた。竹の臺に出て見れば花の大東京は悪魔のやうなぐれんの舌におそはれつゝ、燃えてゆくのであつた。高い／＼と云はれた、十二階も八階目より折れてそのざんがいかからは、悪魔のやうな火のいきをはいてゐた。建物が倒れる音にまじつてどこからともなく、人のうめき聲が聞えて來る、そのうちに友をよぶ聲、子をよぶ聲、平和な上野の森を破つた。火はいよく、勢をましてまるで晝間のやうで向の本の所に居る人の顔がはつきり見えた。人々は小さい地震でもそれきたと云ひながら木の根にあつまつてくる。僕はごさの下にかはらをしいて眠りについた。眠らうとしてもこれからさきの心配が氣にかゝつてなかく、眠られなかつた。その中に前の方に居た人々はもんぜき様が今おちたといつて居た、僕はそんなことを聞いて居る中に、いつしか眠りについた。

安心するまで

日本橋區 十思尋常小學校

第五學年女 上田喜代子(十三歳)

「あつ地震だ」と思ふ間もなく家は倒れるばかりに、ゆれ初めた。私はそばに居てびつくりして居る赤ちやんをだかうと思つて居ると、小僧が来て、外へ連れて行つてくれた。間もなく地震はやんだ私の胸は波立つ様にどろきがひどくなつて居た。お母さんの顔を見た「まあ喜代ちゃんの顔は眞青」とおつしやつた、お母さんや姉さんが家の中へ入つて玉子や御飯を出して来て下さつたが食べる氣がしない「火事だ」と云ふ聲に、見れば黒煙は空を包んでゐる。お父さんは「まさか家は焼けないだらうが荷物を兩國まで運んでおかう」とおつしやつた。それからツラ着物をつめこんだり夜具をかたづけたりしてゐる中に廣場にあつまつてゐた人達も段々へつて来た、あまり黒煙のほり方がひどいので、私達は家のうしろが焼けてゐる様に思つたので「お母さん危い」とか「早く逃げませうよ」など、云つた。その時はもう焼けトタンや、紙の焼けた様なものが飛んで来た。お母さん達もやつと家を見切つて淺草橋公園へ行つた。公園の中へ入つて空を見ると、空は眞赤に焼けたやれた様な色をしてゐる、家の倒れる音や赤んぼうの泣く聲が一しよになつて何とも云へない物すごさ「今は郵便局が焼けてゐるのだ」と云ふ人々の聲に、見れば火焰が高く空をベロ／＼なめるかの様に川向は眞赤です「それではお前達は先に上野へお母と一しよにお

いで」と云ふ。お父さんに別れるのはいやですけれど今そんなことを云つてゐる場合にはありませんのでいやく／＼ながらお母さんと私達兄さんをのけた五人の兄弟はお母さんの跡について上野へ行つた。途中で弟はねむいと云ひ出したのでお菓子の店へよつて少し休めてもらつた。淺草橋の方ではお父さんや兄さん達もガタ／＼になつた乳母車の中へお店の帳面を入れて火の中をくりくりして上野の池のはたまで来たさうだ私達は「朝になつたらむかへに行く」とおつしやつたお父さんの言葉を思ひ出してすい分待つた。私は待ちきれなくなつてぶら／＼とお父さんをさがし旁歩いてゐた、すると後から目かくしをするものがある、見れば兄さんであつた喜んでお母さん達と一しよに父さんの所へ行つて皆顔を合せた時には一安心した。

復興の東京

日本橋區 東華尋常小學校

第五七年男 鷺尾満佐治(十三歳)

あの恐しく悲しかつた大震災火災があつてから、最早約半年を過した。今日では市内も七分通りバラツクが立ち、震災の愚痴を言ふ人が消えた様になくなつた。そして到る所に「復興」と言ふ文字が流行してゐる。店も復興と言ふ屋號をつける人が多い。西洋料理復興軒、そばや復興そば

床屋では復興床、昨日三越へ行つたらお雛様までも復興雛と言ふのがある。一番復興の早かつたのは下谷・浅草・本所・深川・麴町等で、日本橋が一番復興がおそいと言はれてゐるのが残念だ。電車も大方通して朝夕は震災前の三倍位の混雑を呈して居る。省線は車台を増し、市電は朝夕の混雑時間に急行電車を出し、降りる人の少ない停留所では止らない様にしてある。又市は乗合自動車を運轉して居る。

これだけでも江戸ツ子がいかに復興に急いで居るかといふ事がわかる。

東京名所の一つの水天宮は、真先に復興して相變らず賽銭の音と拍手の音が神々しく響く。江戸の草分、我等のほこりとして居た魚河岸は大震災火災のために築地へ行つてしまつたから日本橋は大そうさびしくなつた。

不思議に焼けなかつたのは鳩ボツボで名高い浅草の観音様と神田の佐久間町だ、二ヶ所はともに周圍は焼けて焦土と化したのが、其の所だけは木一本も焼けてゐない、これはきつと風の具合と神様のお助けでせう。

活動寫眞と芝居で名高い浅草公園は大變な景氣だそうだ。

松竹キネマ特約〇〇館等と染めた旗を澤山立てゝゐる。

エハガキを見て、こんなにもと驚いた。實物を見たらなほ驚く事でせう。

銀ブラで名を賣つて居た銀座通りは赤青紫等の電灯で、家も町も色取られて目もさめるやうだ。三越も元の所でもう五階まで使用してゐる。

一月一日校長先生のお話に英國の新聞に「日本の人は失望のどんぞへ落ちてゐる、へこたれないで、復興心をもつて働いてゐる。四五年たつと、きつと立派な帝都が出来るとほめて出てゐたさうです。僕等も大は勉強して、えらい人物になり、立派な未來の大東京を作らうと思ふ。

罹災して

日本橋區 東華尋常小學校

第五學年女 永井きぬ(十三歳)

大正十二年九月一日午前十一時五十八分、私はごはんをすませてしまつたので本を讀んでをりました。おそろしいひびきと共に家は波のやうにゆれ出しました。始めは私は荷物自動車を通つたのかと思つて別に氣にも止めませんでした。その内にギシギシと云ふ音。お母さんのおこゑがして地震ですよとおつしやいました。私たちはいそいでおもてへとび出しました。

それから丸の内へ一時避難しました。其の後五ヶ月間轉々と避難致しまして一日廿三日やうやく品川から焼跡へうつりました。まだ私の家はできませんので一時かりごしを致したのです。そ

れから毎日かうしてもとの學校へかよへるやうになりました。災前にくらべると家も小さくなりましたし、障子もちよつとさはると外れる様な有様です。雨の降る日なども屋根がトタンですからカタ／＼大へんにぎやかです。風の吹く日なども屋根の上を大男が歩るてゐるやうです。

前があいて居りますから、陽がよくあたります。家も多くは平家になりましたし、橋などもほんの間に合せのため馬力などが通るとぐら／＼して地震のやうです。

學校のやうすも大へん變りました。お教室もバラツク教室と避難民收容バラツクとを使つてゐますが男女生が一週間交替です。避難民收容バラツクの方は、光線が不充分の上すきまだらけですから其の寒い事、然し寒いのはがまんするとしても、一番始めの時間などは薄暗くてほんとうに困ります。

そしてお書頃からやつと明るくなります。無数の節穴からさし込む陽の光りに、塵埃がクルクル立ちまはる様はなんとも異様な感じがします。

此の震災で私達ほんとうの裸一貫になつてしまひました。おどろきとおそれとかなしみと苦しみ!! ありとあらゆる人間苦を味はされました。もし私に父が生存してゐたらと思ふと私は言ひ知れぬかなしみにとらはれます。然し人間としてどれだけの苦しみにたえ得るか云ふ一つの試験をうけた様なものです。このてんから見ると罹災してたゞ徒に悲觀するのは愚の至りで、これ

だけの苦しみにたへて來た心の力を以つて今後復興に力めなければならぬと思ひます。着物や道具、そんなものはもうほんとうの寒さを防ぐに足る物で澤山です。間に合ふ物でたくさんです。そして美しい人情のあらはれにすがつて、徒らに悲觀する事から私たちは逃れるだけの實力を平常からやしなつて居なければなりません。

赤い靴

日本橋區 濱町尋常小學校

第五學年男 狩野龍二

僕がまだお母さまのお乳を飲んでゐる時分でした。或日僕が床の中で泣いてゐると、お母さんが來て、「ほうやお目ざめかい。」とやさしく言葉をかけ、僕をだき上げて茶の間へやつて來た。そして火鉢の横へねかしたまゝ、棚の上から箱を取り出して其のふたをあけて見せて下さいました。お母さんは「ほうやお靴は奇麗だらう、赤い赤いお靴だらう。」と言つてなぐさめて下さるのでした。

丁度僕が四つの時でした。お母さんは僕に赤い靴を買つて下さいました。

そして其靴を玄關の所へもつて行つて、はこうとすると、這つてコロ／＼／＼と、外へ落

ちてしまひました。

そこには水溜りがあつて、其の中へ落ちて、泥ろ／＼になつてしまひました。それを取らうと思つて、一步足を前へふみ出しました時に、足をふみはづして、同じやうに水たまりの中へ落ちてしまひました。そして、泣き始めました。その聲を聞いて、茶の間からおかあさんが出て来て僕をおこして下さいました。僕はぬれぬれすみのやうになつた體を洗つてもらひました。然し、頭に手をやつて見たら、大きなこぶが出てゐたので、ワーと、ばかりに泣き續けました。

外の方を見ると赤い／＼靴の姿は見えなくなつてしまひました。よく／＼見ると、泥まみれになつてゐるので見た／＼けでまた泣き出してしまひました。其の赤い靴が所々に穴があいてゐた。靴屋へなほしにやつて五日ばかりかゝつた。取つて来てからそれをはこうとしたら、小さくはけませんでした。靴はいたさうな風をして、にけださうと思つてゐるやうだ。僕は靴をとりおさへてむりにはいたので靴の腹をさいてしまつたらしかつた。

それともしらないから、道悪でもなんでも履いてゐると、なんだか足がつめたいやうなのでぬいで見たらもう靴は腹がさけて死んでゐた。僕は家へ歸へつてからも、それを捨てるのが何んだか惜しい氣がしてならなかつた。

バラツクの夜

日本橋區 濱町尋常小學校

第五學年女 大橋 静子

チン／＼とお隣の柱時計が今しも八時をうつた。しいちやんもお休みなさい又明日學校があるから早く起きなければなりませんから今夜はもうお休みなさいとおつしやるお母様のお聲が聞える。もう寝ようかしら、でももう少し起きて居るわ。と言つたものゝバラツクの家だけにとたんのすき間や戸のすき間からすう／＼とつめたい風が吹こんで来る。晝間はあんなにガラ／＼馬力の音がひびくが夜になるとしんとして時々電車の音や人の下駄の音位になつてしまふ。家中の者が圓い火鉢をまん中に圍んでいろ／＼焼かない前の事を語り合つては此の頃の事をなけいて居る寒さはしん／＼とせまつて来る。

帝都復興

日本橋區 箱崎尋常小學校

第五學年男 澤田 忠一郎(十三歳)

我大日本帝國の首府である大東京も、昨年の大震災火災の爲に跡方もなく焼き盡され、僅かに焼けトタンや瓦がけが残つて居るばかりで、實にあわれな有様に變はつてしまつた。焼け出された市民は大に復興の爲に努力して、焼跡の片附に女子供も一生懸命である。急ごしらいのバラックは日一日とふえて来る。一度田舎に避難した者も段々歸へつて来て、半年ばかりの中にバラックの建物が一ぱいに出て、此の東京を以前の東京よりもつとく立派な大帝都に復興させようとしてゐる、それには私達市民も一緒になつて帝都復興に努力しなければならぬ、それには共同一致して働くといふことが一番大切である、そして皆が出来るだけ儉約をつとめて日本帝國をもつとく福々しくしなければならぬ。それについて僕も學校に行き、先生の言つけを守り熱心に勉強し早く一人前の人となり、此のバラック立の東京を外國の都にもおとらないような立派な大東京としなければならぬ。

帝都の復興

日本橋區 箱崎尋常小學校

第五學年女 西山正子(十二歳)

大日本の帝都大東京市は大震災大火災の爲灰燼となつてしまつた。二三日たつてこのなつかし

いこひしい東京市へ歸つて見ると、影も形も無い、只煉瓦や焼けトタンが一面に散らばつて居るばかり、私はする分悲しくなりました。けれども、もうどんな事をいつても取返す事が出来ない。此れからは我々が一生懸命になつて復興しなければならぬ時が来たのです。夫れから暫くしてから再び来て見るとどうでせう。大通は申すまでもなく小路裏などまで一ぱいバラックが其處にも此處にも出来てゐました。大通には馬車牛車自轉車自働車等色々の乗物や荷車が矢の様に往復して居ます。一月や二月でこんなに開けるかと思ふともう夢の様にうれしい、これは我々が一生懸命共同一致の心で働いたからです。これからは本建築になります。其の時は此の帝都を元の大東京市以上の立派の物として世界の大都會として耻しくない様にしなければなりません。それにはお互に勤儉力行をしなければなりません。私共は一心不亂に勉強し一日も早く立派な人となり帝都の復興を責任として盡さなければならぬと思ひます。

大地震

京橋區 寶田尋常小學校

第五學年男 片岡秀雄

長い／＼夏休みを終へて、僕のすきな秋をむかへようとした日である。丁度書飯をすませて二階で勉強にと取りかゝつた。鉛筆を取り書かけの繪をつゞけようとした時である。「ドン」と一つ最初の微動を感じた。僕は生れつき地震が大きらひであるから、その時も僕はすぐに地震だと感じた。しかもその感じが何時のものとは違つて、横にゆれず下から突上げる様に思はれたので突差に「これは強いぞ」と思はず口から出たと同時に机からはなれて夢中で階段を駆け下りた。下では弟達が食たくのまわりで遊んで居たが僕が弟の所まで来ると「グラ／＼」と最初の太ゆれがきたので弟はわあと泣出した。下駄をはく猶豫も無くあわて、弟と一しよに外に出た。まう外には父母兄は出てる。

その時は戸外にはまだ僕の一家ばかりであつたが間もなく遠波を聞くやうな「ゴーツ」と言ふひゞきと共に、地面が波のやうにもり上つて屋根から土煙を立て、「ガラ／＼」と瓦が落ちはじめた頃には近所の人々はよろ／＼しながら飛び出して来た。僕はしばらく弟とだけあつて地面にすはつて居た。その間も地面は波の様にゆれてあちらこちらで物の落ちる音が聞えるので、どうなることかと思ひながらじつとして居た。

間もなく静かになつたので不安の胸をなでおろした。けれど又も「ゴーツ」とひゞきにつれて大揺れの揺れ返しが来た。

その内北の方に黒煙がもや／＼と立ちのぼるのが見えた。なんだろう、「火事だ」と言ふことを聞いて僕は何んとも言ふ事は出来なかつた。その内火はだん／＼と廣まつて来た。もうこれまで早くにけようと思ひ出した時は四方が火の海であつた。

風はものすごく吹く。「びゆう／＼」赤ん坊の泣聲はなんとなく悲しい。日はだん／＼と暮れて四方は火の光とかはつて、日中の様である。足は丸の内へ向つた人が一ぱいで三足進んだと思ふと二足後へさがる。火は近づく、心はせく、よう／＼丸の内についた。あのおそろしい一夜を明かして、おにぎりをいたゞきに行つた。空腹につめた、その時のおいしさつたらほつべたがおつちそうであつた。

あゝ僕達は今までもすみなれた家は焼かれ、面白い本も灰となつてしまつた。そればかりでなくたくさん人の命をうばひ取られてしまつた。あゝにくらしいあの大地震め。一生忘れはしないぞ。今度は僕達が一生懸命勉強して地震にも火事にもまけない立派な東京を作つてやるぞ。

丸の内へ行くまで

京橋區 寶田尋常小學校

第五學年女 百瀬 幸子

「御飯です」と言はれたので私は下りて行くと、もうお膳の仕度は出来てゐるが母が學校へ行つてゐるので待つて居た。遠くの方で「ゴ—」と言ふものすごい音がしたかと思ふとすぐ「ぐらぐら」とあの大地震だ。臺所にゐた女中は私の方へ飛んで來た。皆たんすの前に身をよせた。私は思はず「なむあみだぶつ」と何度もくくりかへしながらも「母さんはく」と言つてゐる中に又も大きなのが來た。三度大きいのがあつた。

三度目の時もう砂で家の中はまっ暗になつてしまつた。家がつぶれたのかと思つた。父は母を向ひに外へ出た。母も無事だつた。これで家中皆揃つたので又父はそばの伯父の家を見に行く。伯父も伯母も無事だつた。私達はどうかと思つてゐると、おとなりの人が「久安橋に大勢居りますから早くいらつしやい」と言つてよびに來て下さつた。私はもう體がぶるぶるふるへてしまつた。家を出た時びつくりしたのは、どこの人だか知らないがはんでんを着た人が血だらけになつてゐたのを見た時はぞつとてしまつた。久安橋の所へ來るともう人は黒山であつた。それから、しよつ中ゆれてゐる様に見えた。

少し長いのがゆれると私達は皆かたまつてしつかりかぎりについて、他の家が仆れさうになるのを見てゐた、その時の恐しさ何とも言ひ様がない。その内に何處から聞いたのか丸ピルは仆れて三

越は焼けた鍛冶橋は落ちてしまつたとこんなうはさが方々につたわつた。私達もそれを信じてゐた空は煙で眞暗になり、焼けトタンや紙などが飛んで居る。こんどはつなみだと騒いで居る。川はするぶん水が立つて來たので父母は家がつぶれないから一先づ家に入らうと言つてさうじに入つた。そして私が入らうとした時父は「あぶないから子供だけでも先に丸の内に避難をさせ様」とおつしやうたので、私と妹と伯母と女中と先に家を出た。家を出たのは夕暮近くであつた父から「楠公の銅像のそばにゐなさい」と言はれた言葉が心にうかんだ。

もえ來る火を見て宮城の方へと足を急がせた。いつもなら一人でも楠公の銅像の近所は行かれる此の道をどうした事か見當がつかなくつた。今考へて見るとどこを通つたか分らない。

仕方なく通りがりの人に尋ねた。洋服を着た男の方でなんとなく落ちついた人に見えた。「これから麻布へ歸るのですが一しよに行きませう。」と言つて下さつた。その時のうれしさ身にしみておほえた。やがて二重橋も見えて來た。先づこゝまで來れば丈夫と思つて此處でやつと安心はしたものの、早く父と一しよになりたい心がたえず離れなかつた。私達はなほも歩を運んだがまだ銅像は見當らない。芝生にはもうあちこちに人のかたまりが見える。連れてもらつて來た人にお禮を言つて別れた。何分にも足はくたびれた。空こそ眞赤であつたがもう日は暮れてしまつたのでやむをえず一晩は父母にもあへず夜が明るのを待つばかりだ。提灯をかざして名前を呼んで

ゐる人を見ると、父母も心配して此の人の様に探して居るのではないかと思はれてなんとなく胸一杯になつて来た。

学校の體操機械

京橋區 靈巖島尋常小學校

第五學年男 天沼兼三郎

あゝ亦今朝もテントの中からツチのひびきかんの音がきこへて来る、寒い朝風は體もちぢまる様に指も切れさうであるのにあの火の氣のない天幕の中では。もう先生方が大工仕事を始めてゐらつしやる。

何を造しらへてゐるかとそつとみたら校長先生を始め他の先生方がせつ／＼と體操機械をこしらへてゐらつしやる。先生方の大工仕事は寒い日も暖い日も雨の日も限りなく續いて行く内に肋木の組立が出来上つた。私たちのむねはうれしさの餘りたゞ、おどりにおどつた。

次の日からは先生たちは穴掘りの人夫妻で一生懸命になつてほつた。其の時は私たちも手傳をして上げました。先生方の御骨折を思ふと、私たちはほんとうに幸福だと思ふ。

よく日の日々新聞の夕刊に先生方の仕事姿の、しやしんがのつてゐたのを見た時私はたまらなくなつて思はず、とくいさうになつた。又そのよく朝學校へ来てみたら肋木が堂々と立つてゐるあゝうれしい平行棒も立つてゐるし、おやく平均臺が五つもならんでゐるしとみんながめずらしさうに大きわざをしてゐる。其の時私はこう思つた。仕事を始めてからも一月餘りもたつが、其の間の先生方の苦心はどんなであつたろうか。朝早くから、あの火の氣のないテントの中でのみとかんなどつちをもつておけいこの暇々に一日中あせ水たらしめてこしらへた。又あたまをどんなにつかつた事でせう。よくもあんな大きな仕事をしたもんだと思つた。

先生方は、兒童を可愛がる心からこしらへたのだ。體操機械がある學校は市内の焼出されの學校ではおそらく私の學校ばかりでせう。

何と云ふ名譽の事でせうか何と云ふ愉快な事でせう。

買った體操機械よりも先生方の同情のこもつた方を使つた方がありがたくなつて、體操するにも力がでる。

ふとん

京橋區 靈巖島尋常小學校

第五學年女 岩井マサ子

我こそは新島守よ沖の海の

荒き波風心して吹け

と後鳥羽上皇の御製

風の強い夜寒い晩などはこの歌が思い出されて、あの大火が今更の様にうらめしくなります。私の家はもとゐた川口町に家を立てました。そまつな、バラック建だから風でも吹くと、ゆれま

す。寒い風がえんりよなくすきまから這入つて來ます。

天井もない雨の晩はさうぐいしい上さびしくなります。

六疊ですから狭苦しいそれでもお父さんが壁をぬつて下さつたのでいくらか暖になりました。

それでも外から空気が流れこむと見へていつも冷い様な気がします。あのおそろしい震災の時には一枚のふとも出しませんでしたが、この頃やつと二組だけこしらへました。

一組のふとんはお母さんに妹に弟に小さい好子と四人でねますもう一組にはお父さんと私二人でねます。

私はきゆくつな事はないが、お母さんや妹の事をかんがへると早く春が來てほかくと暖くな

つてくれたらいいと思はずにわゐられませぬ。

バラックの町

京橋區 鐵砲洲尋常小學校

第五學年男 古谷譽志雄

バラックとは？ 始めはバラックとは何かと思つてゐたが次第に新聞廣告などを見てかりの家と云ふことがわかつた。

東京の町、下町、はみなバラックだ。九月のある日お父さんと焼跡へ來て見たら一面焦土と化した東京の町は燒鐵燒石燒トタン等が土を一面おほつてゐた。

お父さんは「これで東京の町は東京村となつてしまふかも知れない」とおなげきになつた。僕もなげいた、そして家へかへつた。三月四月とたつて僕の家もいよく引越となつた。

僕はうれしかつた。うれしくてく足のふみごみばもわからないほど喜んだけれども行くさきが案ぜられる、まださびしくてしようがないのだらうと思つた。しかし案ずるよりは生むがやすいとやら來て見たら、どこでも家がたつてゐない所はないのでまた喜んだ。けれどもバラックだ所々の家だけがかべがついてゐるばかり。大ていはトタン屋根と板かべだ。

しかし五年の後にはバラックは取りこわし市區かいせいをして本けんちくになほすと言ふちよく令が出たといふ。政府は人民の便利をはかつてくれるだらうその時がまたれる。たいていのバラックは二階はない、我は二階のないのがすきだ。もし二階へあがつてゐる時大地震が來たらにげることも出來ない其のまゝそく死をしなければならぬ。下に居れば地震が來てもすぐにけられる。だからすきだ。だがつなみはやつぱり二階でなければならぬ、考へて見るとどつちもどつちだ。バラックの家に居ようとまづいものを食べやうと心が清く人々のさきに立つて一生をおほりなと思ふ。

停電の夜

京橋區 鐵砲洲尋常小學校

第五學年女 和田清子

たのしい晩食をいたゞいてゐる時ばつと電氣がきえた。それと同時に妹の和ちゃんがつとなき出した。するとお父さんが大きな聲で「早くろうそくをおつけ」と言はれた。私はおはいそぎでろうそくをつけた。ろうそくのかすかな光にみんなの顔が赤くてりいだされる。

その淡い光で晩食をすましておぜんをさけようとした所へ電氣がばつとついた。まあほんとにくらしい電氣だこと……とおもはずつぶやいた。しかしこんなことを言つてゐるけれどもあの震災當時はこのろうそくの光がなによりのたよりだつたを思ひ出すと、なんとなく今こうしてゐるのがもつたいたなくなつて來てしみぐあひの當時のおそろしかつたことが思ひだされる。

九月一日より五日まで

京橋區 泰明尋常小學校

第五學年男 竹中誠一

九月一日は始業日であつた。式がすんでうちへ歸つて晝御飯にかゝつて、はしもつひまもなくあのやうな大地震であつた。僕はあはて、外へでようとおもつても一足も前へ出なかつた。地震がやむがはいか家内一同はいそいで外へとびだした。すると外のさわぎは上を下へのありさまである。もう負傷者もありました。それから僕は人にかじりついて銀座通へ行つた五時頃になるとだんぐとあたゝかくなつてきたのでこれはあぶないといひはじめて、まわりの物を出して丸の内へ逃げはじめた。家がやけたのは九時頃ださうです一とばんあかして翌朝青山へむかつた。

それから青山の穩原小學校の分校へ三日間おせはになつた一日二日と三度々の御飯もはいらず御菓子をつたべていのちをつけてゐた。三日目になるとにぎりめしが出たのでこれでやれくと腹いっぱいになつてよろこんだ、夜になると、〇〇人があばれたなど、けいかいがいへんであつた。その日はおきたりねたりしてじゆう分にねられなかつた。それから翌朝の六時頃になぎりめしをもらつて又郡部の親類の家へむかつた。新大橋をわたつてから先へ行くと死人のひどいと黒山になつてゐた。親類の家についていろいろと御話をしてやうくむねをなでをろした。その日にかぎつてよくねられた。

復興を想ふて

京橋區 泰明尋常小學校

第五學年女 木村 正子

「あゝ恐しかつた一九月一日も夢の様にすぎて大帝都の大部分にはバラックが建ちました。私達は、帝都復興の春を迎へ、これから一そう儉約を守り又勉強をしませう。

そして私達は小さいながら復興事業につくしませう。もう美しい着物や總べてぜいたく品等の事を考へ無い事にしませう。

朋友は互に助け合ひ、両親を安心させ、私達の大切な勉強にはけみませう。こんなわづかな事でも私達の復興事業には大切な事だと思ひますから今に復興したらどんな美しい帝都が出来てせう。今からさうぞうが出来ます。地下鐵道がしかれ又電車が市中をかけめぐり町々にはあの大きな丸の内ビルディングや東京驛等よりもつとりつばな建築が出来てせう。道路は廣く、フンスイがあちらこちらに出来、大きな公園等出来るでせう。そうしたらどんなにうれしいでせう。私達はそれを一つの樂みとして儉約、勉強、朋友の務、親に孝行これ等の事を互に守りませう。

帝都復興

京橋區 築地尋常小學校

第五學年男 田中 福松

燒野原に

ダンダンとバラックが

出来てくる

中にはもう

人の居る家もある

京橋區

出来るそばから

ドンドン商賣が

始まつてゐる

皆人の頭には

帝都復興の文字がはいつてゐる。

目黒火薬庫跡の一夜

京橋區 築地尋常小學校

第五學年女 櫻川喜代子

やうく、火事をのがれてまづよいと思つたらまだ大きな地震が時々やつてくる、私はおむすびをいたゞいてゐると、はるか向ふの方から澤山人がかけてくる「あゝ、どうしたのかしら」と思つてゐると若い女が赤ちやんを負つてこちらへかけて來た、話をきけば「今〇〇人がすぐ隣村まで貳千人おしよせて來たから早くにけなければいけない」といつた。私はびつくりしてしまつた。しかたがないから皆のにけて行く方へいつた、火事では行く時よりもこはかつた、そして目黒火薬庫跡へにけていつた。いきなりにけたから提灯も懐中電燈ももたないから、一寸先

もわからなかつた。火薬庫跡へ入つた間もなく表の方で「萬歳々々」といふ聲をきいた「あゝ、〇〇人が萬歳をいつてるのではないか。」と思つて心配してゐたら入つて來た人が「あの聲は日本人の聲です。」とおしえてくれた。

向ふの方では鼻が「ほつ／＼／＼」となきながら二つの目をびかぴか光らしてゐるのはいかにもさびしい感じた。

そのうちにしんと静まつてしまつた。時々地震はやつて來て人人を驚かした、我は餘りの恐ろしさに思はずみぶるいをしてしまつた。

やうやう火事から

にけのびて

安全地帯へ

きてみれば

こゝも又々

大へんだ

〇〇人で

大へんだ

京橋區

火薬庫跡へ

にけたらば

梟がほつくと

鳴きながら

二つの目で

ぴかりくと

光らしてゐる

あゝ何といふ

おそろしい事が

おこつたのだらう。

震災餘談

京橋區 京華尋常小學校

第五學年男 石 黒 佑

突如として大震災が起きあらゆる交通機關はたゞれてしまつた其の爲日光に居らつしやる天皇

陛下の御安否さへわからなくなつてしまつたので、宮内省は大變にこまつて考へたあけく飛行機によつて御用邸との通信をせよと所澤航空隊にその命令を下した。

航空隊は更に小池飛行中尉に命令を下した。中尉は此の大命をおつて一人の兵士と勇しく所澤を出發した。

その日は合憎く大風で機が幾度てんぶくしさうになつたかしのれなかつた。これを切りぬけて首尾よく日光御用邸の眞上に行つた。けれ共着陸しようとする所が見あたらない仕方なく御用邸をぐるぐるまわつてゐた。

廻はつてゐる其の間にも幾度かてんぶくしさうになつたが中尉はそれをうまくあやつつて飛んで居た。すると下でもプロペラの音に驚いて誰か出て來たので信號旗で陛下の御様子はいかがつて見た。そうすると下からも信號があつた。

その信號は何で有つたらう。それは中尉がまちにまつてゐた信號で有つた。中尉は喜び勇んで所澤に歸つた一同も亦喜んだ。

震災餘談

京橋區 京華尋常小學校

第五學年女 佐久間ミツ

震災後私はしばらくゐるなかに居りました。私が海水でよく一所に浴ぎにゐつてお友達になつた、清ちやんは私の家の少し上の家で地震の時お父さんと兄弟三人をなくして、お母さんと二人で被服廠で助かつたのださうだ。今年やつと八つになつた清ちやん一人であるなかのおばあさんやおぢいさんの處にゐる此の間鵜原のお寺で地震で死んだ人の爲におきやうを上げた其の時ほうさんが清ちやんにおせんこうを上るようにといつた清ちやんはおぢいさんと、おどうの前にすわつておせんこうを持つていままでもがまんしてゐた人々は、誰一人泣かないものはなかつた。私もついもらい泣をしました。私は今こうして東京に歸つて勉強してゐます。海水で楽しく遊んだ事を考へると清ちやんの顔や海や貝や砂が順々に目の前にうかぶ今清ちやんはどうして居ることです。

御成婚の日

京橋區 月島尋常小學校

第五學年男 新海光三

今日は皇太子殿下御成婚の日である。學校に行くといやうにしづかなのでこれはおかしいと思

つて式場へ行くともう式が始まつてゐた。

廊下には多くの小國旗が縦横に張渡されてきれいであつた。其の中に歌を歌つてオルガンの合

づで禮をいつしよにして奉祝の式は終つた。周圍のかべには私達の書いた圖畫がちんれつしてあつた。圖畫を見ながら前の方へ歩いて來るとヤア一天の岩戸のかざりものがあつた。五尺位の男が今や満身に力を入れて岩戸を開かんとし

てゐる。少し開きかゝつたすきまよりは明るき光線がさつとかゞやいてゐた。

展覽會場を見にいつた。内を見ると電車、飛行機、等がかざつてあつた。こちらには震災當時

の事が思ひ出されるやうな品物があつた。びんのとけた物、がらすのとけかたまつた物、とけかたまつた數個の銅貨などがかざられてあ

新佃の信ちやん

京橋區 月島尋常小學校

第五學年女 酒井ふみえ

ほんとにかはいい信ちやん。

信ちゃんは今二つです。正月前にくらべるとまるく太つてゐて、かはいらしうございませ。此の頃ではだれがおしへたともなくお客様がお歸になる時にははいちやくといひます。信ちゃんは震災前には百日せきといふ病氣で瀬川病院に入院してゐました。病院へ入院してゐた時はやせて毎日せきになやまされてゐましたが今では見違へるぐらい太つて元氣になりました。それは大分震災になつてから田舎の空氣のよい所へ行つたからだと思ひます。信ちゃんは火事の時にはおばさんにだかれて相生橋のどての下にゐたのださうです。海から上つて來た時は青い顔をしてふるへてゐましたので、私は學校でぬつたじゆばんがあつたからさつそく着せてやりました。此の頃は皆がいろいろなことをしへてゐますが信ちゃんはすぐおほへます。ほんとにかはい信ちゃんよ。

僕の震災遭難記

京橋區 南横町尋常小學校

第五學年男 酒井謹三

イ 九月一日の午前

今日は朝から曇つてむし暑くて、心が落ち付かなくて、いやな陽氣だ。式をすまして家へかへると、臺所はするぶんせはしくお皿のがちく／＼云ふ音や、お魚がこけてじい／＼云ふ音が臺所にぎはせてゐた。僕はこれを見てごちさうをこしらへてゐるのだな、と早くも感つた。それと同時に、お腹がペコペコにすいた、臺所の柱によつ／＼つて、ごちさうの出来るのを、今か今かと待つてゐた。

店の者も今日は公休日なので、隣の若衆にお天氣となつたら海水浴へ行くなど、相談したり、着物を着かへたり家中が急がしかつた。

ロ 地震

もう十二時近いからそろ／＼おぜんでも出さうかといろ／＼のものを並べてゐると、あの大地震、一番こわがりのお父さんは、すぐに臺所へかけてきて、米びつへかじりついてゐる。始はたれもあんなに大きくならふとは、夢にも知るはずはないが、次第に大きくなつて來たので僕は青くなつた。

壁は落ちるがらすはかける、本箱は倒れる、茶だんすまでも倒れた、その時瓦が臺所へがらがらと落ちて土煙が立つた。

これらの音が一しよになつてまるで生て地獄へ行つたやうだ。
「火をけせ火元に氣を付けろ」

と言ふ聲が口々におこつた。僕は臺所の柱へかぢりつきながら、土ほこりによごれて行くごちさうを見た時は、實に残念だつた。そのものすごい中に、

「わつく」

と云ひながらかけ廻つてゐた正ちゃんの顔を見れば、ひたひから口にかけて、生々しい鮮血が流れてゐる。お父さんは手拭で血をふき取つてゐた。大ゆれが少しやんだので、二階へ上つて大てえぶるの下へはいつて、心の中でねんぶつをとなへてゐると、兄さんが来て、

「なんだ弱虫顔が黄色となつてゐら」

とどなつたので、僕は泣ッ面をした。そこへお父さんが来て、「おまへは、森岡さんや、木村さんに丸の内へ連れて行つておもらひ」僕は梯段を飛び下りる様になつて下りた。あんまりあわて、家の人の云ふ事も聞かずに、はだして大通から、鍛冶橋まで來ると、ごうと鳴つて又地震が來た。そこでしばらく休んで丸の内をさして、空をとぶやうにかけ出した。

ハ 丸の内へ避難

松の根本にこしかけてゐても、時々地震があつた。じやり道のはじにおいてあつた自動車が、地震のある度毎に前後へ動いてゐるのや、松の木が折れるかと思はれるほど、動いてゐるのを耳でも、どの位ひどい地震だかわかる。

近所の人は居ないかとさがしてゐるところへ隣の文治さんが來た。僕は、

僕「文治さん皆どこにゐるの」

文「ここから五本目の松の本にゐるよ」

僕「ありがたう」

僕は教へてくれた方向へ行くと、はたしてりうちやんの家とまあちやんの家と二けんるた。

僕「おばさん」

オバサン「謹三さん兄さんはどこにゐるの、よんでゐらつしやいよ」

僕「じゃ、よんで來ます」

僕が兄さんを連れてくると、おばさん等は、

伯母「おむすびたべませんか」

マアチャン「謹三さんおせんべいお食べよ」

僕「ありがたう」

僕はおせんべいや、むすびを食べながら、毛布の上へねころんでゐると、隣の赤んぼが、ていけきの屋根の、人形の焼けるのを見て、手をたいて喜んだ。原は暗くなるにつれて、人でうづまつて行く。

ニ 恐ろしい夜

丸の内はもう満員だ松の木にてん／＼と光るちやうちんは、螢のやうである。夜なのに火事の爲に人の顔がはつきりわかる、家の人は焼けない／＼と言ひ張つてゐたが、すこし不安になつたので、そろ／＼荷物を運び出した。

火事はますます／＼ひろがつて、四方八方どこを見ても眞赤である。そして時々どかん／＼と、火薬の破裂する音が聞える。

僕の心に不安が一つうかび出た。それはお父さんやお母さんが、餘りおそいからけがをしはしないか、それでなければきつとあすこいらにくるから、出て待つてゐようと、石垣に近い所まで出て待つたが、中々來ない。道は自動車や荷車で一ぱいである。そこへ龜さんが自轉車にふとんをつんで來たので、僕がもつてやらうと言つた。せ中へしよつて歸らうと思つたが、自分の居所が分らない『他人の荷物をふみこえ乗りこえ、やうやく自分の居所へ來たが、氣がゆるんだせいか動けなくなつて、荷物と一しよにへたばつてしまつた。

その内お父さんやお母さんも歸つて來たので、やうやく安心した。おはさんやお父さんの話は重に、荷物なんか何うでも、命さへあれば又働いて買へばい／＼と言ふ話である、時々、

「ふところもの御用心」

とふれあるくやつがあるので、僕等は一そ、きやうふにおそはれた。其中誰れか、

「〇〇人だ」

とどなつた。兄さんやお父さんは、ぼうを持つて、おつかけて行つたが歸つて來て、

「一人はつかまつたが一人はにがした」

と言つた。其の外に〇人さはぎはなかつた。東の空が白んで來た。

ホ 犬猫の様な人の心

恐ろしい一夜はあけた。どんなに東京が變つたらうとも、お日様には變はない。いつもの通りに／＼お顔を出した。

兄さんたちは、焼跡を見に行つた。僕もつれて行つて下さいと頼んだがお父さんは、

「あぶないからいけない」

と云つたので、やむを得ず待つ事にした。

ふと左を見れば荷物自動車に巡査が乗つてゐて、おむすびを配給してゐた。

自動車をかこんだ人は皆、けんくわづらでおむすびをもらつてゐる。僕は食べものでけんくわするつて犬猫みただ、あの人たちはきつと地震以後、あゝいふ人に成たのだらうと僕は思つた。そこへ兄さん等が古とたと、てつほうをひろつて來たのでそれで荷物をおほひ、水をもらつて

来てごはんをたき、おにぎりにしたが人数が多いので、一ツか半分しか廻らなかつた。

へ 決 心

僕等はなぜそんな苦心しても生きてゐるのか、それは東京が焼野原になつたのを、復興させる爲である。今ではそまつだけれど、バラックに住まふやうになつたのは、外國のおかげである。今まで毛布などを配給してくれるのは、皆外國から同情して送つてくれたものである。

だから僕等は其の同情に感じ、復興に努力して、各國に其の御恩返しをしたいと思ふ。

思 ひ 出

京橋區 南横町尋常小學校

第五學年女 末 吉 良 子

その時學校から歸つて、御飯には早かつたので、二階の十疊の間で雜誌を讀んでゐたのである。どうしたのか眠くてくたまらず、ちよつと横になつてから、三十分もたつた頃であらう。急にあたりが物さわがしいと思つて、ふと目をさますと、家は舟のやうにゆられてあのさわぎ。下へ下りやうと思つても、たゞ氣をあせるみで下りることは出來ず、ゆれかたは一そつひどく、つみかさねてあつた桐箱はみなくづれ落ち、階段はいまにもねぢ折れさうで、どうしても下

りられなかつた。

下でも上へ下へのさわぎで、お母さんは私が見えないので大方二階だらうと思つたのだらう。

「よし子く早く下へ下りて來ないと死んでしまふ、よし子」

とあらん限りの聲をはり上げたさうだ。

けれども私の方ではてんで耳に入らぬ。

たゞ無我無夢中で四つんばいになり、今にもねぢ折れさうな階段を、飛び下りるやうにかけ下り、あれで四五段も下りたであらう。お母さんは急に私を引ずり下ろし、はだしのまゝでしか帯はどこへとんでしまつたのか、細ひも一つしめず、外へ出ようとするたん、折からゆすぶられてあれくるつた大屋根の瓦が頭の三四寸前をかすつた。

「はつ」

と思ひながらも、一面のガラスのうちくだけた上を、はだしでかけはしり、よう／＼死物ぐるひで外へ出た。

まあよかつたと思ひの外、又もや物すごいうなりを立て、ゆれはじめ、瓦はくだけおち、はるかあなたは、もう／＼と立ち込める黒煙。

地震はのべつにがたく。

風は次第にはけしく四ヶ所も五ヶ所も、四方八方、火の海みたいになつてしまつた。

私たちは電車通りの砂山へに於て、そこへテントを張り、少しの間そこでがまんをしてゐた。すると四つ角の進藤さんの家のお母さんらしい人が、どこをどうしたのか、髪の毛は壁かほこりかまつ白、小父さんの様な人がおぶつてよたくやつて來た。

まあどうしたのだらうと思つて近所の人に聞いたら、家がつぶれてはりの下敷になつたのださうだ。

さうして小母さんはこしを打つ。

小父さんは顔を打つ、みんな傷を受けて血がだらく流れ出てゐた。其の時は思はずぎよつとした。

其の内に地震は靜になつたが、火事は益々猛烈になり、外にゐても何だかむされるやうに、氣が變になりさうであつた。

やけくすなどが、ふわくそこ、こゝにういたりちらばつたりして、そこらがすい分ちらかつてゐた。初は、私は、

「何だ、火事なんか水をかければすぐ消えてしまふ、いくら火が來るつたつて來られてたまるもんですか、」

と、思ひこんで、そこらをかけすり廻り、お隣の家へ行つたり、鍛冶橋へ行つたりしたが、はけしくなるにつれておそろしくなつて來た。お隣でも早にける用意をしてゐるのに、内では掃除をしたり、片付けたりしてゐる。

ほんとに其の時は氣がもめた。

だつてお父さんは平氣で、

「大丈夫だよ川はあるし日本橋までだつてこられるもんじやあない」

と、おつしやつて中々言ふ事を聞いて下さらなかつた。

七時頃であつたらう、息せききつて、

「大變ですく今火が日本橋をこえて、こつちへだんく近づいて來ます」

と、大聲を立てどなつた。

おとうさんは少しは驚いたのでせう、そろく荷物を出しはじめたのでした。お母さんは瓦がすべり落ちて來た時、すつかりどつきをぬかして、何を言ふにもぶるくふるへてゐらつしやつた。

しかし何時まで外にゐても仕方がないし、風は強くなるばかりで、火はごうくと物すごいなりをたて、突進して來たものだから、仕方なしに、びくくしながら家に入つて、お父さん

と、二階や下の色々の物をとりまとめ、そろ／＼車へつんだので、やつと安心した。

「ねえ、お父さん」

お隣のお酒やさんでも丸の内へにけたから、家でも早く丸の内へ行きませうよ」

と言つた。

するとお父さんは顔をしかめた。

「うるさいねー」

「まだやけてたまるもんか、ともかくおまへは早く自分のものでもまとめたらどうだね」

とお小言をちやうだいたしました。

おそろ／＼はしごだんを上つて行くと、火の光がガラスに反射して、二階は晝のやうに明るかつた。それを幸にひ學校の教科書をはじめ、大切にしているものを、みんなかばんの中へつめられるだけつめた。けれど、悲しい事には、ことの外愛してゐた西洋人形を、おきざりにして、やいてしまつたのが口惜しい。又しても恐しい階段を、下りると、まあどうしたことが、茶籠笥はひつくりかへり、かべと云ふかべはみなおちてしまつた座敷はすいぶん亂ざつしてゐた。

全く其の有様は、もう何と云つていゝかわからない。

今でも其の様子が有り／＼と目前に浮んでくる。

鍛冶橋は人で／＼、今にも橋からあふれ出るかと思はれるやうな人ごみであつた。一體お父さんはどこへ荷物を出すのかしら。

と思ふと不安で／＼たまらなかつた。

其の時お父さんは、

「おい、よし子、お前は鍛冶橋の右側に大きないてふの木があるだらう。あそこへ行つて荷物のばんをしてゐておくれ」

と、お言ひつけになつた。

心の中におやまあと、少し不平心がわいて來たが、

「いや／＼、少しはお父さんのお手傳でもしませう」

と、思つた。

急いでがけてゆくと、すぐ荷物は車から下されて、いてふの木の下へおかれた。又車は家へもどる、またくる、もどる、三四回運ぶと火は早中通位來てゐるらしかつた。

火が近づいてくるに従つて、空氣が暖められて、息ぐるしいほど熱い。私の心はだん／＼あせつて來た。しまでひにはたまりかねて、お父さんに、

「お父さん。もうだめよ、こんな所にあるては、今こゝにゐる人はみんなあぶないと言つて丸の内

へ行つてしまつたのよ。あゝ、あたしはこはい。早くにがして下さい」

とたのんだがお父さんは、

「大丈夫こゝは風上だから」

と、言つて聞かない。

恐しい焔は今電氣局をなめやうとしてゐる。

あのうづまく火。

あゝうつゝしてしまつた。

あゝどうしたらいいだらう。

あゝ、とふかいためいきをついた。

けれど、何とも仕方がなかつた。

やけつゝある柱は、川に、まつさかさまについらくし、まだ川の中でもえてゐた。

ごうくくくと物すごいなり。

あの電氣局がつぶされてしまへば、隣へうつらないんだけど、若し隣の水道部へうつつたら私たちの命は、絶対絶命である。あゝ、なんとなさけなかつたのだらう。

でも、あの時は、一心不乱に神に祈り、天を仰いで手を合せたことが思ひ出される。

神の助か、あの疑問の電氣局は焼けおちてくれた。

けれど、ほつとして安心したのは、ほんの少し間であつた。猛火は又一方からせめよせて、近くまでせまつて来た。

あゝ又かと思つてびく／＼しながら、あれくるう焔を見つめて居たが、どうしてもこはくてあつくて居られなかつたが、ぢつとがまんをしてゐた。すると其の時お父さんは、

「もうすぐそこへ火は近づいてゐる。お父さんたちは荷物の番をしてゐるから、お前はお母さんと一しよに、一足さきへ丸の内へ行つておいで」と、せきたてゝ言ひますのでお母さんの所へ行つて其のことを話した。

「お母さんは後から、お前は給仕さんと先へ、行つておいで」

あゝ困つたと思つたが、仕方なしにつれて行つてもらつた。

鍛冶橋を渡る時の困難、大方遠方から避難して来たのでせう。一人のおばあさんがさもつかれたらしく、べつたりと地面にすわつたまゝ、動きもしない。其の哀れさ、途中色々困難に合つた。やつと丸の内へついたところが、其の又人ごみつたら、足の立たせる所もない。中にも何も知らないで、無邪氣な小さな子が、すやく／＼ね入つてゐるのを見ると、知らず／＼涙が落ちてくる。人の足をふんだり、車の下を通つたり、荷物をふんで行つたりしたが、誰もおこるものとてもな

かつた。

向ふに芝生が見た時は、飛び立つばかりに喜んだが、中々そこへは近寄りなかつた。どうしてかと言ふと、こちらには自轉車などが、何臺も置いてあつて通れないし、あつちへ行けば自動車だの車たのが一ぱいはびこつてゐて、とても通れないので、知らず／＼後へ退いてしまふのでだん／＼遠ざかつてしまふのであつた。

やつと芝生のところへついた。

今思ふとあの時、夜具か、敷布の一枚でも持つて行けばよかつたと思ふ。

心もおちついた。

どうきもしずまつた。

冷い草の上に横になつた時は、つかれが一時にわいてきたけれ共、中々眠られなかつた。

火に照されたまつかな空を始めて見た。

時々ズドン／＼と爆弾みたいなさまじい音が聞えて來た。初は何の音なのかしらと思つてゐたが、後で聞いたら兵隊が火を廣げない爲、火に近い家を爆弾でぶちこはしたのだと言ふ、或る人は不逞〇人が日本人をにくんで、やけない家などを焼いたりこわしたりしたのだと言ふ話がある。其の時一番耳に残つてゐるのは、誰かを尋ね歩く人の聲である。あの悲しい聲は今でも耳に残

つてゐる仕方がない。

いつかうつら／＼してたのだらう。

「あゝ、今京橋附近が焼けてゐる」

とさげんだのを夢うつゝに聞いた。

「今きつと、お父さんやお母さんは、さぞ困つてゐらつしやるだらう」

と、思つて立ち上つた。

成程、鍛冶橋方面が焼けてゐると見えて、そのあたりの空は一層眞赤であつた。

私はその時ねてゐてしく／＼泣いた。

そして其の涙は、ほたく／＼芝生の上へおちた。あの忘れられない夜は、一晚中泣き明したと言つてよいだらう。

手や着物は夜つゆにぬれてきたなくなつてゐた。

給仕さんは自轉車で食べものを買ひに行つたので、私は一人で鍛冶橋の方へ行つた。丸の内から日比谷公園へ出る橋のらんかんの所が、かんらくして、地が一尺餘下つてゐたのも見た。ビルディングだのそれ等の建物は、こんどと云ふこんどは、みんなめちやく／＼であつた。鍛冶橋へついた時は、何となくうれしかつた。たゞお母さんがぐつたりして木によりかゝつて、すやく／＼ね

てゐらつしやつた。

「お母さん、お母さん。」

と思ひ切つてさげんだ。

お母さんは細く目をあけた。

「おや、いつかへつたの、お母さんはつかれて、昨夜ちつともねむらなかつたもんだからねむくてしょうがないからちよつとねたのだよ、お前おなかはすかない」

「いゝえ別におなかはすきません。お母さんはねむいのならゆつくり休むといゝわ」

と、言ふと、お母さんは、安心したやうに、

「さうかい」

と、小さな聲でおつしやつた。

やがて又目をとちて眠りにおち入つた。お父さんはと見ると荷物の所で、何かしきりにしてらつしやつた。

「お父さん。」

「昨夜はするぶんあつかつたでせう」

と、言つた。

お父さんにはつこり笑つて、

「なに風上だから、あつくはなかつたが大變だつたよ」

とおつしやつた。ふと、其の時下を見て、

「あら」

としらずくさげんだ。

其處には、髪はみだれ、手足は眞蒼になつた、十四五の女の子が、かわいさうに、血だらけのふとんの上につけて、あふむけになつてゐるのである。

お父さんに、

「お父さん」

「此の人どうしたの」

と、聞いた。

お父さんは答へて、

「あゝ、それかい」

「其の人は、今朝、戸板にのつけてこゝへもつて來たのだよ」

「大方地震でつぶれたのだらう」

「かわいさうに」

と、一人言のやうに云つた。

其の夜お父さんは、あのかわいさうな女の子に、おきやうをあけたり色々親切にしてやつた。まちどろしい夜はすぎ去つて、三日の朝めずらしく上天氣であつたが、火のほてりがまだ残つてゐて、本當に眞夏のやうであつた。

或日ふとお友だちの事を考へ出して、原さんの家の焼跡や、江間さんの焼跡などへ行つて見たが、只、焼けたおかまなどがごろ／＼してゐるばかりで、何の音さたもない。

又學校へ行つてみようと思つた。

すぐ其の足で學校へ行かうとしたが、焼けてしまつてどこか見當がつかなくなつてしまつたが、まあ何でもいゝから、行つて見ようと思つたと、丁度戸田先生にばつたり出會つた。はじめはどこの人かと思つた、よく／＼見ると先生なのでびつくりしてしまつた。でもどんなにうれしかつた事か、それから二三日経つて、再び學校へ行つて見ると、まあうれしい先生方が、皆ゐらつしやつた、焼けたタンでひんじやくな箱のやうな小屋を作つて、色々ひなんしたこと火事の事などを、お話して其の話は中々つきなかつた。

不幸な人をおもふて

京橋區 明石尋常小學校

第五學年男 原 田 泰 二

不幸な人は片わ者である。思へばぞつとする九月一日の大地震に片わものはどうしたらうか、家がつぶれて其の下敷になつて無さんなあつしをとけたらうか、やう／＼の事で戶外へ出た片わものも、悪まの様にたけりくるふほのほの爲に焼死をとけたらうか、船に乗りおくれ川へ飛び込んで溺死をした片わものもあるだらう。まだ／＼不幸な人がたくさんある。本所區の被服廠では幾萬といふ人々が焼け死んだ。川で死んだ人陸で死んだ人を合せると東京だけでも十幾萬人もある。

自分の幸福を喜ぶにつけても其の不幸の人の身の上が思はれる。

私の家の犬

京橋區 明石尋常小學校

第五學年女 川 島 秀 子

私の家には熊といふ犬がある、私が五つの時から家の夜ばんをしてるしてくれる、熊が家へ来るやうになつたわけはかうである、父の弟子の七といふものが出仕事に行つた、其の人も前から犬がすきだつたさうだ。所がそこには可愛らしい犬がゐて、いくらおつてもついてきて、なか／＼にけない、仕方がないから家へつれて来てくれたと云ふ事だ。初めは餘り黒いので黒とよんでゐたが、其の後は熊ににゐるから、熊とつけて今でも熊公／＼と呼んでゐる。

又この頃はなほよく家を守つてくれる。夜は工場の中の一番私の家に近い所にねかせてあるが、人の足音が少しでもすると、其の終るまでぼえてゐる。

あの思ひ出せば身ぶるひの出るやうな、九月一日の地震の時は家にはゐなかつた。小僧がさがして来てそばへなはでゆはへておいた、それはあの明石町の大通りのあの松前さんの前だつた。

夕方になつていよく／＼あのおそろしい火でにけやうとする三方を取りかこめられたとき、大きな荷車へよいものだけをたくさんつんであの明石町の川岸へ引つばつて行つた。其の時熊公は小僧につれられて行つた。せいろか病院の建築場のすこしさきの通りへ、荷車をおき熊公と下駄や靴のつんだ信ちやんの自動車を荷車の下へゆはへておいた。

それから少したつて、荷車などはかまはずに、火のない所を通りながら丸の内へにけたのだつた。

三日のおひる前工場の人々が焼け後へ来たから見なれない人が熊公をつれて来てくれた。あとで其の方の所を聞いたら、すきや橋の方の人だといつた。熊はその後私共と同様に、あのますい玄米を少し丸の内だべた。

熊は今日も私を學校まで送つて来てくれた。

やあもう春だ

京橋區 越前堀尋常小學校

第五學年男 小坂 烈 二

やあもう春だ……「がた／＼どしん」と不意討にやつて来る地震などはこわくない。

新しい東京は春の氣に満ち／＼してゐる。

僕等の學校もやつと出来て昨日から勉強を始めた。

そして勉強らしい勉強もやつて行かれるやうになつた。

もう一ヶ月許りで此の學校の最上級になる。僕等に力がどん／＼とついて来るが運動場がなく十分運動の出来ないのはいかんである。しかし三月までには追々收容バラックも立退いて僕等の爲に廣い運動場が與へられる。

いつもならそろ／＼花見のさわぎで大變なのに今年はそんなさわぎは更がない。人々は只復興に力を注いでゐる。東京の市街もどん／＼整頓して行く。草木もどん／＼芽を出して来る。

恐ろしい思出

京橋區 越前堀尋常小學校

第五學年女 石塚 菊江

私はあの一日の十一時頃製本廻りに行きました。そして歸りに煙草屋の前まで来ると、とつぜんゆら／＼とゆれたかと思ふと「ガタ／＼ミシ／＼」と大地震になりました。私はびつくりしてそばの煙草屋へ飛びこんでしまひました。するとたなの上からたわしや、ほうきや、はたきや、そのほ／＼色々のものが頭の上におちてきますので、又表へ飛出してしまひました。もう其の時は家々の人が飛出して大さわぎでした。さうしてゐる中に地震がやんだので私は大いそぎで家の方へかけてゆきました。

裏へ入つてゆきますと、かはらがおちて山になつてゐます。その上を歩いてもう一足で家に入るといふ時にゆりかへしがきました。屋根のかはらは「バタ／＼」とおちてきます。

其の中を家へかけこみました。お母さんは赤ちゃんやふみちゃんをだいて「マンザイ／＼」と言つてゐます。私はかなしくなつて涙をこぼしました。

そして地震もやんだのでお母さんとお父さんと、ふみちゃんや、赤ちゃんや、私と表へ行きますときみえちゃん、くにちゃん、けたをかたつほづ／＼さけて泣いてゐます。お母さんは色々／＼なだめました。そして親十七人でひなんをすることにしました。

橋向ふを見れば、永代橋近所が焼けてゐます。まだちよい／＼地震があるので、お父さんは「それでは大事なものをもつてきておこう」と言つて大事なものをもつて来ました。

火はだん／＼とこちらへ／＼ともえてきます。そしていよく近くなつたので私は赤ちゃんをおぶひお母さんはふみちゃんをおぶひました。お父さんは大事な物をもつてきみえちゃんやくにちやんの手をひいて知つてゐる人と、しばへにけやうと言つて海軍病院のそばまで来るともう其の時は病院に火がついてゐるてしばの方へはゆかれません。しかたがないので明石町で船に乗りました。そして、だん／＼おきの方へでるとせんどうさんは「さほがみぢかくてもうおきへはでられないと言つて、兩がはがせきゆう倉のそのあいだの川でとまつてしまひました。火はだん／＼とせまつて、とう／＼せきゆう倉庫につきました。みんなはきちがひのやうになつて川へ飛びこんだり、とほる舟にすくひを呼んだり、又はいかだへのつたり大へんでした。その中に向ふから

一さうの流れ舟が流れて来ました。お父さんとお母さんは、赤ちやんとふみちやんと、くにちやんと五人でその流れ舟へころがり入りました。そしてお父さんは「きくえきみえ」と云つて手を出したがもう其の時はまにあはず、其の舟は向ふの方へ流れてしまひました。「お母さんく」と私共は二人はなんども呼びましたが、もうどうすることも出来ません。ともにわつと泣いてしまひました。そしてしばらくすると大きなおや舟がきて私共の乗つた舟は動き出しました。夜明けにやつと大きな軍艦にたすけられました。そして、地下室に入るとふみちやんによく似た子がゐるのでそばへ行つて見ると、心配してゐたお母さんとお父さんもいらつしやるではありませんかうれしいやらかなしいやら思はずお母さんにかぢりついてしまひましたお父さんは「これもみな神様のおたすけだ」と言つてうれしなさに親子七人が泣きました。

地 震

京橋區 月島第二尋常小學校

第五學年男 早 川 要

今の今まで靜まつてゐた東京が急に騒がしくなつた。それもそのはず大地震が來た。

僕は丁度友達と勉強最中であつた。がうくと思ふ間もなく地がゆれだし、家はつぶれる地はわれる、私共一家は命からくはひ出した。大通りは青くなつた人どもでさわがしかつた。時々ゆれかへしが來た。その度毎に人々は皆地面にすがりついた。かうしてゐる間に夜になつた、渡邊倉庫に火が付いた。人々は折り重つて三號地へにけだした。見る間に月島は一面の火となつた。子を呼ぶ親の聲が夜通しであつた。それはおそろしい中に悲しく、身にしみる様に三號地の逃げ迷ふ人々の間に聞えた。之は他の親共の聲であつたが、其の時の私の心にどんなに親といふものが有り難く思はれたか、今までわんぱくした心はすっかりなくなつて、今は親孝行するやうになりました。

選 難 先

京橋區 月島第二尋常小學校

第五學年女 村田フジ子

私達が田舎の親戚に着いた時は夕暮でした。

近所の人々はめづらしさうに、私達のそばへよつて來て、此の人たちは焼けだされなんだと皆口々につぶやきながら、私達の顔を見て居りました。まるきり知らない人たちばかりなのでなんだか、急にさびしい感じがいたしました。

そのよく日私たちのまくら元に朝日がさしてゐました。私は起きて朝飯をすまして窓によりかゝりながら、淋しい田舎町を見みつめてゐました。一日の大地震の事がそれからそれへと思ひ出されます。私が時計のかけてある柱へつかまつて、夢中であつたが気がついた時には家はつぶれて自分のつかまつてゐた柱だけたほれずになりました。本當に私は九死に一生を得ました。而し久しく住んでゐた家はやけ、着物も皆灰になつた事など思ひだして、なんだか急に故郷がなつかしくなりましたので、姉様と二人で思ひ出の歌を唱ひながらなつかしい故郷の空をうらめしく眺めました。

恐しかつた紅焰の一夜

京橋區 京橋尋常小學校

第五學年男 大和 德行

四方の空は只だ一面に紅にそまつて居る。灰色の道路をいそがしさうに廻る巡查、せつせと荷を運ぶ人々誰も彼も死にもぐるひになつてゐる。日はとつぷりと暮れたが眞赤な明るい火焔はぐるりを取りまいて火の世界にゐる様な気がする。すぐに學校の前には避難々々と群集がつかまつてゐた。僕等は荷物を背負つて丸の内へと向つた夢中になつて通過する混雑の中をよけて今、橋を渡らうとした時向岸から橋へ火が移らうとしてゐる有様は龍が荒れ狂つてゐる様である。其處

を出て鍛冶橋へ達した。最早先へも後へも引け仕方なくガードの下を一夜の宿と定めてやつと荷物を下した。ヒユウ／＼と吹く風にはこりはまぎれ、ひし／＼と火に追はれ來る人、迷つた者を大聲を上げてどなり尋ねる人八方はごう／＼となる猛火ボン／＼と音響に倒れる建物、紅の空はますます濃くひろがる。あゝ其の烈風猛火の凄慘は眞に言語に絶してゐる。夜は次第／＼に明けて來る音響のやむのはいつであらう。一日はあけ二日となつた。一日の朝まで夢にも思はなかつた此變事、人々は皆眞青になつて、がっかりとしてゐる。あゝ此の末は如何になり行くであらうか。

なつかしい京橋學校

京橋區 京橋尋常小學校

第五學年女 安井 鈴

私は今一月二十六日の事が思ひだされた。あの恐しい九月一日にひきかへてこの日はなんと嬉しい日であらう。私は震災後一時目黒に行つてゐたが、明日はいよく京橋へ歸る事になつたのでその夜はおち／＼寝られなかつた。京橋のお友達に會つた夢を見たりした。

二十七日は一日中お家の中がごたく／＼してゐた。明日はお友達にあへる、あゝ早く行きたいといふ事はかり考へてちつとも早く荷物がかたづかなかつた。

廿八日に私は初めて京橋學校へ來た。校舎はバラックだけれど、本當に懐かしみがあつた。私達上原さん渡邊さんなど、色々以前の事を語り合つた。なつかしい學校なつかしい先生なつかしいお友達かうして私は今は望んでゐた何も彼も見たりしたりする事が出來た。

私は本當に幸福だと思つた。

大東京市の爲に

京橋區 文海尋常小學校

第五學年男 宮澤賢次(十二歳)

我國の都で又世界の大都市として知られてゐる我が大東京市は大正十二年九月一日のあの恐ろしいすごい大震災火災の爲にあなむざんや廣々とした焼野原とかはつてしまつた。

當時はあんまりひどいので誰も彼もたゞあつけにとられてほんやりとしてしまひましたが、一日たち二日たち三日と日が立つにつれてバラックの都會が生れ今日ではほとんどバラックの大都會となりました。

併し私達は此のバラックの都會に満足せず、一日も早く震災前に勝る大東京市が出來上るのを樂みにしてゐます。

も出來るだけの力をつくして大東京を復興させて新しい立派な大東京を早く迎へ様ではないか。

其れには色々の困難に忍びめい／＼自分の務めに全力をつくして働き、そして儉約を守り一心に自分の本分をつくせばそれが大東京を復興させる第一だと思ひます。そしてそれが東京市の人々の義務だと思ひます東京市の人々が皆此の心を持つて大東京市の爲に働けば今のバラックは數年の内に生れかはつたやうに大東京市が出來上りませう。

可愛あい子さん

京橋區 文海尋常小學校

第五學年女 田中靜枝

私の元居た越前堀の家の隣にそれは／＼可愛い、あい子さんといふ五つになる女の子が居ました。

お姉さんがらつしやらないので私によく親んで下さいました。又私も妹がないので可愛がつてあげました。

あの可愛い愛子さんの顔はよくお伽噺に出てゐる天使の様な方です。お星様のやうなお目々ルビーの様な口びる、笑ふと口もとにえくぼがよる、お手々はかあい、紅葉の様でそれは／＼かあ

い、嬢ちゃんです。

その上愛子ちゃんはとくべつ唱歌がお上手です。かあい、口からは鶯の様なやさしい聲で「お手々つないで野道を行けば」等と歌ふと誰でもうつつとりときとれてしまひます。

あゝ可愛らしい愛子さん此のやさしいかあいらしい愛子さんも此私達と同じ様に焼だされて御難儀をしたことでせう、あゝ天の神様は何んと無情でせう私は可哀さうでなりません。

私は愛子さんに會ひたいので、愛子さんの家の焼跡へたづねましたがどうした事かわかりません。

今はあの可愛らしい愛子さんは何處にゐらつしやるでせう。

父母の顔を見るまで

京橋區 佃島尋常小學校

第五學年男 星野仁司

九月一日僕は學校から歸つて、三越へ本を買ひに行つた。飾り立てられた書物棚の前に立つてあれにしゃうかこれにしゃうかと、しばらくあさつてゐたがやうやくきまつて買はうとすると「ガタ／＼／＼ガラン／＼」と本棚が倒れる、扇風機がおつこちる、電球がこはれる。そのすさまじい様

は例へやうがない。早速本を買つて外へ出やうとすると、二回目地震が來た。人々はなだれをうつて外へとあせる。その渦の中にまきこまれて、あわただしい思ひをいだきながら外へ出る。往來は人の山だ、電車が止まつてゐるので、日本橋停留場まで歩く、又地震が來た。白木屋の時計塔がユラ／＼動いてゐる。家で僕の事を心配してゐるだらうと思つて電話をかけ様としたが通じない。急ぐにしかすと歩をはやめる、茅場町まで來るとそこには血だらけになつた子供が倒れてゐた。更に進むとつぶれた家倒れた家益々悲惨な光景となつてくる。

もう家の事が心配でたまらない。お父さんは、お母さんは、この分では家はつぶれたに違ひないと思ひ出すといらだつて歩いてゐられなくなつて、駈けだした。永代橋まで來ると、これは又どうした事か、火事で通れない。仕方なく佃の渡しへと目ざして歩きをはやめたが道がわからぬ。氣は益々させる。道をき／＼渡場までかけつける。舟にのつて見渡した時はもう八方から黒煙が上つてゐた。幸ひ月島には火事がない。舟が岸につくと飛ぶ様に家へといそいだ、案内は被害がかるい。この分では大丈夫かななどと空想を書き乍ら、角をまがる「あゝよかつた」家はちやんとしてゐるではないか。かけつけた僕を見て「おゝかへつて來たか迎へに行かうとしてゐた處だ」といふ母の目は涙でうるんでゐた。僕もうれし涙がこぼれた「お父さん」はときけばお父さんは外へでゐたが無事との事で安心した。

机にめたれて

京橋區 佃島尋常小學校

第五學年女 興水正子

「あらもう日比谷かしら」と思つて居ると「グラ／＼ガツタンミシ／＼」とたゞならぬ音響を立て、電車がとまる。何事ぞと窓から外をうかゞうと人々があわたとしく屋外に飛び出す様にはじめて、地震と氣がつく。さあ大へんだと車上の人へうろたへて下車しはじめ。私も下車していそいで家路につく。その内に警視廳の裏手から火が出た。明石橋まで來るとつなみだ／＼といふ叫びが聞える今度は船へ逃げこむ。家の方はどうしただらう。あゝこまつた事になつてしまつたと氣をもんでゐる内にやうやく津波のおそれははれた。

いらだつ胸をおさへて家へかけつけると父母も妹たちも皆無事であつたのでほつとした。あの時のうれしさ今だに深く胸にきざみつけられてゐる。けれ共まだ地震のおそれで有つたので電車道へ出てゐた。不安な恐れをいだく夜が來た。その内に火勢は益々強くなりとう／＼月島の西海岸に移つた「さあ大變だ」と思つてゐるうちに、あのろはしい火は月島をなめつくして私の方までおそつて來た。逃げるに場所なく、焼跡々々にけ廻つて最後に初見橋にたどりついて、そこで、不安な一夜をあかした事であつた。

机にもたれてあの當時の事を回想してゐると怖ろしいのろはしい光景が走馬燈のやうに眼前にちらつてくる、あゝこんな思に耽るべきときではない。私にはなすべき仕事があるのだ。

ふと机に目をやると、國語讀本が人まちがほにひらかれてあつた。さうだこの本の中にも復興の芽ばえはあるのだ。これを研究すること、それはやがて復興の力となつてあらはれることであらう。

少年の夕刊賣

芝區 靱繪尋常小學校

第五學年男 村野正太郎

チリン／＼／＼と寒い夕方の靜さを破つて聞えたのは、夕刊賣の鈴の音であつた。大通りには電車自動車自轉車が走つてゐる、電車が止つた。窓の中から、「おい夕刊を一枚、」と呼んだのは四十三四歳の紳士であつた。はい、と答へて籠の中から出して新聞を紳士にあたへた。やがて電車は動き出した。「夕刊／＼／＼」寒さうに聲を張り上げて客を呼んで居る。此の寒空にマントも着ないで居るのを見て可愛想に思はずに居られやうか。あの子には家が有るのか病氣の父母が寢て

るのか。夕刊を賣つてくらしを立てゝゐるのか。夕刊、夕刊、悲しさうな聲はやがてきこへなくなつた。

復興の春

芝區 靱繪尋常小學校

第五學年女 金子 孝

かちんく、と羽をつく音も聞え焼跡でたこを上げる子供もちらほら見えたので正月が近づいたといふ気分が自然に出て來ました。六十に近いお父さまが毎日ゲートルまきで活動をはじめられたのを見て私たちの元氣も數倍になりました。

元旦に珍らしくもお父様が、お書初の詩をかけられました。が其の中に却後却看意氣新。といふ句がありましたので其の意味を伺ひますと。

「大火事かへつて若返つたのだ。外で働いてゐる人もみなお父さまの通り若返つて數倍の元氣で帝都復興につとめてゐるのだ。男も女も若い人も老も、みんな元氣を出して働けばもとよりも立派な東京が出来るのだ。」

と説明なさいました。

年始廻りのお客様はお一人も見えませんが。仕事に目をまわしてゐる人々が其處にも此處にも群つてゐる光景は、誰にも心強い頼もしい感じを起させたであります。

節分の夜

芝區 御田尋常小學校

第五學年男 山本 正三

机にむかつて一生懸命に勉強してゐるとばつと上が明るくなつた、見ると電氣である。同時にあたりが、さわがしくなつて臺所の方から豆をいれる様な香いがして來た。「さうさう、今日は節分だな」と思つて臺所に行つて見るとお母さんが僕に「豆をまいて下さい」とおつしやつた僕ははかまをはいて豆をまき、女中の順やおほんに豆をのせて先づ御座しきに行つた。

そこではお父さんがさあまけくとおつしやつた僕は大聲をはり上げて、「福は内鬼は外、」とどなつて一にぎりまいた。するとお父さんや妹等は頭に豆があたるので首をすくめた。同じやうにもう一度どなるとお父さんが「なんだ」おにのめ玉ぶつとぶせと云はないのか。とおつしやつた。其の次の室にはよその女中が泊つてゐて、「御元氣ですね、私が食べるから一升五合まいて下さい」といつて笑つた。そこで一まきまくと、女中の頭の髪の間澤山は入つてしまつた。

一番後で臺所にまいたが頭からゆけをだした鍋や釜が多かつた。御飯の時おかまをあけて見ると一つぶ豆が入つてゐたので大笑ひをした。そばにゐた赤ちゃんは、目を丸くして驚いた様であつた。

僕の内の豆まきが終ると今度は村井さんの家から、

福は内、鬼は外。

と、甲高い聲で聞えた。

大分方々でも、さういふ聲が聞えだした。

物置にまきにいつた時には大きな杉が、ほうきの様に突立つてびかり／＼光つてゐる空高い星をはかうとしてゐる。

その横には一つの星がキラ／＼光つて豆を食べたさうな顔をしてゐた。

雪の朝

芝區 御田尋常小學校

第五學年女 速水美代子

「美代ちゃん雪だよ」と姉さんに起されて目がさめた。床の中からのび上つて見ると庭は一面真っ白だ。お、初雪だ。マグノリアの木の葉から白い雪がバタ／＼と落ちる。太陽に照らされて庭の雪や松の木の雪は皆銀色に光つてゐる。二階へ上りてみると電線が銀線を引いたやう、すゞめが一生けんめいに餌をあさつてゐる。そら豆の莖も葉も雪にうづまつて見えない。かわいさうにどんなに寒いであらう。折角わらをしてやつても、こゝなつては駄目だと思つた。手水をつかふと、ものさしをもつて庭に出た。二寸。足駄のはに雪がはさまつて中々とれない。てすりの雪をつかむとひやつとしてつめたい。妹はおどんぶりの中へ雪を入れてうれしさうな顔をしてゐる。日の上るにつれて木の上に積つてゐた雪はとけて緑の葉がだん／＼見えて來た。

復興 三題

芝區 櫻川尋常小學校

第五學年男 小松崎 嚴

(一) 災後の學校

九月の震災の爲、僕達の級は聖坂小學校をかりて十月十五日から授業を始めました。震災前より人数が少くなつたので、一組と二組と一しよになつて一組の先生と二組の先生と毎日かはりばんこに教へに來て下さいました。又僕達と遊ばなかつた一組の者とも知り合ひ、遊ぶ様になりま

した。それからどん／＼あがる人が来るのでだん／＼人数もふえて、とう／＼餘つてゐた机もた
りなくなつてしまふほどでした。それでもどうにか間に合せて、一月七日に學校の焼跡にあつた
バラックの人も半分位へつたので其のバラックに机やいすを持つて来て授業を始めました。その
中に二年の先生がさがつたので二組の篠崎先生は二年に行きました。僕はバラックを廻つてよ
く考へて見ると、此處が體操場だとか僕達の教室だとか、ちゃんと判りました。そして僕達の教
室は三棟で體操場が一棟です。始業時間は午前九時終業時は三時半です。

(二) 我が町

僕の家があつた町は芝神明町である。方々にバラックが立つて来た、僕の家跡は材木屋が
来て、バラックを立てゝゐる。

神明町は割合に広い。僕の家の方は裏町で地震前からぎやかでないから半分位しかバラック
が立つて居ないけれど、電車通りや日蔭町はすき間なしに立つて居る。

神明町もおひ／＼復興して来た。裏町でも毎日々々バラックが増して来た。此の分なら直に東
京も復興するだらう思はれる。一日も早く東京が復興する様にと僕は思つて居ます。

日蔭町は焼跡とは思はれない程バラックが立つた。僕の家のある露月町もどん／＼バラッ
クが立つて来ました。電車も走る様になつた、お店は電車通りにある。裏は日蔭町である。僕が

初めて行つた時びつくりしたのは、商賣を變へた家がたくさんあつた事です。人力車の家がたい
焼の様な物を作つてゐる又酒屋が西京焼等を作つて賣つて居た。

(三) 復興

東京はおひ／＼復興して来ました。銀座は元よりサツパリしたバラックが立つて居る。電車自
動車も絶間なく通りますし、人も大勢居ますし何だか焼けない様な氣がします。

銀座ばかりではありません。方々はすき間なくバラックが建つた、そして復興焼といふ物を賣
つて居る店、復興相談所等目につきます。僕は昨日淺草に行つたがもうバラックの建つてゐない
處は無い位です。

淺草の活動寫眞館も並んで建つて居る。どの活動寫眞館も皆ハイカラなバラックです。そして
大變こんで居ます。僕は帝國館へ入つたが満員で苦しいのでわい／＼さわいでゐました。
それ程方々は昔に劣らぬ繁昌振です。

東京から

芝區 櫻川尋常小學校

第五學年女 竹内トメ(十三歳)

(一)

節子さん、其の後はつひ御無さた致しまして申しわけ有りません。皆様おかはりは有りませんか。私の家では焼けてから、芝離宮のバラックにうつり、外の方まで水をくみに行つたり、お湯はずつと遠い方まで行かなければなりませんでした。家はせまいのにな、みもしかずに居ました御はんをたくのも、元はガスでした。朝おきると海邊の方へかれ木などをさがしに行なければなりませんでした。

お勝手も焼けトタンでかこんでありました。夜ねる時でも、木のすき間からすうつと吹きこんでくる風が冷めたくてねむれない様な事も有りました。それでもその中に、課外學校と言ふのも出来て夜勉強に行つて居りました。

(二)

櫻川小學校もはじまりましたが、三田の聖坂小學校をかりて居たのでお母さんに定期を買つていたとききました。電車で通ふやうになつたのですつと樂でした。

其の學校には、黒板もあるし、机も椅子もきれいなのでした。其の後、櫻川バラックが出来ましたので其處へ通ふ様になりました。バラックの方の學校は先生が障子を張つたり、水をまいたりして居る様な有様です。室の中へ入るのも下駄で机もふたが開かなくて襪の方から本などを

入れるのです。本當に不自由な事も有りませが。さういふ所でも立派な學校でも同じですからさう勉強して居ります。先生達のいらつしやる所も私達の居る所も少しもちがひません。先生は私達に一生懸命に教へて下さいます。

(三)

私の家が愛宕下へ越したのは二月三日でした。もう大てい家が建つて居りました。家は入へん學校に近くてずる分便利です。

その中にもうこちらには二階家が出来、向ふにはきれいな西洋館が今盛に建つてゐると言ふ様に、あちらでもこちらでも一軒二軒とだん／＼ふえて來ます。その中に銀座通りなどは建たない家はない位。白木屋も三越も立派に建ちました。

もう少し東京が復興しましたら、ぜひ見物に入らして下さい。今度越した家は水道も近く、お湯もちよつと行けばすぐです。もう知つて居る家など皆建ちました。始めはどこへ行つても家がないので心細く思つて居りましたが。此頃は早くすつと／＼立派な東京が見たいとそれを望に思つて一生懸命に勉強にはげんで居ります。今朝は又早くおきて復興の町を見て歩きました。もうどこもきれいにおさうじをして有りました。小僧さん等はあせを流して表をはいたり、自轉車をふいたりして居ました。かうしてきつともつと／＼立派な町にするのです。さう思ふとうれしくて

早く立派な帝都が出来ればよいと思はない日は有りません。
節子さん。もうすぐめんじやう式ですね。あなたはきつと優等でせうと思つて居ります。ぜひ
知らせて下さい。私もどんなわるともお知らせ致しますから、おひまが御座いましたら手紙を
どうぞ下さい。皆様によろしく。

童謡 三題

○地震

土の下から

もちあげる

お前はえらい

力もち

土の上では

おほさわぎ

みんなお前を

きらつてる

○えりまき

からだの長い

えりまきさん

お前のお國は

どこなのよ

きつと絲屋の

たなの上

○風

がたく／＼がた

うちの障子

うごかすだあれ

かぜの子／＼

かぜの親

あんまりた／＼くと

やぶけるよ

芝 區

バラックに同情して

芝區 南海尋常小學校

第五學年男 石川 勇

天地もくつがへらんばかりの大地震、町も村も野も山も皆一なめにする勢ひだつた大火災、親は子に別れ、子は親にはぐれ、何萬といふ人も一たまりもなく殺したあの悲惨事、其の慘劇のすんだ關東の焼野原へ出来たバラックは、その當時非常にもてはやされたのが、今では何といふみじめなふりをしてゐるのでせう。それはかうである。

一般普通の人は勝手なものである、僕は人として人間の悪い所を言ふのは言ひにくいけれどもあまりだから話す。

元來バラックと云ふものは餘り住み心地のよいものではないが、食ふものもなく住む家もなく着る物ともなかつたやうな時であつたから、何とも思はなかつたらうが、復興の叫と共に贅澤心も復舊した。其の爲に可愛相にもバラックは日一日とぎやくたいされて行くのである。僕が若しバラックであつたなら、東京地方裁判所へ持ち出して、バラック居住者にあはをふかしてやらう、そして次の様な證文を取つてやらう。

一、バラックを冷淡にあつかはぬ事。

一、バラックに對して相當の禮儀を以て恩を謝すること。

右條々堅く約束仕候也。

月 日

バラック殿

バラック居住者 印

だが、それもなるまい。僕がいくら噪いでもだめだ。其の事は斷念しなければならぬ。これはすこしの間のつとめだけすめばよいのであるから、まあ、我慢が出来るであらうが、若しこれが後々までずつとつとついたらとても辛抱が出来ないだらう。

何と可愛想ではないか、僕は同情しなければならぬやうな感がある。まして此の頃はよけいである。それは人ばかりではなく近所の本建築の家にも見くびられながらいぢめられるからである。

思ひ出の多い大正十二年

芝區 南海尋常小學校

第五學年女 木島 ティ

私が外を歩いてゐて少しでも斜になつた家があると、すぐ思ひ出すのは九月一日である、あゝ

思へば大正十二年は本當に悲しい又恐ろしい事の多かつた年であつた。バラックを見ても矢張り悲惨な有様があり／＼と目の前に見える様である。あの災害の時からよほどたつたけれ共、まだあの恐ろしかつた事が私の胸からはなれない。一夜の内に此の都會が灰となつたのかと思つたゞけでも心細くなる。私達はこのやうな完全な家や學校で何不足なく暮す事が出来るが、あの簡單なじめ／＼したバラックで勉強してゐる下町方面の人々はどんなにか不自由勝でせう。又北風の吹く冬の日などにはどんなにか寒い事でせう。

あゝ思ひ出の多い十二年もはやすぎてしまつた。これからは皆心を合せて帝都復興の道につくして元よりも立派な首府にしようではありませんか。

大地震

芝區 白金尋常小學校

第五學年男 小山田正(十二歳)

朝から曇り勝ちであつた、其の九月一日。

大日本の首都の大東京や、横濱、小田原、鎌倉等を、ほとんど全滅といふまでにした大震災が來やうとは。誰が知つてゐたらう？

其の日母と姉は、あいにく買物に神田にゐらしつた。僕は學校の始業式に行つて、久しぶりに諸先生や、友達に會つて、十一時頃歸つて來た。御飯の支度が出來て、食べやうとする刹那の瞬間、突如として來た大地震で僕の家では、父の「早く外に出ろ！」といふ聲で、我を忘れて飛出さうとしたら、大きな地割が僕の行く手をさへぎつた。それもかまはず飛出した。其のうち、舎生さんや加藤さんも出て來た。「此のテニスコートなら、ふみかためであるから大丈夫だ」と姉達と一先づ落着いた。餘震はどん／＼來る。やがて東北の方に當つて、黒煙が上つた。火事だ。「地震ですつかり、水道の鐵管が破裂してゐるだらうから、消火も出來なからう。」と考へた。と、「お母様の事が考へ出された。どうだらうと思つてゐた時、母の顔を門の所に見た時の嬉しさは／＼と／＼拙い筆には書きあらはせない。其の夜、品川の鐵橋上から、東北の方を見れば、東は本所、深川邊から、西は芝邊迄一面の火の海だつたさうだ。

あゝ、この大震災大火災で、我が東京や、横濱、小田原、鎌倉等は、ほとんど全滅したのである。如何に、天災だからとはいへ、人間の力でこれをどうする事も出來ないとは情ない。僕等今の小國民は、大きなくつてから、此の耐火耐震法を考へ出す大責任をしよつてゐるから、うんと勉強しなければならぬ。

夜 警

芝區 白金尋常小學校

第五學年女 朝比奈 美與子

目をさますとお母様はお兄様を起していらつしやる。私は思はず大きな聲をして笑つてしまつた。お兄様つたら宵の中のお約束も忘れてしまつて、うんと大きなあくびをして立上つた。「どうもお待たせいたしました。ようやく目をさませました。」とお母様は笑ひながら立關で塚本と書いたちようちんを持つて立つていらつしやる塚本さんの小父様におつしやつた。「いやお眠さうですねお氣の毒で」と小父様は寢ほけ眼のお兄様をながめておつしやる。お前これを忘れない様にとお母様はたき物とお菓子の包みをお渡しになつた。二人は寒さうに首をちぢめて出て行つた。辰も起きて来て戸をしめながら「大變でございますね」と云つた。私が又寢ようとするとお母様が思ひ出した様に何かの包みをお兄様の所へ持つて行く様にとおいひつけになつたので無理に辰と家を出た。「美與子、風を引いても知りませんよお兄様にちやんと渡していらつしやい」といふお母様のお聲も強い雨風にさへぎられてよく聞えない。カチ／＼と拍子木の音がした。今まで暖いふとんの中に入つてゐた私の體は厚いマントのすきまから冷い風がしみ通つて、たまらなく寒い。傘も吹飛ばされさうなこんな晩にカチ／＼たいて歩くのはさぞいやだらうと思つてゐると番小屋の百燭の電燈が今まで暗い物を見て来た日を射る様に輝いてゐる。中では眞赤に火がおこつてゐた。

私はお兄様に包みを渡すと、いやがる辰を引止めて、いつまでも火にあたつてゐた。しばらくすると廻つて来た人が歸つて来て、兄様の番になつた。いやさうに立上つた兄様が「こんな晩にはどろほうの方でも遠りよするだらう」と言つたので、三四人の人が笑ひ出した。辰と私は兄様について家の方へ歩き出した。坂を上つて家の前に來ると、私が力をこめて二三度たいたので、母様が戸をあけて下すつた。

母を待つ僕等

芝區 櫻田尋常小學校

第五學年男 鎌 田 利 正

僕はいつもの通り元氣よく只今と云つて立關を入つた。何だか何時もとはちがふ「お母さんは」と妹に聞いた。妹は「お母さんは鶴見の親類へいらつしやつた」と云ふ。僕は何だかがつかりしてしまつた。妹は母さんが三時にバンをおたべといつたと云つて出して來たので、妹や弟と仲よく

たべた。が家の中がひつそりして淋しい。

いつもはおいしいパンもあまりおいしくない。其の内に晝寝をしてゐた下から二番目の弟が起る。僕と大仲よしであるが、寝ておきた時は機嫌が悪くて、「お母さんく〜」と泣聲で云ふ。お母さんのゐないのを知らないのか、僕も學校から歸つて來た時はさうだつたと思ふと、小さいだけによけい可愛想になる。

だき起してやつたが泣き止まぬ、仕方がないからお菓子をを持たせて外へ連れて出た。外は人通りがすくなくさびしい。

僕は農商務省舊館爆發の跡を通ると、脊中で「いや〜」と云ふ。

僕が「犬が來たく〜」と云ふと又だまる。やつときげんがなほり、家へかへつてくると家の中はもう暗らい。電氣を點けてからやつと下してごはんをたべさせたりして、やつときげんをとつたがあきてきて、「まだ母さんはかへらないの」など云ふ。

其の内寝てゐた赤んぼうは、おきてわ〜と泣き立てる。弟は泣く、僕は本當に困つた。かけるたの事を思ひだしてつくづく、そりやうばかりうきものはなしと思つた。

けれ共泣き出してゐるものですから、うちすててもおけない。しかたがなくおち〜をやる。僕は弟におぶへと云ふと赤んべと云ふ。

又けんくわかと思つてやめて、しかたなく自分でおぶつた。其の内に玄關に足音がする。皆はばかに大きな聲で「おかへりなさい」と云ふて大喜びである。妹などははねてゐる。赤んぼうをおぶつてゐる僕は大きな元氣のよい聲は出なかつた。

可愛らしいインコ

芝區 櫻田尋常小學校

第五學年女 山本花子

私の一番すきなものは五六年前、兄さんがお店のかへりに、買つてゐらつしやつて、今私の可愛がつてゐるインコと云ふ鳥である。あの恐ろしい九月の震災のときは、もう可愛がつてゐるインコなどのことは一寸も氣が付かず、さあ〜にげようとしたとき、花ちゃん〜といふお母さんのよび聲に、ふだん花ちゃん〜といふインコの事を思ひ、私は早く兄さんにインコを〜といつた。あ〜さうだといふて助に行つて下さつたが、其の當時は餌がなくてどんなにこまつたかしれなかつた。その時に矢張り鳥を出した人がおこまりでせうと餌を下さつた。私は其の時うれしくてお禮を云ふ言葉も出なかつた。今はもう元通りいせよく、「花ちゃん〜」と鳴き方も上手になつて時々私はハイイといつて見ると、インコが鳴いたのである様な事が度々ある。又「もし〜おは

よう。桃太郎さん等いろ／＼しつてゐて、大變にかはいゝが、たゞ一つにくい事がある。それは私がいつても「キヤア／＼」と聲高く鳴くばかりです。すこしもなじんでくれない事です。私はなぜなれないのかしらとなさげなくなる。

私は姉さんになれる様になつたのは、姉さんは餌をやるからだと思へて、私がやらうとすると手を食ひつきさうにする。

私は姉さんに私に餌をやらせないで、自分になれさせようと思ふのネーと云ふと、あまり花ちやんがしつこくするからよ、とおつしやつた事もあるが、しかしきはれるとなほなづかせたくてならぬ。

やつこだごを上げた時

芝區 南櫻尋常小學校

第五學年男 田中庸政

さ／＼と風が吹くたびに、やつこだごが、だん／＼上つて行く、くるりと一廻り、やつこさんはすました顔で、又空高く上つて行く。糸をすつかり出してしまつた。空を見るとあんな大きなやつこだごが、豆つぶの様に見へる。もう向ふの大通りもこしたであらう。あつと思ふ間もなくくる／＼と四五回まわつた。やつこだごはこわい目で僕をにらみつけながら、さもおこつた様に、又上つてゆく、下からお母さんが百人一首をするからおいでと言つたので、急いでたごをしまつてはしごだんをおりて行つた。

弔辭

芝區 南櫻尋常小學校

第五學年女 片岡まつ子

今日は村田先生と此の世をお別れする悲しい日であります。先生には永らく／＼ごやつかいになりましたが、地震以來此の世の方ではなく、地下の人となれました。あゝなんと悲しいことでございます。先生にごやつかいになつてゐる時分は三年の頃で非常にお骨折り下さいました。今其の頃の事があり／＼と目の前にうかんできます。あの暖い二階の教室で私達のすきなおとぎ話の本をお読み下さつたり、又體操の時などは大きな聲で勇ましく號令をおかけ下さつた、あの元氣な御様子などを考へると、先生はともおなくなりになつたとは考へられません。

私達は毎日先生のお顔を見て、楽しく勉強してをりましたが、もう二度とお顔が見られないかと思ふと、一そう悲しくなります。思へばあのおそろしい大地震がなかつたならば、毎日楽しく

先生のお顔を拜する事が出来たのに、あゝあの大地震がうらめしくてなりません。これからは先生の生前の教を守りよく勉強して、よい人になつて、先生のお恩をすこしでもおかへししたいと思います。どうか先生静かにお眠り下さい。

都の朝

芝區 芝尋常小學校

第五學年男 矢野茂雄

大東京市の三分の二はバラックである。

夜のバラックの町は電燈がちら／＼としてゐる。どの電燈も／＼皆強い光を大道にてらしてゐる。はるか向ふの方に焼けた大きな建物が、バラックの中からにゆうつとつき出でゐる。横ちやうから夜警の人が拍子木を打ちながら來た。夜はだん／＼明けて來た。バラックや方々の家々から白い煙が出て來た。上へ上らうとすると風が來てみだされる。又後から來た煙が散らされる。だん／＼明けて行く内に人々が皆自分の務めをしに行く、通りは、荷車や自動車の後から後から往來してゐる。僕等が學校へ行く時分には職業紹介所にはたくさんな労働者が集つてゐる。其の人たちはそれ／＼自分のつとめに向つて行くのだらう。

此の頃の私の家

芝區 芝尋常小學校

第五學年女 平子貞子

私の大すきな田舎者の正ちゃんは、地震の爲に去年國へかへりました。

それまでの私の家はどれほどにぎやかだつたでせう。正ちゃん一人の爲に家中がよけい明るかつたのが今ではまるで火の消えたやうになりました。

田舎からぬけ出たばかりなので、少しほんやりですが少しもなまいきな所がなく、よく主人の云ひ付けを守つて働きました。又何でもかけひなをしない正直者でした。が、ふざけ出したらばかぎりが無いほど、ふざけて家の人たちを笑はせました。

ですからお父さん、お母さんを始め家の人たちからは、皆可愛がられてゐました。お父さんは「あんな働き者は又とない」とおつしやつて、よろこんでゐらつしやいました。

お母さんは心ばいなさつて手紙をお出しになりました。けれ共始めて東京へきた正ちゃんはつく／＼いやになつたやうな返事でした。

私の家のこのさびしさも、皆震災が生んだのだと私は本當にかなしくなりました。

新しい校舎に移った時

芝區 西櫻尋常小學校後

第五學年男 松田 滿

十二月三日……あゝ其の日は僕にとつては真にうれしい日であつた。丁度一時間目の終りに先生が、「此の時間にすぐあちらの學校に行きます」とおつしやつたので僕等は思はず聲をあけて喜んだ。僕等が芝公園を列を造つてあるいてゐたのは間もない事であつた。間もなく學校に着いた。そこで校長先生からいろいろのお話をきき、其の日はそれで歸つた。翌日いよいよおどる胸をおさへながら電車を神谷町で降り、學校の校門をくゞりて自分の教室に入つて見ると、驚いた。何もかも皆新しい物ばかりか僕等の方の教室は南向であるから、折からかゞやく太陽の光線はことゞく室内にそゞいでゐる。僕は其の時、「此の新しい校舎で勉強するのに、他の學校の成績におとるとははなはだ残念である」と思つた。

豆まき

芝區 西櫻尋常小學校

第五學年女 酒井 リキ

今日は節分の日です。毎年くゞきまつて私の家では兄さんが大きな聲で、鬼は外福は内と云ひながら豆をバラくゞとまきます。去年の節分には金刀比羅様に行つて、豆を頂いて來ました。節分と云ふのは寒が明けた日だと云つて居ります。私は齒が悪いので自分の年だけしかたべませんが、姉さんや兄さんたちはおいしさうにたくさん食べて居ますが、よくそんなに食べてお腹を悪くしないといつも思つて居ます。

昨日から神戸の兄さんが來てゐるので、今年の節分はきつとにぎやかだと思つてゐます。

我が希望

芝區 臺町尋常小學校

第五學年男 鹽澤 茂 (十三歳)

現在の僕の希望は五年を修業して六年生になり、小學校を卒業して首尾よく中學に入學したいといふことである。僕は將來軍人となつて國家の爲に盡し度いと思ふ。それは僕の父母の望む處でもあるから、此の目的を達する事が出來たら親にたいして孝行になるわけである。それにはまづさしあたつて、前にのべた希望を達しなくてはならない。幸にして一年生の時から先生方の御

熱心なお教へによつて、五年生も終はらうとしてゐる。この三學期の試験はどんな成績を得るだらう。それにも増して僕の心にかゝるのは、六年生から中學校の入學試験である。本當に此の四月からはしつかりしなくてはならぬと思ふ。さう思ひながらも中々勉強が出来ない。然し僕の兄さんたちは、日夜僕の勉強をはげまして下さる。兄さん達の怒ることは僕には非常に薬になる。僕は親に對しても先生に對しても、此の兄さん達に對しても、どうしても立派に中學に入學し、進んで最後の目的である軍人となつて、立派に國の爲に盡くさなければならぬと覺悟してゐる。

兄いづんに

芝區 臺町尋常小學校

第五學年女 伊藤佐喜代(十三歳)

九月一日の大震災が、どんなに世界の人を驚ろかした事でせう。それにしても私共東京市の人々のその時の驚きはどんなにあつた事でせう。

その日の正午を報ずる二三分前、近くで自動車か幾臺も走る時の様な地響がしばらくつゞいたかと思ふと、左右にゆれる震動は、家をつぶし塀を倒しすべてのものをころがし破壊しました。そしてあの悪火を何十箇所となく同時に起しました。

夜にいつては空を眞赤かにそめて、あのにぎわしかつた下町がたちまち火の海と化しました。時折、

ど、ど、どーんといふばくだんの音がきこえる。かくして恐ろしい夜は明けました。

明くれば九月二日、時々ゆれる地震に、私共の小さな胸はおそろしさに一ぱいでした。家ではお姉さんや、お父さん、お兄さんの様子がわからないので、大さう心配してゐました。その日お姉さんは本所へお裁ほうに、お父さんは日本橋の方へ御用に、お兄さんは京橋にお出かけになつて居たのです。すると四日の朝、お父さんがしよんほりとかへつていらつしやいました。私共一家はなんとも言ひ様のない嬉しさで、しばしうれし涙をながして喜び合ひました。

しかしまだ、お姉さんや、お兄さんの行方がわかりません。家では又心配しました。二三日たつて、やなかのをぢさんがたづねて来て、お姉さんがをぢさんの家に居ることをつけました。その時の喜びもお父さんの時の喜びと變りは有りませんでした。

が、まだ心配なのは兄さんの身の上です。兄さんは二十一歳で、家の相續人です。大變私をかはいがつて下さいました。私もまた兄さんがすきでした。兄さんはよそへ行た時はきつとおみやげをもて来て下さる。その兄さんの行方が知れないのを、なんで私がいしなないでをられませう。

だんく日はたつて、早や一箇月になりました。が私の待つてゐた兄さんはずつてきませんもう一ヶ月、それもむだでした。三ヶ月五ヶ月たつてもまだかへつて来ません。

幸福な春を迎へた家も有るでせうが、私の家では不幸な春を迎へなくてはなりませんでした。

あゝ、今頃兄さんはどこにゐらつしやるでせうか、その事をかんがへると、たまらなく悲しい心持がいたします。

これも運命とあきらめる外はありません。でもあきらめてもあきらめられないのは兄さんの行方です。

雪の朝

芝區 三光尋常小學校

第五學年男 中村正夫

「正夫、起きなさい」母の聲に暖いふとんから離れると、何となく寒気がする。時計を見ればまだ六時、室内はしんとした。電燈の光が名残惜しさうにてらして居る傍ではまだ妹達がすやくと眠つて居る。時々勝手元の方で母が食事の支度をする音が聞えてくる。さつそく雨戸を明けた、目もさめるやうな雪、その目に寫つた庭の景色は、何とも云はれぬ程であつた。眞綿をち

ぎつた様な雪は早、庭をうめつくしてしまふ。其のとき僕の頭にうかんだのは、竹馬のことであつた。この間からしてやつと出来上つた竹馬。いよく使用する時が来たのかとうれしくてたまらぬ。外へ出て見るとまだ人通りが少いので、その足跡もすぐにかきけされてしまふ。あゝ誰か下駄の雪を落して居るらしく、こつくと音がする。見て居る内にも雪はなほくすんく積つて行く。ひゆー一きは、強い風がほうをかすめた。

「おゝ寒い」思はず首をぢぢめた。

工場の汽笛がゆつたりと雪の中から響いて来た。實に氣持のよい朝だ。

一月二十六日

芝區 三光尋常小學校

第五學年女 毛利文枝

勇しい音のする大空をふり仰ぐと、今日のおき日を御祝する幾臺かの飛行器が、朝日にあたりながら、うれしげにとび交して居りました。私はそれを見ながら知らぬ間に學校の前につきました。十時十五分これは宮中で御成婚の式が行はれる時間で、幾日前から私共がお待ち申上居た事でせう。

式場にはいつもの通り白い幕を張つて、國旗を立て桃色のお花がかざつてあつた。お客様方がおいでになり、先生方もお並びになり、何となく心が改まつた様に思はれました。

やがて式が始まり、君ヶ代を一齊に歌ひ終る頃かすかに、しづかな空氣を破つて號砲がひびいて來ました。「今だ」と心の中で思ひ敬禮して、心から兩殿下の幾久しく御幸福であらせられるやうに、おいのり申上りました。昨日お父さんに見せて戴いた繪葉書にあつた皇太子殿下の御勇ましき御姿と妃殿下の美しくおやさしいお姿とを、心にゑがきながらおほえずよろこびの涙がもやうされました。間もなく式も終へて、正門を出ると町内の方々が萬歳をとなへて歸るところでありました。あゝ大正十三年一月二十六日、此の日は私共國民にとつて忘れることの出來ないおめでたい日であります。

或る日の叫び

芝區 聖坂尋常小學校

第五學年 松澤和男

雪降る冬も段々と春の色香に變つて行く。太陽も暖く僕等を照す、吹く風も氣持よい。満天には白雲一つない。満目の地皆暖さうである。鶯もびーびーよーろ〜と我等を眼下に見て廣いつばさで風を切つてとんで行く。天氣のよい今日は目立つて影を地上に寫して居る。もう十二時だ。工場の汽笛もあちらこちらで鳴り始めた。其の汽笛はさわがしい中に尙目立つて聞える一しよに僕も叫んで見よう。

灰になりたる東京も

新に出來たる其のときは

最も大きい世界の都

遠き國々となりの如く

我等未來の少年が

造り上げた其の都は

永遠の幸福を保つ………都なり。

震災の思ひ出

芝區 聖坂尋常小學校

第五學年女 高橋靜江子

大正十二年九月一日、それはどんなに私たちの胸に深くきざみ込まれた年であらう。見事に咲い

た櫻が散つて葉櫻に初夏を迎へ、夕方涼しい河岸を散歩しながら過行く夏を送つたときまではいつもの年とちつともちがはなかつた。九月一日學校へ行つて、新學期の覺悟をきめて家へ歸つた其のときから凡ては變つてしまつた。大地震、大火事、人々のさげび聲を耳にきながら、たゞあつけにとられて、私は父母や兄弟たちにはぐれまいとして逃げた。舟に居る間もたゞおそろしさにふるへてゐたのだつた。舟を出たとき私は一さうびつくりした。餘り東京が變つてしまつて居たから、街もない、道路もない、燒鐵骨や燒石や、燒土ばかりそこには生命をなくして倒れてゐる人もある。夜がくればろうそくさへなくてほんとの暗である。隣の人さへ手さぐりでなければわからない。東京は終るのかと思はれる程だつたのに、けれど私達は悲しまなくてもいい、皆一生懸命に新しい東京を建て、くれるから。復興院の仕事は思ふ様にならないさうだが、誰か々東京を立派にしてくれるだらう。銀座やその外目抜の場所へ行けば、もう空地など探したくてもない、皆東京の復興に東京へ歸つて働いて居るのだ。今度出來上る東京こそ東洋第一の名に恥ないだらう。私はその東京を望んで居ます。

吾等の覺悟

芝區 愛宕尋常小學校

第五學年男 竹中市郎

九月一日の大地震に次いで起つた大火災のために、東京の大部分は灰となつてしまつた。何と悲しい事であらう。泣いてもくゞ泣き、れないほどである。而し我等は日本男子である。涙など流して居る時ではない。我等の力を試すのは此の時である。

僕はある昔話の本で、百鳥の王と言はれる鳳凰といふ鳥は火の中にとび込んで、其の燒跡から前よりも若い美しい姿になつて出てくるといふ事を見た事がある。僕は此の灰の中から生れ變る東京は、鳳凰の様に前よりもすつと立派なものになることと思つて居る。僕は先生や父から復興の話聞く度に、おどり上る程うれしく思ふ。道路でも、家屋でも、公園でも皆前よりもすつと立派なものになるとの事である。ほんたうにうれしい事である。

僕はまだ少年であつて、復興の爲に力をつくすことの出來ないのは残念でたまらない。けれど共大人になつてからつくすべきことは澤山あるにちがひない。今の内油断なくつとめはけんで、立派な市民となり、ますます立派な大東京とする事に力をつくす覺悟である。

近況を通知する文

芝區 愛宕尋常小學校

第五學年女 青野美才枝

喜代子さん、大變御無沙汰いたしました。御變りは御座いませんか、私は毎日元氣で通學をして居りますから、御安心下さい。

此の頃は東京も大分復興して参りまして、あつちにもこつちにも、つくしんぼうが首を出したやうに、一日々々と家がふゑて来るのを見ると、非常にうれしく思ひます。私の家の前も此の間から電車が通る様になりましたので、大變にぎやかになりました。

去年の十二月の始め頃焼跡に、バラック建の學校が出来ましたので、今では其の校舎で學んで居ます。バラックですから大變寒う御座います。又不便なことも多う御座いますが、自分達の學校だと思ふと、一生懸命に勉強する氣になります。よそへひなんされた同級の人達もほつ／＼歸つていらつしやつて、今では三十人程になりました。

喜代子さん、あなたには何時頃こちらへお移りになりますか、百合子さんや茂子さんといつてもあなたのお話で、早くおもどりになる事をお待ちして居ります。

二月十日

青野美才枝

加瀬喜代子様

春を待つ

芝區 高輪尋常小學校

第五學年男 石田英廣

毎朝手水鉢に厚い氷が張つてゐるのを見ると、春の來るのはまだよほど遠いやうに思はれるが天氣のよい眞晝頃に、地面から水蒸氣がどん／＼蒸發して行くのを見ると、もう海に向ふまで來た様だ。あの楽しい春がまもなく來るかと思へば、僕は嬉しくてたまらない。春になつたらつみ草にも行かう。花見にも行かう。そして思ふぞんぶん僕の元氣をあらはさう。あゝ楽しい春はもうすぐ來るのだ。

節分

芝區 高輪尋常小學校

第五學年女 鹽原慶

もう出來たく、と云ふ弟の聲を先にして、大きな柵をかへてお父様がゐらつしやつた。神棚の上へおあかりを上げて、

芝區

「福は内、鬼は外。」

と破鐘のやうな聲をだして豆をバラ／＼おまきになつた。弟や妹はきやつ／＼と笑ひながら、その豆を拾つてはまきまいては拾つてゐる。此のさわぎだけでもたいていの鬼は逃げてしまひさうだ。いつもこたつであたつてゐる玉までがさわぎに驚いて、出て來ると弟は福は内、鬼は外鬼の目をぶつつぶせと玉を追ひまはすので、かわいさうにこたつの中にもぐりこんでしまつた。

しばらく家のものは、アハ、、、オホ、、、。

もう福の神が舞込んでゐるのだらう。

風

芝區 神明尋常小學校

第五學年男 橋本恭治

面白い夢をば見てゐた僕は、ヒューといふ音で目をさまされた。風が強いので家が動いて、タン屋根が少しフワ／＼してゐる様に思はれる。時計はもう七時廿分となつてゐる。

便所に行かうと思つて外に出た。風はもうれつで砂がうづをまいてゐる。今日は何といふ風の強い日であらう。こゝでさへこんなだから、まだ家の建たない所は、どんなだらう。朝飯を済して

學校へ來た。途中電車通りへかゝつた、風は一層もうれつな勢で僕をば送る。あつと叫ぶ間に、ほ／＼をもつて行かれてしまつた。僕は驚いて帽子のあとを追つかけた。つかまりさうになると又飛ばされて仕舞ふ。二十間程追ひかけて、やうやくつかまへた。ふと見ると一人の老人もほ／＼しを飛ばされて困つてゐる。僕は拾つてやらうと思つてゐると、丁度僕の前どころがつて來た、直ぐに取つてやつた。老人は喜んで、どうも有難うといつて、風に吹きとばされてゆく様に行つてしまつた。

通りの風はすごいもので方々で、「ヒュードスン、バチャン」と音がきこえる。神明通りに來た方々の店にかゝげられた、

小さいかんばんはガラン／＼と動いてゐる。

やうやく學校に來たが、まだ七八人しか居なかつた。學校が終つて歸る時分にはもう風はやんで居た。

なつかしい我が學びや

芝區 神明尋常小學校

第五學年女 内田百子

なつかしい。私達の學びやは大正十二年九月一日の火災にあつて、つひに焼けてしまひました。長く夏休みが過ぎて、一寸始業式をしたのがあの學校とお別れの式でした。

思ひいだせば、近頃になつて學校は進歩いたしました。理科室が出来たり、運動場がコンクリートになつたり、又一番私達の嬉しかつたのは、バスケットボールや飛臺や唱歌の時は、ピアノで愉快に歌つたりしたことで、小學校としては過ぎた程良く整ひました。その學びやで楽しく學んだのもつかの間でした。

あの廣い教場で先生と何不足なく學んでゐたのも、夢の様な思ひ出となりました。今は此の櫻川のバラックで勉強を致して居ります。ふし穴から冷たい風が入つて來たり、床がぬけたりすると、元の學校を思ひ出します。

普通の様にして居りましたが、今の此の不自由を思ふと一入こひしくなります。なつかしい學びやはなくなりました。

しかし私達は幸福です。それは校長先生を始めすべての先生方は前と變らず、私達を可愛がつて下さいますから、せめて元の場所へ早く歸りたいと思ひます。

學校はバラックでも、私達は一生懸命に勉強して元の卒業生にも負けずに良い成績をとりたいと存じて居ります。又震災前の様な立派な學びやが早く出来る様にと、日夜神に祈つて居ります。

となりのよし子さん

芝區 神應尋常小學校

第五學年男 本間 俊雄

學校から歸つてきて、がら／＼と門をあけると、となりの窓がすうとあいて鳩の様な目をしたよしさんが、いつもかうしにつかまつて「俊雄さん」と言つて、こちらをに／＼ながめてゐるので僕も「よし子さん」といつてしまふ。だつて餘りかはい／＼から、僕はそれだけではものたりない氣がするので、いつもそれから言葉をつけて「赤ちゃんは」ときくと、「今かあちゃんとねんね」とに／＼顔で、うれしさうにほ／＼えむ、「遊びにいらつしやい」と言つて、家にはいると窓をすうつとしてみると軽く軽い足音をさせてお母さんの所にかけていつた。内にはいつてから、かばんを下してはかまをぬいでゐると、がたん／＼とガラス戸をあけて、僕の妹の事を「まあちゃん」と呼びに來た。僕が「いらつしやい」と言ひながら、はかまを引ずりながら障子戸をあけると、きれいな繪本を一冊もつてちよ／＼とはいつて來た。

ひばちのそばに坐つて、半分ひらきかけた本をどちて、「この本今朝起きたらあつたの、よんでちよ／＼だ。」としきりに妹にたのんでゐる。「よんであげませう」と妹がひらかなを、とぎれ／＼

によむ。一枚ひらくと「この人よくばつて谷の中落ちたのね。」とかわい、聲で説明をしてゐる。「まあよしさんはよくしつてゐるのね。」といつたら嬉しさうに笑つて本をふせた。

雪の朝

芝區 神應尋常小學校

第五學年女 小林 幸子

ふと目を覺して障子を見ると、ほうつと明るい。随分寢坊してしまつたと思ふと同時に、柱時計がチン／＼と六時をうつた。

おやまだ六時なのに、どうしてこんなに明るいのだらう。

と往來の方から人の歩く音が、バサツ／＼と聞えて來た。續いて「随分積りましたね」と話し合ふ聲が聞える。「あつ雪た雪だ」と思はず叫んで飛び起きて、裏へいつて見ると、昨日に變る銀世界。庭や木の上屋根の上に綿でものせた様にふつくりと積つた雪は今盛んに降り積つてゐる。天から舞ひ下りてくるこの美しい花びらとも見える雪。いつまでも／＼見とれてゐた。

ふとお向ふの屋根の方に目をやつて、ほんやり見てゐるとまるでエレベーターにでも乗つた様な氣持がする。自分と向ふの屋根が上へ／＼と果てしなく上つて行く。こんなにどん／＼上つて

自分は天へ來てしまひはしなかつたかと、自分を見るとやつぱり元のお椽にたつてゐた。がらつと戸をあけて新聞屋が新聞を勢よくなげこんでいつた。見ると新聞屋は傘もささず、むしろをマントのかはりに身につけてゐる。氣の毒になつたので母に話して傘を一本あけた。

新聞屋は禮をのべて、向ふの角を曲つていつてしまつた。自分は嬉しくなつた。

同時にバラツクの人々の事が考へられた。

どんなに此の雪でくるしめられてゐることであらう。

今夜なぞどんなに寒い事であらう。雪はなほやまずに降つてゐる。焼けなかつた自分等はほんとに幸福だと思ひながら學校へと出かけた。

大震災の思出と災後の學校

芝區 芝浦尋常小學校

第五學年男 田 中 清

おひるの御飯を食べやうとすると、突然ぐら／＼とゆれはじめた。僕は驚いて「地震々々」と言つた。二階の窓から外を見ると、前の家はもうつぶれて居る。友だちがつぶれた家の中から悲鳴をあけてゐる。僕は助けてやりたいが地震の最中どうすることも出来ない。たゞどこへ逃げよう

かとうろたへるばかりだった。地震の止つた時「さあにけよう」といふお父さんの聲がした。おりようと思つたが、二階のはしがぐらくして下りることも出来なかつた。

ついで第二回の地震があつた。前の地震より一そうはけしく感じた。二階から下りて外へ出た。外はもう一ばいの人で歩くことも出来なかつた。やうく芝公園までにけて来た。芝公園も人で一ばいだつた。その夜は野宿をすることになつた。

朝になると腹がへつてしやうがなかつた。食物を買ひに行つたが、どこでも賣りきれでなかつた。やうく玄米を買つた。又不安なひるがすぎた。其の夜も芝公園でねた。眞夜中になると氣味が悪いのと、うすら寒いので眠られなかつた。うとくして居る中に人々が〇〇人が来た、と、とのしる聲がした。中には「〇〇人が来たならばぶち殺してやる」など、力んでゐる人もあつた。どん／＼といふ音についで、どぶんと水の中へとびこんだやうな音が聞えた。同時に「わあ、つ」と時のこゑがあがつた。僕は驚いてお父さんをよび起した。お父さんも驚いて起きた。芝園橋へ行つて見ると大勢の人が棒や劍などをもつて、川の中をさがしてゐる。中には石を投げる者もあつた。お父さんが「何ですか」とそばの人にきいたら、〇〇人がピストルを放つて川の中へ飛びこんだといふことであつた。かうして二日は過ぎて行つた。バラツクにおちつくまで、すこしおちつくやうになつてから、公園のすみに小屋を立てたが、雨がふれば水がもつて、ねることも出来なかつた。やうく十月ごろバラツクには入つた。はじめは友だちもなくてつまらなかつたがこのごろは友だちも出来、バラツク生活にもなれていつもおもしろく、らしてゐます。それでもやけあとがこひしくてなりません。おもしろくあそんでゐる時でも、焼跡のことを考へると、遊ぶのがいやになつてしまひます。

災後の學校

僕は今まで日本橋の濱町小學校へ上つてゐましたが、震災後芝浦小學校へ上りました。はじめは先生も生徒もはじめてなので、あそんでもおもしろくありませんでした。近ごろは先生にも、生徒にもなれて友だちも出来ました。

はじめはてんとの中でべんきやうをしましたが、もう學校も出来て、らくにべんきやうをしてゐます。このごろは給食といつて、學校で御飯をいただきます。大ぜいの友だちと一しよに御飯をいたゞくのはほんとうに愉快です。

又横がはに教室ができますので、なほらくにべんきやうができます。僕はそれをたのしみにしてゐます。

大震災の思出

芝區 芝浦尋常小學校

第五學年女 谷口發世

私がいつも思ひ出すのは大震災火災の事であります。九月一日學校から歸て來て、一時間ばかりたちますと、家では御はんのしたくをしてたべようとしてゐる時に、おかあさんが、「はつちやん、地震ぢやないかい」とおつしやつた。ちようどその時おもてを貨物自動車を通つてゐましたので「自動車でゆれたのでせう」と言つてゐる間に、ぐらくとゆり初めました。するとうちの弟たちはわあくなき出す。たなからはいろくな物が落ちて來る。うちの中はがらくどつしやん「わあくわあく」と、まるできききたいです。ゆりがだんくはげしくなると、「おもてへでろ」と云ふので、やうやく弟をだいて飛び出した。むろんはだしであつた。その時人々が一せいに「つなみだあく」とさはぎます。私はおつかなびつくり二階へ來ると、又ぐらくとゆり出します。

その中に「火車だく」の大きさはぎ。それはうちから一町ばかりはなれた所そのままでした。そのうちにしようぼうがかけて來て、やうやく消へた。すると深川の方からばつと火のけがたつた。「ほら火車く」とまたどなる。そのうちに水は出なくなる。火事は方々から出る。「今はどこがやけてる」など、人々はうはさをしながらも心配で、ぶるくふるへてゐるばかり。まあつなみはなかつてよかつたなど、話してゐるうちに、日は暮れかゝるが家へはいれない。仕方がないから電車の線路へたゝみをもつて來て、そこへ歩いてすはつて御はんを食べ、ねる仕たくをして「早くねろく」、火事が來たら親子もろともだ」と皆くちんぐにゆふ。私はかなしくてしかたがないから、教會でならつた讚びかを思ひ出して、「主われをあいす主はつよければ、われよはくともおそれはあらじ」とうたつたが、火事はおさまりさうもなかつたので、家では船をかりようと思つて方々さがしたが、船はもう一さうもなかつたから、私はどきようきめてそこでねた。

そのうちに夜もはや九時頃となつた時に、お父さんが「發世く」とゆり起したので、私は何事が起つたかと思つていそいで起きると、おどろいたのおどろかないのつて、話に出來ない程でした。火はもう月島へついたのでした。私はなくくおとうとおぶつて、お母さんとゆかた一枚で飛び出した。どこへいかうと思つても、あちらもこちらも火の海のやうである。仕方がないから越中島をさしてにげたが、そこにも火がえんくと立ち登つてゐました。私は其の時あつと云つておどろいてしまつたのでした。

私共のにげる所は越中島よりほかにはないので、どこなりとにけられる所へ行かうとして、死物狂ひになつて、かなり長い相生橋を渡り初めましたけれども、人が一ばいでありませうからように渡る事が出來ません。

其のうちに月島の火はどんく〜とせめて來ます。やがて二時間ばかりたちますと、月島を一なめにして新佃島におしよせて來ました。人々は皆、「たすけてくれ〜」と悲鳴を上げてゐます。

火の手のおしよせるたびに、暑さがはげしくなつてむされるやうです。

深川から來た火は商船學校へ飛んでもえはじめました。其の時大ぜいの人が二階や三階から飛び下りてたほれる。其のうちに糧秣廠へ火がついたからたまりません。牛が火におそれてあれほうだいにあれまはります。「すいぶん人が死んださうです」など、皆自分の身を忘れて話して居ます。

間もなく「そら相生橋へ火がついた」と人々はみな悲鳴を上げて皆おしよせて來る。六月に生れたばかりの弟は火の附くやうになきます。私はそれをだましく〜やうやく相生橋を渡つて、ほとと一息ついたが、橋はもう中程がやけてゐましたので、こうしちやるられないと、今度は海へはいりましたが、だんく〜しほが上げて來て私は弟と共にもぐつて、頭からびつしよりになりました。其の時商船學校の生徒が來て救つてくれました。私は其の時どんなにうれしかつたでせう。そしてお母さんと二人でそこにあつた大船のりこみました。けれどもその船は人があまりたくさんのつてゐるので、うごきません。そのうちに火はどんく〜せまつて來て、中の島へ來ました。私共の船は中の島の短い相生橋の下にゐました。こゝへ火が來たらやけ死ぬんだ」と人々はさげんでゐましたが、幸にも中の島の人々が力をつくして消ほうにかゝつたので消えました。

バラックへ落つくまで

あくれば九月二日、陸へ上つて休んでゐるうちに、お父さんとはぐれてしまひました。しばらくして又私のすぐ下の弟が見えなくなりました。私とお母さんは心配しながら名をよびながらあちらこちらとさがしてゐるうちに、お腹がすいて來たので糧秣廠へいつて、肉のかんづめをひろつて來て、お腹をこしらへて一生懸命に弟とお父さんをさがしました。おひる頃になつてお父さんが見つかりましたので、皆で弟をさがしました。すると短い相生橋の上に弟がほんやりして立つて居りました。大よろこびでつれて來て、肉のかんづめをさがして、百ばかりひろひました。そのうちに日がくれかゝりましたから、大急ぎでぶりき小屋をこしらへて、親子其の中でねました。その氣もちのよいことつたらありません大さはぎなのに、氣もちがよいなど、言ふと、おかしいやうですが、前の日一晚中ねなかつたから、つかれが一度に出てよいきもちにねたのでした。あくれば三日の朝お父さんの知人が來ましたので、一しよにすまふ事にして方々から、いろいろの物をもつて來てたべてゐる中に、月島へ渡る船が來ましたので、朝早くおきて舟着場へいつて、船の來るのを待つて居りました。やうやく來たと思つたら、牛が海の中でもう〜とうなつて